平成 24 年度
教師海外研修プログラム（フィリピン）
報告書

2012 年（平成 24 年）

独立行政法人　国際協力機構

九州国際センター（JICA 九州）

＜目　次＞

はじめに

Ⅰ．研修概要
参加者リスト　……
派遣前研修スケジュールとその様子　……
現地研修スケジュールとその様子　……
帰国後研修スケジュールとその様子　……

Ⅱ．海外研修報告書
有馬　良紀　……
福喜　京子　……
溝口　啓子　……
福山　貴英　……
梅山　文　……
森　　浩三　……
田村　京子　……
東丸　直哉　……
久保　奈都紀　……
宿里　京子　……

Ⅲ．授業実践例報告書
有馬　良紀　……
福喜　京子　……
溝口　啓子　……
福山　貴英　……
梅山　文　……
森　　浩三　……
田村　京子　……
東丸　直哉　……
久保　奈都紀　……
宿里　京子　……
教師海外研修同行者より　……

※教員、および児童/生徒の原文を活かして掲載しています。一部表現や体裁のばらつきがありますがご了承ください。

※過去の実践事例を、JICA 九州のホームページに掲載しています。

http://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/index.html

はじめに

本報告書は、平成 24 年度に JICA 九州が実施した教師海外研修プログラムについて、海外研修及び授業実践の報告書をまとめたものです。
教師海外研修プログラムは、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教師、及び教育委員会の指導主事等を対象に、開発途上国がおかれている現状、日本との関係や国際協力への理解を深めるとともに、次世代を担う、児童、生徒の国際理解に役立てることを目的として行われています。

平成 24 年度は、九州各地から 10 名の教員の方々が参加され、日本との歴史的、地理的な関係が深いフィリピンを訪問して、「教育と格差」をテーマに研修を行いました。
事前研修では、フィリピン社会の概要、スラム街の子供の就業支援を行っている NGO の方の取り組み、また、ワークショップを通してフィリピンの現状を学びました。

フィリピン訪問時には、青年海外協力隊等の JICA 事業、及び事前研修で学習した、日本の NGO の活動現場を訪問し、現地の住民と交流を行うとともに、関係者との意見交換を行いました。
事後研修では、現地訪問で得たことを授業実践するため、国際理解教育、開発教育の手法、また、日本社会における社会問題との比較を行うために、北九州市ホームレス支援機構のご協力を得て、日本における貧困問題について学びました。

参加された教員の方々の真摯な熱意に敬意を表するともに、今回のご経験をさらに学校で活用され、グローバル化が進む世の中で、将来を担う子供たちの将来の糧としていただき、本報告書が教育現場で広く活用されることを心より願っております。

平成 25 年 3 月
独立行政法人国際協力機構
九州国際センター所長　勝　田　幸　秀

Ⅰ. 研修概要

◆参加者リスト

参加教員

	県	所属	氏名	担当科目
1	福岡	中間市立中間西小学校	有馬　良紀（ありま　よしき）	特別支援学級
2	長崎	西海市立瀬戸小学校	福喜　京子（ふくき　きょうこ）	特別支援学級
3	長崎	長崎県立長崎鶴洋高等学校	溝口　啓子（みぞぐち　けいこ）	英語
4	熊本	山鹿市立鹿北中学校	福山　貴英（ふくやま　たかひで）	数学
5	熊本	相良村立相良中学校	梅山　文（うめやま　あや）	英語
6	大分	別府市立別府商業高等学校	森　浩三（もり　こうぞう）	商業
7	宮崎	宮崎大学教育文化学部附属中学校	田村　京子（たむら　きょうこ）	英語
8	鹿児島	曽於市立末吉小学校	久保　奈都紀（くぼ　なつき）	
9	鹿児島	鹿児島県立志布志高等学校	東丸　直哉（ひがしまる　なおや）	英語
10	鹿児島	指宿市立山川中学校	宿里　京子（やどり　きょうこ）	英語

同行者

	県	所属	氏名	
1	福岡	JICA デスク福岡市	古賀　知美（こが　ともみ）	研修同行
2	長崎	青年海外協力隊（フィリピン）OV	木村　暁代（きむら　あきよ）	研修同行

◆事前研修スケジュール

■7 月 7 日(土)

時間		内容	担当
10:20		受付	
10:30	5	司会及び担当スタッフ紹介	
10:35	5	JICA 九州市民参加協力課課長挨拶	市民参加協力課 本田課長
10:40	10	JICA 事業概要、教師海外研修趣旨説明	市民参加協力課 桑江職員
10:50	30	自己紹介（アイスブレーキング） 4 つの窓→交流 ①名前（コース）②どこから？（学校名） ③次に生れるとしたらどこの国？ ④海外研修で持って帰りたい「お土産」は？	ファシリテーター： 松本亜樹氏
11:20	40	開発教育とは？ ・「開発」の意味について（What） ・何をめざすのか？（Why） ・どのような手法があるか？（How）	ファシリテーター： 松本亜樹氏
12:00	60	休憩（ランチ）	
13:00	120	授業実践のために① ワークショップ体験「マジカルバナナ」	ファシリテーター： 松本亜樹氏
15:00		休憩	
15:10	60	授業実践のために② 事例発表	熊本市立五福小学校： 清田憲一郎先生
16:10		休憩	
16:20	60	授業実践のために③「現地での視点の整理」 ・現地でやりたいこと（ブレーンストーミング） ・ランキング（拡散→収束） ・発表（自分の問題意識を明確にする） ・Q&A	ファシリテーター： 松本亜樹氏
17:50		事務連絡（明日のスケジュール等）、アンケート記入	市民参加協力課 桑江職員
18:30		懇親会	

■7 月 8 日(日)

時間		内容	担当
9:00	30	事務手続き（渡航、保険、留意点他）	市民参加協力課 桑江職員
9:30	30	フィリピンの基礎知識他	市民参加協力課 桑江職員
10:00		休憩	
10:10	60	任国事情と NGO ソルト・パヤタス活動紹介	市民参加協力課 桑江職員
11:10	80	参加者ミーティング （役割分担、研修までの準備）	市民参加協力課：古賀推進員
12:30		休憩（昼食）	
13:30	60	ふりかえり ＆ 今後（渡航当日と帰国後）の流れ確認 アンケート記入	市民参加協力課：古賀推進員
14:30		閉会の挨拶	市民参加協力課 本田課長
14:35		解散	

◆現地研修スケジュール

	月　日		都　市　名	時　間	内　　容	宿泊地
1	7 月 29 日	（日）	福岡　発 マニラ　着	15:50 18:30	移動：福岡-マニラ(PR425)	マニラ
2	7 月 30 日	（月）	マニラ マニラ	午前 午後	JICA フィリピン事務所　事業概要説明 ユニカセ	マニラ
3	7 月 31 日	（火）	マニラ	終日	ソルト・パヤタス活動視察	マニラ
4	8 月 1 日	（水）	マニラ イロイロ イロイロ	8:20 9:35 午後	移動：マニラ→イロイロ 林千恵隊員（ソーシャルワーカー、イロイロ特別支援学校）の活動視察	イロイロ
5	8 月 2 日	（木）	イロイロ イロイロ	午前 午後	曽田夏記隊員（プログラムオフィサー、イロイロ障害者協会）の活動視察 渡辺賢宏隊員の活動視察	イロイロ
6	8 月 3 日	（金）	イロイロ	終日	LOOB 活動視察	イロイロ
7	8 月 4 日	（土）	イロイロ イロイロ マニラ	午前 14:00 15:10	イロイロ川洪水防御案件視察 移動：イロイロ→マニラ	マニラ
8	8 月 5 日	（日）	マニラ	終日	資料整理	マニラ
9	8 月 6 日	（月）	マニラ	終日	アクション	マニラ
10	8 月 7 日	（火）	マニラ	終日	（大雨のため、ホテル待機）	マニラ
11	8 月 8 日	（水）	マニラ マニラ	午前 午後	資料整理 移動：JICA フィリピン報告	マニラ
12	8 月 9 日	（水）	マニラ　発 福岡　着	10:20 14:50	移動：マニラ-福岡(PR426)	

（１）「JICA フィリピン事務所訪問しました」

（２）「ユニカセのスタッフの皆さんと交流しました」

（３）「ソルト･パヤタスのお母さんたちとの意見交換をしました」

（４）「パヤタス地区のこどもたちと踊りました」

（５）「林隊員の活動先にて、パンを売る生徒との一枚」

（６）「曽田隊員の活動先にて、活動内容について伺いました」

（７）「小松隊員の活動先にて、調理実習の見学をしました」

（８）「渡辺隊員の活動先にて、日本の紹介をしました」

（９）「世界遺産ミアガオ協会を見学しました」

（１０）「LOOB にて、こどもたちとのじゃんけん列車、盛り上がりました」

（１１）「LOOB の活動先にて、フィリピンの授業を見学しました」

（１２）「JICA イロイロ川洪水防御案件を視察しました」

（１３）「ACTION を訪問し、活動内容を伺いました」

（１４）「大雨のため、視察が中止。ホテルにてワークショップ、意見交換を行いました。」

（１５）「大雨で大きな被害に遭った、セントフランシス聾学校を見学しまし

た。」

◆帰国後研修スケジュール

■8 月 25 日(土)

時間		内容	担当
9:40	10	受付	
9:50	5	あいさつ	市民参加協力課 田中課長
9:55	15	オリエンテーション	ファシリテーター：松本亜樹氏
10:10	60	フィリピン研修のふりかえり（Want） ①フィリピンを語る 10 のキーワード ②私のネタ紹介	ファシリテーター：松本亜樹氏 参加者
11:10		休憩	
11:20	60	「ホームレスの現状と課題」（予定）	ホームレス支援機構　山田耕司氏
12:20	60	昼食	ファシリテーター：松本亜樹氏
13:20	60	授業実践のために 事例発表	熊本県環境生活部： 宮ノ内参事
14:20	230	授業案作成 ① ねらい」の絞り込み ②グループで共有→テーマ設定 ③授業案づくり ②	
18:10		事務連絡（明日の日程確認等）	市民参加協力課 桑江職員
18:30		懇親会	

■8 月 26 日(日)

時間		内容	担当
8:45	15	集合、模擬授業準備など	ファシリテーター：松本亜樹氏
9:00	10	オリエンテーション	
9:10	180	模擬授業 ①A グループ ②B グループ ③C グループ	ファシリテーター：松本亜樹氏
12:10	60	昼食	
13:10	60	ふりかえり	
14:10	10	今後に向けて	市民参加協力課　田中課長
14:20		解散	

Ⅱ. 海外研修報告書

平成 24 年 8 月 31 日

平成 24 年度　教師海外研修　研修報告書

派 遣 国　　フィリピン
学 校 名　　中間市立中間西小学校

担当教科　　特別支援学級
氏　　名　　有馬　良紀

１、　今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

〇満足に授業を受けられないフィリピンの子どもたちの現実を、自分の目で確かめる。
〇その現実を少しでも変えるため、活躍している日本人の生き方を学ぶ。
〇日本で希望を失っている子どもたちに、この研修で得たものを伝える。

２、　視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

パヤタスのゴミ山は、私の故郷（福岡県筑豊地方）のボタ山を思い出させた。ゴミ山でゴミを集める姿は、ボタ山で石炭を拾う姿にだぶって見えた。日本は、戦後の廃墟から今のようにモノが豊かな生活になっていった。フィリピンはどのような国になっていくのだろうと思った。この研修で、厳しい環境でも希望を持って前へ進もうとする子どもたちに出会った。日本には、希望を失って、前に進めない子どもがいる。その子どもたちに、どのようにフィリピンの子どもたちのことを伝えるか、とても難しいと思う。

３、　教育指導への活用について

私は特別支援学級の担任なので、わかりやすい授業をしたいと思う。集中力が続かない子がいるので、15 分単位ぐらいの授業を、シリーズに分けて取り組む。教室の中にフィリピンコーナーを設けて、視覚的にわかりやすくしたい。また、他学年には、特設で 1 時間をとることをお願いしている。授業時間確保が私の学校でも課題であるので、1 時間完結で取り組まなければならない。低学年に対しても、理解できる範囲で授業はできないか、検討中である。

４、　研修に関する全般的な所感／意見について

お世話くださったＪＩＣＡや現地の方々、そして一緒に研修した先生方にお礼を申し上げたい。私自身は、研修 3 日目で入院してしまい大変迷惑をかけたが、みなさんがとても心配してくださった。実働わずか 2 日間の研修だったが、

これまでに経験したことのない様々な体験をした。それは、「一期一会」という言葉どおり、どれもすばらしい出会いから生まれたものだ。今回の研修は、自分自身のこれからの人生に、大きなエネルギーを与えてくれた。それまでの私は、いろんなことで思い通りに行かずに悩むことが多く、自分の殻に閉じこもりかけていた。そんな私に広い視野を与えて、上手くいかないながらも、一歩一歩歩み続けることの大切さを教えてくれた。本当に感謝したい。

５、　JICA に対する要望・提言

帰国して、たくさんの先生方にこの研修の良さを語った。「行ってみたいな」と言われた方も多かったが、費用のことを話すと「それはちょっと無理かも」という返事が返ってきた。宿泊代や食事代は自腹なので、12 日間の出費は相当なものになる。この研修に申し込む先生が少ないと聞いたが、費用面で二の足を踏んでいる先生も多いのではなかろうか？「仕分け」などでＪＩＣＡも苦しいとは思うが、日程を精選して短くするなど費用面も考えると、申し込む先生も多くなるかもしれない。

６、　今後の本研修参加者へのアドバイス

現地語（今回はタガログ語）で、自己紹介ができるようになっておく方がよい。短くて簡単なものでよい。パヤタスで自己紹介をしたとき、現地のお母さんたちとの距離が一気に縮まった。やはり言葉はとても大切である。現地の人たちも、私たちを迎えるにあたって、とても緊張している。それをほぐすのは、現地の言葉だと思う。また、音楽も効果的である。私たちは、「さくらさくら」と「上を向いて歩こう」を演奏・合唱した。パヤタスのお母さん方は、お礼に即興のダンスをしてくれて、大いに盛り上がった。事前の準備は大変だが、音楽も考えた方がいいと思う。

７、　各訪問先の所感

日時	訪問先	所感
７月３０日（月）	ＪＩＣＡフィリピン事務所	ここでは、フィリピンに対する日本の援助の概要を説明してもらった。フィリピンに対する援助は戦後賠償から始まり、現在に至る。ＪＩＣＡは、経済成長の促進、貧困削減、平和構築に力を入れている。ＪＩＣＡの理念であるは、「全ての人が恩恵を受ける開発」を目指し、水害などから町を守る防災にも力を入れている。
７月３０日（月）	ユニカセ	ユニカセの代表である中村さんは、親から裏切られたつらい過去から、同じような

		目に遭っている子どもたちのために頑張っておられた。 　レハーという女の子は、出産を終えて復帰したばかりで、子どものためにも仕事を頑張っている。レハーは中村さんのようなマネージャーになりたいという夢を持っていた。私のクラスにも、親から見捨てられた子どもがいる。彼は捨て鉢になって、前に進もうとはしない。どうしたらレハーのように希望を持って、前進することができるだろうか?と感じた。
７ 月 ３ １ 日 （火）	ソルト・パヤタス	ゴミ山の環境は厳しい。近づくにつれ鼻からのどの奥をつくような異臭がしてきた。道路は生活排水があふれ、家も掘っ立て小屋みたいだった。そんな厳しい環境でも、ソルト・パヤタスに集まるお母さん方は、子どもたちのために頑張る「肝っ玉かあさん」のようだった。家庭訪問をした家の小学校 2 年生は､｢大統領になってフィリピンを良くしたい」と笑顔で夢を語ってくれた。そんな夢を大切に育てようと、ソルトの小川さんたちは遠い異国の地で頑張っておられる。そのエネルギーはどこからわいてくるのかと思った。

平成 24 年 8 月 31 日

平成 24 年度　教師海外研修　研修報告書

派 遣 国　　フィリピン
学 校 名　　長崎県西海市立
瀬戸小学校

担当教科　　特別支援学級
氏　　名　　福喜　京子

１、今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

〇貧困と格差の現状（教育や子どもを取り巻く環境に及ぼす影響も含め）と原因は何か？
〇JICAやJICA青年海外協力隊・NGO団体がどのような支援や活動を行っているか？
〇途上国の特別支援教育や障害者支援の現状や課題は何か？（日本との違いや共通点）

２、視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

〈参考になったこと〉
〇フィリピーノ・ホスピタリティーや家族の絆（家族愛）の強さ。
〇限られた環境の中で今日という日を懸命に生きている人々の姿。（特にパヤタス地区への訪問）
〇使命感をもち、現地の人たちと真剣に向き合って活動をされているJICAやNGO、協力隊員の方々の情熱や前向きな生き方。
〇支援とは、一過性ではなく、コミュニティーの構築と「つながる・つづける」ことである。
〇まずは、自国を知ることから始まる。（シンキンググローバリー・アクティングローカリー）
〇国による「当たり前」や価値観の概念。
〇「真の豊かさ」とは。
〈疑問に思ったこと〉
〇様々な国からの支援があるものの、貧困や格差の課題は山積かつ複雑に絡み合っている。
　負の連鎖のどこを断ち切れば解決していくのか・・・。
〇ハイスクールの先生方に教育についての考え方を聞きたかった。
〇環境問題（ゴミ処理やインフラの整備）について世界の状況を知らせ、考え方を聞きたい。

３、教育指導への活用について

〇どの子にも「チャレンジ券」があること。
〇フィリピンの国を知る（光と陰）ことで異文化に触れる。
〇アンケートを通して、身近に感じる。
〇世界で活躍する人々（出逢ったJICAや協力隊員、NGO団体）JICAの方の出前講座。
〇日本も世界とつながっているということ
〇「つながる・つづける」自分が身近にできること
〇「真の豊かさ」とは。

４、研修に関する全般的な所感／意見について

〇今私が置かれている立場にぴったりの研修で、充実した12日間を送ることができた。この研修を実施するにあたり、ご尽力頂いた関係者の皆様に大変感謝している。
〇現地の方々そしてそこで支援に当たられている日本人の使命感の強さやあたたかい対応（これまでの計り知れない経験があるみなさんが、私たちの目線で接して下さったこと）に学んだ。
〇ソルト・パヤタスやLOOB訪問は、1日かけて研修ができたことは、大変有意義だった。
〇研修内容最終日、あのような状況の中で車を走らせ、研修先に向かって下さったドライバーさんやJICAフィリピン事務所の直原さんに感謝したい。出迎えて下さった「耳の里親会」の校長先生の情熱にも心打たれた。
〇「本当の豊かさとは？」を考えさせられた。日本もかつてこの国と同じような環境にありながら高度成長を続け、それとともに忘れてきたものがあることを教えてくれた。（家族愛・人とのつながり・今を懸命に生きることなど）子どもたちへと伝えていく使命があると思う。
〇途中で資料整理日や情報交換する時間があったのはよかった。
〇事後研修で、指導案作りや模擬授業は、大変勉強になった。これからの方向性が見えた。
〇事前研修で、国際理解教育・開発教育の説明や授業実践の方法などを学び、目的意識をもって研修に参加できた。

５、JICAに対する要望・提言

〇これを機会に、教育現場とJICAが手を取り合い、開発教育・国際理解教育が進めばと思う。
〇この研修に参加した人たちがさらにステップアップするための海外研修をつくってほしい。または、何度も参加できるシステムにするなど。（一度行った方を次回の参加者に加えるとか）

〇現職教員特別参加制度の年齢をもう少し上げてほしい。
〇県の教育委員会・市の教育委員会を通して文書が回覧されると、もっと応募が増えると思う。

６、今後の本研修参加者へのアドバイス
〇キーワードを見つけながら、参加するとよいかも。
〇英語が話せるともっと研修が深まると思う。

７、各訪問先の所感

日時	訪問先	所感
7月30日(月)	JICA フィリピン事務所 三次さん･見宮さん 新谷さん･直原さん	フィリピンの現状と JICA の活動（国際支援や協力）の概要を知った。フィリピンへの JICA の援助は歴史が長いが、貧困課題は立ち後れており、そこにはたくさんの要因があり、国際協力の難しさを感じた。フィリピンの「光と陰」の陰の部分に日本人がどのように関わっているか！日本とフィリピンで貧困の差はあるが、共通項もあるとのこと。研修での新たな視点が見つかった。JICA のプロジェクトマップをもとに草の根技術協力。協力隊員の現状について説明を受けた。
	ユニカセ	ストリートチルドレンやトラフィックチルドレンの実態を聞いた。貧しい子どもたちにも働く機会を与えたいと立ち上がった中村さん。ユニカセのビジョンやミッションの説明。「希望は憎しみの連鎖を断ち切ることができる」の言葉は壮絶な過去を乗り越えて来られたから出てくる言葉で、今を豊かに生きていこうとする姿勢を感じた。中村さんの思い（信念）がユニカセで働く子どもたちへ伝わっていることをローズの言葉から確信した。ここで働く従業員を我が子のように愛し、子どもたちが分かるまで対話を繰り返し、向き合っているという。「子どもの成長が見られるときが幸せ」と言われた言葉は、教育に携わる者として同じである。
7月31日(火)	ソルト･パヤタス活動視察	今回、一番関心が高かった目的の地であるソルト・パヤタスを訪問。NPO 団体ソルトの大井さんや小川さんより、ここで暮らす人々の現状やソルトの活動の話を聞いた。慰霊碑を前に崩落事故の

		話を聞き、胸が詰まった。この事故で、世界にゴミ山がクローズアップされフィリピンの貧困の象徴として知られるようになった。健康被害はもちろんのことゴミ山の高層化やスピード化で、現在立ち退きの危機にあることも課題。悪臭や汚水が垂れ流しになった劣悪な環境。言葉にできない。地区の人口はおよそ４万人、戸籍はない。学校には、7000 人もの児童が通学しており、3 部制になっている。主な仕事は、スカベンジャー。1 日働いても 150 ペソ程度だ。そんな中ソルトは、お母さん達に刺繍を通して支援を行い、子どもたちの教育に対する様々な支援を行っている。（奨学金制度などもある）家庭訪問をすることができた。ここが人の住む家だろうか。本当に言葉に困った。しかし貧困の中にありながらも家族の絆の強さを感じると共に希望をもって生きている姿に心を打たれた。お母さん達の「私たちは貧しいけれどそればかり考えていてもやっていけない。だからいつも笑顔でいる！」の言葉が印象的だった。その背景には、ソルトの力（仕事を与え希望を見いだしている）があることを実感した。ソルトの支援は、今後自立へと促し、撤退の方向にある。すべての撤退ではなく、これからも別の形で「つながる・つづける」ことが大事である、そして子どもたちに機会をつくってほしいとも話された。
	マニラ→イロイロ サンタ・バーバラ国立総合高校 小松隊員（料理）の	ボケーショナルスクールを訪問。3000 人規模の学校。８つの教科が学べる職業訓練校で小松隊員が活動している。生徒は、笑顔で、活気に満ちあふれており、学ぶことを楽しんでいた。主に関わっているクラスの調理実習を参観しながら、活動の内容を聞いた。小松隊員のモットーは、常に「５S の（整理・整頓・清潔など）の考え方を繰り返し言い続けること」だった。しかしここでこのように技術を学んでも実際就職となると厳しいということだった。雇用の問題がある。高校が４年間で卒業（１６歳）のため、（１８歳未満まで就労できない）卒業しても大学や専門学校に進学し

８月１日 （水）	活動視察	ない生徒は、２年間の空白ができる。教育制度の見直しが、今年度から始まった。ここでアンケートを取ることができた。「したいことやほしいもの」に対し「勉強・卒業」、「尊敬している人」に「先生」があがり、日本との違いに驚いた。
	イロイロ特別支援 学校 林隊員（ソーシャルワーカー）の 活動視察	16 歳から 34 歳まで在籍。年齢別ではなく障害種でクラスを分けている。日本と特に違ったのが、この学校には特進クラスの生徒も一緒に学んでいるということ。また、卒業という概念がない。知的障害の男の子と聴覚障害の男の子と交流できた。ボディーランゲージで対話し、子どもは世界中どこでも変わらないと感じ、愛おしく思った。職業訓練クラスで、ソーシャルワーカーとして活動している林隊員にお逢いした。カウンターパートとチームを組みプログラムを進めている。職業訓練を終えても就職先がない。十分な雇用体制がない国で、裾野にまで手が広がらないのが現状である。国からの障害者に対する金銭面でのサポートはなく、寄付金や自助努力でまかなっているという。２人の活動の様子を聞き、目標をしっかりともち、笑顔で日々に向き合うパワーや情熱はどこから来るのだろうか。力をもらった。
	イロイロ障害者協会　ワークショップ 曽田隊員（プログラムオフィサー）の 活動視察	学校に行くことのできる健常者 98%。学校に行けない障害者 98%。ポリオの後遺症で障害をもっている人が多いと聞かされ、驚いた。障害をもっている当事者で運営されている。障害者の能力強化と社会のバリアを取り除き、障害者の可能性が発揮できる社会づくりをめざしている。自らも大変な境遇にありまた障害をもちながら、現地の方と共にがんばっている曽田隊員は、「想いだけでは社会は変わらない！」と活動を始めた。大切にしていることに「きっと這い上がれる希望をもてる。あなたの可能性を信じている。人と社会とつながろう。」がある。曽田さんの身をもっての言葉だ。障害をもっている人たちの置かれている状況の理解に努め、共に歩んで行かれていることに感銘を受けた。途上国での障害者支援は、これまで取り組まれていなかったが、貧しくても同じニ

８月２日（木）		ーズそして、長い道のりでも何かを始めることが大事。「今自分が取り組んでいることがすぐに花を咲かすわけではない。次世代の子どもたちのために活動を続けていかなければならない。」と語ってくれた。
	ミアガオ国立高校 渡辺隊員（服飾）の活動視察	8コースの科目がある専門性を学ぶ1500人規模の総合高校。服飾を教えている渡辺隊員が活動先を訪問。フィリピンの普段の高校の様子を参観した。日本の授業風景とは随分異なり、きちんと授業が実施されていないような様子であった。渡辺さんが入っているクラスで日本の学校の紹介の授業をさせていただいたり、歌の交換を行ったりした。「夢は？」のアンケートによる「学びたい」「卒業したい」「卒業証書をもらいたい」という回答。教師の資質とのギャップを感じた。
８月３日（金）	LOOB活動視察	LOOBは、岩隈選手や味の素（給食支援）など日本の企業からの支援を受けている。主に、子どもへ（食育・教育）のサポートと親へ（裁縫技術）のサポートを行っている。高校と「給食」の支援を行っている小学校を訪問した。その後FJK小学校（プライマリースクール）を訪問。続く大雨のために冠水した校庭を竹の橋をつたって渡り、校舎へ。授業参観や意見交換もあり、先生方の熱心な指導に感動した。教科書は、3人で1冊を使っていること。障害をもっている児童も一緒に学んでいること。学校に登校できなくなった児童をいつでも受け入れていること。親がスカベンジャーとして働いている子どもも多いため学童的役割も担っていることなど驚いた。意見交換をする中で、日本と同じ悩みもあれば、フィリピンの現実を突きつけられる内容も多かった。視察の最後にはごみ山に接近する貴重な機会を得ることができた。小林さんはこの事業を進めるに当たり、必ずフィリピンの人のフィルターを通し、フィリピンのやり方で進めていくよう工夫をしているということだった。活動の背景と共に商品を購入。
８月４日	イロイロ川洪水防御案件視察	有償資金協力（円借款）と無償資金協力についてイロイロ川とハロー放水路を例に視察しながら、

（土）		JICA 企画調査員の中村さんの話を伺った。これまでの洪水の歴史や防水・水道事業・防災・水質は関連があることや洪水対策に日本の技術やノウハウが生かされていることを知った。施設をつくるときには、住民の意見や感情などを大切にしており、200 世帯以上の住民が立ち退きの場合には、JICA は計画を進めない。完成後の自治体の管理や住民の意識も課題であるという点では、日本も同じである。
	イロイロ→マニラ	イロイロからマニラへ移動
８月５日(日)　　朝市視察・博物館・教材探し・資料整理		
８月６日（月）	ACTION 活動視察	高校生の時に１枚のチラシから人生の転機が訪れ、その後、一人で海外に渡ったのがきっかけとなり、「アクション」を立ち上げた横田さんにお逢いした。アクションの活動内容やエコミスモの商品についての説明があった。日本とフィリピンをまたにかけ活動している。これからの展望（カプロジェクト）について話してくれた。「チャレンジ券」について フィリピンの子どもも日本の子どもと同じように夢や希望をもっている。しかし、家庭や国の経済的理由からその夢を叶えることはない。日本に生まれていたら、叶えることができるかもしれない。すべての人間は、生まれながら、よいところを平等に与えられている。しかし、環境は平等に与えられていない。ほとんどの人は、生まれた国で将来を左右される。日本に生まれた子どもたちは、たくさんのチャンスがある。自分の夢に向かってチャレンジするチャンス。失敗するか成功するかは別としてチャレンジするチャンスはたくさんある。それは、今まで多くの人たちが、がんばって作ってくれたもの。世界中の子どもたちの分まで自分のしたいことに向かって思い切りチャレンジしてほしい。そして感謝の気持ちを忘れないでほしい。 このことは、日本に帰って、まず伝えたいことである。

８月７日 （火）	洪水･冠水のため 視察変更 資料整理	洪水・冠水のためホテルからの移動が厳しいため本日の視察は中止。午前中は、ホテルのロビーにて、同行者の古賀さんによる講義とワークショップ。午後からは、教材探しに出かけた。
８月８日 （水）	耳の里親会活動視察が冠水のため施設訪問･校長先生の説明 JICA フィリピン事務所報告会中止	午前 12 時「耳の里親会の施設訪問」に向け、悪天候・悪環境の中出発した。冠水した施設の水は引いてはいたが、ライフラインは止まっており、真っ暗な中、足は水につかり、校長先生が１本のろうそくの灯りをたよりに、一部屋一部屋回り、説明をして下さった。ここでは、聴覚障害の子どもも定形発達の子どもも同じ建物の同じ教室で勉強している。そのような教室作りになっているとのことだった。まさにインクルージョンの考え。校長先生の教育に対する情熱を感じた。ホテルへと戻る途中の町並みは、一言では語ることができない風景が広がり、インフラ整備にまで手が回っていない現実を目の当たりにした。

平成 24 年 9 月 28 日

平成 24 年度　教師海外研修　研修報告書

派 遣 国　　フィリピン
学 校 名　長崎県立長崎鶴洋高等学校

担当教科　　外国語（英語）
氏　　名　　溝口　啓子

１、　今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

英語科の教員でありながら、これまでは欧米に偏った内容で授業を進めてきたことは否定できない。単なる異文化理解に留まることなく、真の意味で国際理解につながる授業を行うこと、そして私自身も含め、目の前の生徒たちが、「国際人」、「地球人」として物事を見る新たな物差しを持ち、偏見を持たずに物事を的確に捉え、国際協力のための最初の一歩を踏み出すことを目標として今回の研修に臨んだ。具体的な視点は以下のとおりである。

〇富の格差が教育格差につながっているという事実を目の当たりにし、カルチャーショックを
　受けること、そして私が現地で感じたこと、学び取ったことを生徒へ還元する。

〇夢や希望を抱くことが難しい日本の生徒たちに、通り一遍のアプローチで進路指導をするの
　ではなく、フィリピンで出会った子どもたちの前向きでエネルギーに溢れた姿を伝えること
　で、彼らの心を揺さぶることができないか。

〇「私たちにとっての当り前」からの脱却を図ること・意識改革－日々生かされていることや、
　今置かれている恵まれた環境を当然と思わず、支えてくれる人への感謝の気持ちをもつこと。

２、　視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

〇現地で活動されている日本人の方々は、現地の方々と上手くコミュニケーションを図りなが
　ら、現地の方が受け身にならないように、自助努力ができる体制を築いてこられている点

〇中村さん、小川さん、小林さん、横田さん、協力隊員といった日本人が、vision や mission

を掲げ、希望を絶やさず、献身的に息の長い支援をされておられる点

〇フィリピンで得た言葉集－　教育者としての在るべき姿を示して頂き、大変感銘を受けた

①中村さん:「人を動かすのは人」、「You’re my hope. You’re my treasure.」

②小川さん：「関心やつながりを持つこと」

③曽田さん：「想いだけでは社会は変わらない」

④横田さん：「どんなに自分にできることが小さくても、やれることがあるならやってみる、そう行動する人が増えていけば世の中は変えていける」、「チャレンジ券」

３、　教育指導への活用について

フィリピンを訪問させて頂いた貴重な経験を通して、まずは自分がどう思ったかを生徒たちに伝える授業を行う。進路指導や教科指導、その他あらゆる機会を捉えて、生徒たちが今後の生き方を見つめることができる時間を設けたいと考えている。具体的な案は以下のとおりである。

〇進路指導

LHR または総合学習の時間を使って、フィリピンで取らせて頂いたアンケートと自校のものとの回答を比較させることで、現地の子どもたちが置かれている現状や、学びに対する姿勢などの、日本の生徒から出る気づきを大事にして、生徒が自己を見つめるきっかけとしたい。

〇教科指導（英語）

英語Ⅱの教科書に「児童労働」を扱った課があるので、今回集めた写真やビデオなどの教材を活用して、生徒に英文の内容を深く読み取らせたい。「教育」が希望となること、また現地の子どもたちから感じ取った「前向きな姿勢や秘めている可能性、家族とのつながりを大事にしている点」をキーワードに授業を組み立てたい。また、現地で支援活動をされている日本人の方々に焦点をあて、国際協力について、また世界で起こる貧困や飢餓、紛争などの問題にも目を向けさせたい。その際に、国際協力推進員の方々に協力を仰ぎたいと考えている。

〇教科以外（国際教育研究協議会・課外活動）

この協議会の目的は、県下の高校生の国際理解や協調の精神を涵養することとある。これまで英語弁論や英語研修などの行事を運営してきたが、ただの異文化理解で終わることなく、推

進員や外部団体の方々にアドバイスを頂きながら、本会を意味のある形で続けていきたいと思
う。そのために、過去の教師海外研修参加者とコンタクトを取り、総会や研修会などの中身の
充実を図りたい。まずは、教師海外研修や推進員の出前講座などの存在を広めていきたい。
自校のボランティア部の協力を得て、文化祭へ向けた２つの企画を考えている。１つは文房
具集めで、もう１つはソルトさんまたはLOOBさんの商品の物販を計画中である。

４、　研修に関する全般的な所感／意見について

JICA関係者の皆さま、そして研修参加の先生方のお陰で、無事に研修を終えることができ本当に感謝している。今回の研修に参加して、予想以上にカルチャーショックを受け、私が日本で生活している上で当り前だったものが､いかに恵まれた環境のもとに生み出されたものであるかを痛烈に感じた。

研修を通して出会った現地の人々は決して物質的に豊かな暮らしができているとは言えない。しかし、NGOや協力隊などの周りの方々の支援を受けながら、前向きに精神的に豊かに生きておられることは事実である。どのような苦境であっても個々人に自尊心や自信を抱かせ、生きる希望を与えるもの、それはやはり教育だと考える。フィリピンで学び取った多くのこと、若者から聞いた生の声、ゴミ山の匂い、全てを目の前の生徒たちに伝えていきたい。

５、　JICAに対する要望・提言

事前研修、本研修、事後研修全てが充実していた。今後も研修や講座に関する情報を頂きたい。

６、　今後の本研修参加者へのアドバイス

Seeing is believing（百聞は一見にしかず）を身をもって感じた今回の研修。まずはアクションを起こすことが大事だと思います。今を生き抜くエネルギーが得られる素晴らしい研修でした。

７、各訪問先の所感

日時	訪問先	所感
７月３０日（月）	１．JICA フィリピン事務所にて事業概要説明 ２．ユニカセ訪問（中村さんが経営するレストラン）	○フィリピンへの支援が戦後賠償から始まり、今年で協力隊派遣５０周年になることを知った。 ○JICAがODAの実施機関としてフィリピンに対して技術協力や円借款などを行っている具体例を示して頂いた。同じ日本人でありながら、現地で活躍されるスタッフの方々に圧倒された。 ○オーナーの中村さんは、明確な vision を持って社会企業としてユニカセをたちあげ、危険にさらされた子どもたちを全身全霊をかけて救っておられる。その姿は凛として美しく、Youth たちにとってかけがえのない存在であることが分かった。人生を生き抜く強さや他人を包み込む包容力のある方だった。Youth の Rhea さんの前向きな発言に、苦境であっても人を立ち上がらせるものは希望や夢、そして人とのつながりなのだと再認識した。フィリピン人の前向きで明るい気質についても知ることができた。
７月３１日（火）	ソルト・パヤタス活動視察	○代表の小川さんから、2000 年 7 月に起こったゴミ山での崩落事故の詳細を伺い、胸が締め付けられる思いで慰霊碑の前で黙祷を捧げた。パヤタス地区の経済状況から、子どもを取り巻く環境そして女性の置かれている状況が見えてきた。 ○女性収入向上事業は、日本人スタッフ主導のもと試行錯誤を重ねて、ようやく現地スタッフの自助努力に委ねる方向性が見えてきたそうだ。お孫さんが奨学金を受けて大学に通っているという、エビータさんの誇らしげな表情が忘れられない。 ○Children Empowerment の事業では、実際に奨学金支援や教育サポートを受け

		た子供たちが、地区の子供たちに、恩返しの意味で補習授業や本の読み聞かせなどを率先して行っている姿が頼もしかった。ライフスキルトレーニングを通して、問題解決力や批判的に物事を判断する力を身につけた子供たちは、自信と自尊心を高めることができたと口々に話していた。彼らの学びや生きることに前向きで意欲的な姿勢は日本の子どもたちにどう映るのだろう。
８月　１日（水）	１．マニラ→イロイロへ ２．サンタ・バーバラ国立総合高校（小松隊員） ３．イロイロ市特別支援学校での活動視察（林隊員）	○乱気流を抜けるフライトはコーヒーが天井や同行メンバーにかかるハプニングもあり、なかなかスリリングだった。着陸した時は力が抜けた。 ○3000 人規模の学校で、３つのコースに８つの学科があった。びっしりと説明が書き込まれたノートからは、決して十分とは言えない教育環境でもなお、学ぶことへの意欲を持っている生徒たちの強い意志が感じられた。調理実習を興味深く眺めていると、試食用に作ったばかりの料理を持ってきてくれた。hospitality の精神を垣間見た。 ○今回見学させて頂いた SPED は、本人の能力によってクラス分けされている。子どもたちのあどけない笑顔が心を癒してくれた。林隊員は職業訓練クラス（バライ・ダランパン）を担当しておられた。「職業訓練の後も就職先はなく家に居て TV を見ているだけ」と話す卒業生がいたそうだ。livelihood プログラムの内容は充実した印象を受けたが、就職先を見つけることが大変困難とのことだ。青年たちのインターン先の開拓や就職支援に力を注がれている林さんのもどかしい気持ちが伝わってきた。日本人が支援から手を引いてしまうとどうなってしまうのだろう、と不安になった。ノウハウを持った人を増やしていくこ

		と、また現地の人々だけで運営できる体制ができていくことを願ってやまない。
８月　２日 （木）	１．イロイロ障害者協会の活動視察 ２．ミアガオ国立高校の視察	○曽田さんの「想いだけでは社会は変わらない、変わるべきは社会」という言葉が胸に突き刺さった。障害者の就学率は２％という衝撃的な数字だった。障害者の置かれている状況の理解に努め、謙虚にかつ決して希望を絶やさず、少しずつ、でも確かに現地の障害者に光を与えておられる曽田さんの粘り強い姿勢に大変感銘を受けた。 ○渡辺隊員 １５００人の生徒に対し教員は５０人、決して十分とは言えない学校設備の中で、服飾コースの生徒たちは限られた環境で精一杯自分のできることをしている。学ぶ姿勢、また彼らが学ぶことの意義が、物質的に豊かすぎる今の日本の生徒たちとあまりにもかけ離れていた。現地でとらせて頂いたアンケートにその差がよく出ていた。
８月　３日 （金）	LOOB 活動視察	○LOOB さんの１day スタディツアーはかなり充実していた。公立学校の状況は大体把握できたので、私立の状況も調べて比較してみると、教育格差の実情がさらによく分かるのではないかと思った。 ○小学校見学で、教師の説明や板書を一生懸命に書き取る子どもたちの姿に感動した。日本にいても、異校種の学校を訪問することはほとんどないので、小学校の訪問は大変新鮮だった。 ○昼食をマンドリアオ高校の先生方と一緒に取ることができ、その中で様々な話ができた。K－12 という新しい制度が導入されるにあたり、教員対象の研修期間はたったの５日間しかなく、現場の先生方の戸惑いが感じられた。 ○FJK 小学校では、子供たちを取り巻く教育環境の不十分さを目の当たりにした。そのような状

		況でも、元気よく授業に臨む児童の姿があり、そして児童の学びや成長に喜びを感じる教師がいる。国は違っても、同じ方向を目指していることに安心感を得ることができた。
８月　４日（土）	イロイロ川洪水防御案件視察	〇国際協力の一つとして行われている有償資金協力（円借款）について学んだ。ODA が実施される以前は、天災を前に成す術もなかった状況が著しく好転したことが良く分かった。JICA が案件を進めていくうえで生じる立ち退きの問題などについても知ることができた。危険にさらされてもなお、川の周りに住まざるを得ないというフィリピンの貧困層、最貧困層の現状を目の当たりにした。 〇洪水被害から二次、三次災害につながるケースもあるため、多様な視点から問題解決に臨まなければならないことが分かった。同じ日本人で、高い専門性をもった中村さんのような方がおられることを誇りに思った。
８月　６日（月）	ACTION 視察	〇横田さんの生き方やものの考え方に強く心が揺さぶられた。「チャレンジ券」の話は日本の生徒たちに絶対伝えなければならないと思う。横田さんの信念、人とのつながりから得たものを大事にされているところが本当に素晴らしい。今日１日を生きるエネルギーが不足している日本人と現地の人々との対比を授業のテーマとしたい。 〇横田さんの発する一つ一つの言葉に、経験に裏付けされた自信がみなぎっていた。日本の地域でも必要とされる団体を目指されている点、また教育現場との関わり方も大変素晴らしいと感じた。
８月　７日（火）	全体と校種に分かれてのミーティング（事後研修で実施する模擬授業案の検討）	〇高校メンバー三人とも教科が違うので、高校１年生対象の LHR の設定で授業を行うこととする。アンケート結果から得られる気づきや、研修中にインタビューできたフィリピンの若者の前向きな発言にも注目させたい。フィリピンで活躍する日本人の生き方につなげる形で授業を

		展開する計画で、その第一回として実施する。生徒へは「豊かさ＝幸せ？」という投げかけに留め、教師がキーワードを示す形で授業を締めくくりたい。
８月　８日（水）	１．ワークショップ（貧困の輪） ２．耳の里親会活動視察	○台風のため、午前中はホテルのロビーにて、JICA 古賀さんがファシリテーターとなり、「貧困の輪」を体験した。貧困から連想される事柄を web マップでブレーンストーミングした後、貧困を断ち切るにはどの要因が大きく関わるかを討論した。高校生対象にも取り組める大変意義深い活動だった。 ○前日に「７フィート（約２ｍ）まで水がきた」という情報を得ていたので、訪問可能ということ自体が本当に奇跡的だった。大洪水の後始末で大変な中、ベッキー先生が温かく出迎えて下さり、感謝の気持ちでいっぱいになった。この天候で当然子どもたちは学校にいなかったが、子供たちと一緒に居られるときのベッキー先生の様子も見てみたかった。短い視察ではあったが、献身や受容の精神に溢れた素晴らしい先生にお会いでき、本当に良かった。帰りは、車が水につかり立ち往生するなど、初めて洪水の恐ろしさを感じた。

平成 24 年度　教師海外研修　研修報告書

派 遣 国　　フィリピン
学 校 名　　熊本県山鹿市立鹿北中学校

担当教科　　数学科
氏　　名　　福山　貴英

１、今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

○フィリピンにおける学校教育の現状と問題点
○「貧困」による教育の格差の現状と現地の人の声や思い
○JICA や NGO などの支援の現状、方向性や考え方
○国際支援や国際貢献で活躍されている日本人の思いや苦労そして生き方
○「負のスパイラル」を断ち切るための取組

〇日本との比較から学び得ること

等を学び、考えることで自分の生き方を振り返り、自分の教育活動をもう一度見つめ直し、研修で培った経験を生徒たちや周りの人たちに還元するということを主眼において研修に参加した。

２、視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

〇フィリピンの人たちの明るさ・笑顔とホスピタリティに大変感動した。いかなる状況においても周りに不満をぶつけるのではなく前向きに進んでいこうという雰囲気がとても感じられた。これはどこからくるのか考えさせられた。

〇学校施設や先生の数など十分な状況ではない中でも子どもたちに力をつけさせようと努力されている先生方の工夫や取組が大変参考になった。

〇フィリピンの人たちや海外で活躍する日本人の方の話の中から、教育とはいかに子どもたちに「夢」や「希望」を持たせられるかだと強く感じた。本来子どもたちは学ぶ力を持っている。その道筋をきちんと示してゴールを具体的にイメージさせることで自ら学び判断し行動していく。そして思っても見ないような力を発揮していくということに気づかされた。

〇「格差と教育」の問題はすぐには解決できない難しい問題だと感じた。これは日本でも同じことだと思う。当事者ではどうすることもできない問題である。周りの支援や援助が必要でそれによって改善しつつある現状を見ることができて良かった。

〇JICA の青年海外協力隊員や職員の方、NGO で支援されている方、ボランティアで参加している学生など国際支援を行っている日本人の生き方や考え方がどれも新鮮で大変勉強になった。「行動力」のすごさと大切さを改めて感じることができた。

〇自分自身の枠（常識やとらわれた考え方など）を外して考え行動する大切さを研修を通して考えさせられた。

３、教育指導への活用について

〇海外で活躍する日本人の生き方や考え方

〇「負のスパイラル」を断ち切る取組

〇真の「豊かさ」とは何か

〇同じ地球に暮らす仲間としてつながっているということ

〇「夢」や「希望」が生き方を変えていく

等を教材化できたらと考えている。「フィリピンを学ぶのではなく、その国を通して自分とのつながり」を考えさせるようにしていきたいと思う。事前研修でもあった「枠を外して考える」「視野を広く、アンテナを高くし、自分を客観的に見つめて自分ができることを考え行動する」等の視点を意識して子

どもたちと共に考えることができればと考えている。

４、研修に関する全般的な所感／意見について

どのプログラムもとても中身の濃いすばらしい研修であったと思った。特に、出会った人たちの声や生き方には毎日感動し、驚かされた。日程的には少しきつい部分もあったと思うが、「今日はどんな人に出会えるのか」「どんな話を聞かせてもらえるのか」「そこからどんなことが吸収できるのか」と毎日ワクワクしながら研修に参加することができた。

ニュースやインターネットで海外のニュースは毎日流れている。調べようと思えばいつでも調べることができる。しかし、子どもたちは「他の国のこと」「遠い世界のこと」としてとらえて、自分の問題ではないと考えていることの方が多いように思う。同じ国で起こった東日本大震災でも同じことがいえるのかもしれない。そこをつないで気づかせていく役目が私たちにはあると思う。この研修で得た経験や知識、そしてこの感動を子どもたちに伝えていければと思う。刺激を与え続けることで、少しずつ視野が広がっていくのではないかと思う。

同行してくださったJICAの２名のスタッフの方、通訳の岡本さん、そして研修で出会った１０名の仲間に感謝したいと思う。

５、JICAに対する要望・提言

〇青年海外協力隊やボランティアで国際支援をされた方がたくさんいらっしゃると伺った。その経験や生き方を学校教育にも取り入れていければと思った。その他にもJICAが持っておられるノウハウは学校教育にも生かされるものが多いと思った。学校教育との連携のシステムを作っていければと思った。

大変充実した研修になりました。隊員の方の言葉や思いは自分自身を反省させられるものばかりでした。ご協力頂いたJICAのすべての方に感謝申し上げます。

６、今後の本研修参加者へのアドバイス

〇事前研修で目的ややるべきことをきちんとつかんでおくことが大切だと思った。

〇現地の方や隊員の方に遠慮せずに聞きたいことはすべて聞こうという積極性が必要だと思った。（ドライバーさんなども話をするといろんな情報が聞けておもしろいと思った）

〇画像や動画の撮影は役割分担・ポイントをしっかり共通理解しておくといいと思った。（動画は、大変容量が大きくなるのでポイントを絞ってするなど）

〇車窓の風景やインタビューなどは動画がいいと思った。（訴える力が違うので）

〇振り返りシートに毎日感じたことなどを細かく書いておくと後の振り返り

に大変役立つと思った。

７、各訪問先の所感

日時	訪問先	所感
７月３０日（月）	① JICA フィリピン事務所 ② ユニカセ	日常では滅多に知ることのできない国際支援や協力の現状を知ることができ大変参考になった。「希望は憎しみや貧困の連鎖を断ち切ることができる」というユニカセの中村さんの言葉が頭に残った。自分のすべてをなげうってフィリピンの子どもたちのために取り組んでおられる姿から何がそうさせているのか、その思いはどこからくるのか考えさせられた。
７月３１日（火）	① パヤタス地区視察（ソルト・パヤタスの活動）	パヤタスで暮らすジョシュアくん（小１）に「将来何になりたいか」と聞くと「大統領」と答えた。理由を聞くと「社会から貧しい人と豊かな人の差をなくしてみんなが幸せに暮らせるようにしたい」という答えが返ってきた。また、そこのお母さん方から「東日本大震災の被害はもう大丈夫なのか」という質問があった。震災があった３月１１日から毎月１１日には復興を願ってお祈りをしておられたそうだ。自分たちの状況は大変困難なものなのに、相手を思いやる気持ちはどこからくるのだろうと深く考えさせられた。
８月１日（水）	① サンタ・バーバラ国立総合高校 ② イロイロ特別支援学校	① 子どもたちがとても素直で先生のことをとても尊敬しているということがアンケートの結果や様子から伺えた。現地では衛生面の感覚が低いため、小松隊員が安全面と衛生面の指導を徹底してされていることが子どもたちの様子からわかった。 ② 特別支援学校は年齢ではなく障害の程度でクラス分けをしてあった。またその中に特進クラスの子どもたちのクラスもあり「特別な才能を持った子どもたち」という視点が日本と違っており考えさせられた。林隊員の就労支援の取組はすばらしいと思った。苦労も多いと聞いたが少しでも社会を変えていこうという熱意が伝わってきた。
８月２日（木）	① イロイロ障害者協会 ② ミアガオ国立高校	① 「障害であることを強みとしてとらえ、社会を変えていくために行動していく」という曽田隊員の

		言葉や生き方が印象に残った。様々な国の NGO や人々がこの協会に来て協力している姿に国境など関係ないと思った。 ② 国立高校では、教師の資質の向上が急務であると思った。渡辺隊員の話から、先生の中にかなり温度差があると伺った。子どもの才能をつぶしてしまっている現状があるかもしれない。教育のハード面の支援と合わせて、ソフト面の支援も必要であると感じた。
８月３日（金）	① LOOB の活動視察	経済的に厳しい地域の学校に訪問し、実際に子どもたちと触れあったり、先生方と語り合ったりすることができた。与えられた環境の中で先生方は子どもたちの力を伸ばそうと大変工夫されている。自分自身反省させられた。代表の小林さんの言葉の中に「日本の考え方をそのまま行うのではなく、必ずフィリピン人のフィルターを通してフィリピンのやり方で進めることが大切である」という言葉が印象に残った。また、ボランティアで参加している日本の大学生と話す中で、世界に目を向けさせるきっかけづくりがいかに大切か考えさせられた。与えられた環境の中で最大限努力する姿を日本の子どもたちにも是非伝えたいと思った。
８月４日（土）	① イロイロ洪水防御案件視察	日本の防災教育が世界で一番進んでいるし、学校教育の中できちんと指導されていることがいかに重要かがわかった。フィリピンでは災害の危険性が高い地域でも避難勧告等があってもすぐに戻ってくる現状があり、その必要性が周知されていない。JICA の中村さんの言葉の中に「日本の防災の技術や教育のノウハウを全世界の人が欲しがっている」というものがあり、私たちがやっていることの重要性を改めて感じることができた。
８月５日（日）	アヤラ博物館見学	フィリピン建国前から現代までフィリピンの歴史がジオラマで表現されており、大変わかりやすかった。フィリピンの歴史を学習をすることができた。
８月６日	① Action 活動視察	Action の代表の横田さんから「学校や家庭がす

（月）		べてではない。外の世界の人からの学びをどれだけ取り入れられるか。世の中にはいろんなおもしろい大人がいるんだ。」ということを子どもたちに伝え、実感させて欲しいというアドバイスを頂いた。そこから子どもたちの興味関心が生まれ、おもしろいと感じたことには自分から道を切りひらいこうとする力が生まれてくるとおっしゃっていた。「やれることが少しでもあれば、必ずやりなさい。」という祖父からの言葉を胸に取り組んでおられる姿に元気をもらったような気がした。横田さんの生き方から行動力のすごさを感じ、驚かされた。まずは“外国に目を向ける”というより先に“自分の周りの大人、地域の大人”に目を向けさせる大切さを感じた。また自分自身を常にアップデートさせる必要を強く感じた。
８月７日（火）	今までの振り返り会議 （大雨のため）	校種に別れて、アンケートの集計、データの整理、授業案の検討を行うことができた。また、ミーティングでの今までの振り返りから、それぞれの先生方の感想や考えを伺う中で「子どもたちの可能性をつぶしたくない。」もしそれをさせない力があれば大人である私たちが取り除いていかねばならないと思った。
８月８日（水）	① ワークショップ （大雨のため） ② セント・フランシス学校視察（耳の里親会）	フィリピンの水害の現状を身をもって実感することができた。衛生面での劣悪さや排水システムの不備、計画性のなさが被害を大きくしていると思った。水害での復旧作業中でも私たちを是非といって受け入れてくださった気持ちに感謝したい。校長先生の温かい人柄と、子どもに対する愛情や情熱が言葉一つ一つに現れており大変感動した。耳が不自由であるという障害の壁を少しでも低くしようと手話によるコミュニケーションではなく、言葉でのコミュニケーションをと強く推進されている。そこに日本人の支援があった。マニラでは唯一の進んだ教育を行っている学校だった。信念をしっかり持ち、目標に向かってあきらめず努力する姿勢をみて私自身大変考えさせられた。

全体を３～４枚で作成してください。

平成 24 年 8 月 31 日

平成 24 年度　教師海外研修　研修報告書

派 遣 国　　フィリピン
学 校 名　　相良存立相良中学校

担当教科　　英語科
氏　　名　　梅山　文

１、　今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

〇日本人が当たり前のように食事をし、学校に行き、仕事をしているその同じ時に、発展途上国ではなにが起こっているのかを五感をフルに使って感じ、子どもたちへ還元すること

〇フィリピンの教育環境と貧困との関係について

〇JICA の支援活動や ODA の活用について知ること

〇現地で活動する日本人の活動から学び取る国際理解

〇今までの自分の考え方の枠を取り払い、今後の教育活動と共に人としての生き方について考える機会とする

以上のようなことを主眼において研修に参加した。

２、　視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

〇フィリピンにおける貧富の差はとても大きく、国内の財閥、政府、宗教など多くのものが絡み合って様々な課題が残されていることを知ることができた。そして、課題を克服するために、日本の他にも外国の支援がきていた。国際協力が今までよりとても近くに感じることができた。

〇どんな環境下であってもフィリピンの人たちが明るく、前向きに生きていく姿を見て、改めて命の大切さを感じた。「命を輝かせよう、精一杯生きよう」とよく言うが、生きていることが当たり前、学校に行くのが当たり前の日本において、自分がやりたいことにチャレンジで

きることがいかに感謝すべきことかを私自身が感じられた。
〇家族愛が深く、ホスピタリティーに溢れるフィリピンの優しさ、暖かさがわすれられない。
日本における家族のあり方、人間関係について考える機会を与えてもらった。
〇JICA の青年海外協力隊員や職員の方々、視察させていただいた団体の方々の情熱、バイタリ
ティーに触れ、パワーをもらって帰ってきた。思いや考えを行動につなげることが大切であ
ると改めて気づかされた。
〇宗教や財閥、政府に関わる問題が大きいと感じたが、踏み込めない領域でもある。今後の
フィリピンが課題を克服するためには、やはり草の根の活動に頼るしかないのか。

３、　教育指導への活用について
〇国が違っても同じものを見つけたり、イメージと違っていたという発見や関心させられるこ
とを紹介することで、国際理解を深めさせる
〇世界とつながる日本、世界に支えられている日本、日本人としてできることを意識すること
で、様々な国への興味関心を高め、世界との距離を縮める行動につなげさせたい
〇海外で活躍する日本人の生き方から、自分の考え方を振り返らせ自分自身を見つめる機会と
する
〇夢や希望を持てること、そしてそれに向かってチャレンジできるチャンスを誰もが持ってい
ることのすばらしさを感じ取らせる

４、　研修に関する全般的な所感／意見について
今回の研修に参加して、多くのことを感じ、考え学ぶことができた。日々の生活では、固定化した人間関係の中で教育活動を行っているが、今回の研修を通して、人との出会いの大切さを痛感した。「人を変えるのは人でしかない」というのが、研修を終えた今の私に強く残っている。振り返ってみると、日々向き合っている生徒に出会いの場を提供しているかといえばほとんどできていない。教科指導の中、特別活動をはじめとする全教育活動の中で、もっともっとたくさんの人とふれ合える場を設定することで、生徒がいろんなことに興味を

持ち、考え方や生き方に刺激が加わるだろう。地元地域とのつながりも深まり、人間関係もうるおってくるのではないか。そう考えさせてくれたのは、今回の研修で出会ったすべての人のおかげである。ハプニングもあったが、その中でも人の温かさに触れることができた。このご縁を大切にし、今後の教育活動に努めていきたい。同行してくださった古賀さん、木村さんをはじめ JICA 職員のかたがた、通訳の岡本さん、そして研修を共にした先生方に感謝します。

５、　JICA に対する要望・提言

各団体との連絡等、ありがとうございました。事前研修からしっかりと開発教育についてのレクチーやワークショップをしていただき、視点を定めて研修に参加することができました。貴重な体験をすることができ、うれしく思っています。

研修中の職務上の取り扱いについて、全員が同じ立場で参加することができるよう配慮いただければ幸いです。

６、　今後の本研修参加者へのアドバイス

〇現地研修までに、何を見てくるのか、何を持って帰るのか、ある程度の授業の構想も考えて
おいた方がいいと思う。

〇英語でのコミュニケーションが多いので、事前学習をしておいたほうが言いと思う。

〇歌やダンスでの交流で、現地の人との距離がぐっと近くなった。準備をしておいた方がいい
と思う。

７、　各訪問先の所感

日時	訪問先	所感
７月３０日（月）	①JICA フィリピン 事務所 ②ユニカセ	①フィリピン国内での JICA が行っている支援内容がよくわかった。環境整備が完全でないため、フィリピンで洪水が起こると怪我→マラリア等の病気→死につながること、ミンダナオ島での紛争が支援活動を妨げていること、学校・教員の教育に対する姿勢や貧しいからこそ薬物に手をだしてしまう現状など、ショックを受けるものばかりであった。 ②ユニカセを立ち上げた中村さんの、苦難を乗り越えた強さと優しさすべてを子どもたちの未来に捧げている姿に感動した。また、ユースの子どもたちの接客態度や厨房での仕事ぶりに日本の要素を強く感じた。同じ日本人が、外国の地でその国の課題を克服するために人生をかけて挑んでいることを知り、人一人の持っている可能性に希望を感じることができた。
７月３１日（火）	ソルト・パヤタス	多くのことに驚かされた 1 日であった。①ゴミ山がマニラ中心部からそう遠くないこと②ゴミ山に携わって生きている人の多さと、範囲の広さ③現在、パヤタス地区に住んでいる人の約８０％が貧しさゆえに他地域からの移住してきたこと④フィリピンではゴミの焼却処分が禁止されており、ゴミ山にゴミを捨てるたびに市にお金が入るシステムになっていること⑤街には活気があり、人々の笑顔が多く見られたこと、など予想していたものと現実が大きく違っていた。 そのような中で、現地の人たちが援助に頼らず自立するために、様々な支援活動をしていたソルト・パヤタス。代表の小川さんをはじめ、現地のお母さん方、支援を受けている子どもたちが力を合わせて生きていた。苦しい現状に甘んじてあきらめるのではなく、ゴミ山に行かずに安全に母親が仕事でき、奨学金で子どもが学校に行くことができているシステムは、日本人が撤退してからも機能しつづけてほしいと思う。また、関心を持ち続ける、商品を購入し、情報を発信するという形でつながり支援を続けていきたい。

８月１日（水）	①サンタ・バーバラ 国立総合高校 ②イロイロ特別支援学校	①３，０００人規模の学校ということで、フィリピンで人口が増加しているという現実を実感することができた。小松隊員が衛生面の徹底、生徒の学習へのモチベーションを高めようと指導されていることに対し、生徒は素直に尊敬の念を抱いて学習に取り組んでいた。実習で作った料理は家に持ち帰り、家族からもほめてもらっているとのこと。折り紙のやり方で作った箱に粉を入れることで、洗う洗剤を減らせて家庭からの実習費の負担減とエコにもつながる日本人の知恵が見られてうれしかった。現地の教師の質には問題があるようで残念であった。 ②特別支援学校は、年齢ではなく障害の種類でクラスを分けてある。フィリピンでの障碍者雇用は努力義務程度であり、就職は厳しい。国から障碍者に対しての金銭面でのサポートはなく、寄付金や自助努力にかかっている。就労支援として、作業の他に広く一般的なことや道徳的なことまで教えておられた。日本以上に厳しい現状があるがフィリピンの人々のホスピタリティーに支えられているようだった。
８月２日（木）	①イロイロ障碍者 協会 ②ミアガオ国立高 校	①ご自身も苦難を乗り越えてきた曽田隊員の真摯に活動に取り組む姿勢が心象深かった。フィリピンで学校に通える障がい児が少ないことに驚き、CBRという当事者で生活向上に向けてのシステム作りや行政への働きかけ等がすばらしいと思った。 ②教員のやる気、資質の改善が急務であると感じた。人口が増加する中、教育の質の低さは、将来大きな問題に発展するのではないかと危惧する。
８月３日（木）	LOOB	LOOB でもゴミ山に入らなくても生活ができるような支援活動をされていた。小学校・分校を視察して、授業を受けている子どもたちの元気よさにほっとした。しかし、途中退学者が貧困層に多いという。分校の先生方は、対応する生徒数も多く夜中まで仕事をされるということで、日本より厳しい状況だと感じだ。また、支援活動の一つである栄養補給のためのデザートづくりや給食提供などは地域に即したよく考えられた支援だと思った。

８月４日（金）	イロイロ洪水防御案件視察	①日本の防災技術が非常に役立っている②洪水が起こりそうな危険地域に貧しい不法居住者が住んでおり、被害に遭いやすい③JICA の指導は主に行政に対してであり、住民への指導が浸透していないため NGO の力が必要になってくる、などを学んだ。日本の技術・支援で人の命を救うことができるという事実と、防災教育を受けている生徒たちにも人を救う力があることを伝えたいと思った。
８月５日（土）	アヤラ博物館見学	フィリピンの歴史がよくわかった。過去の日本とフィリピンの関係もよく理解することができた。
８月６日（日）	Action	代表の横田さんのアイデア、生き方、行動力にまず感銘を受けた。まだ若いのに、多くの経験をされてきた実績に驚かされた。しかし、その行動力の裏には、こつこつと人間関係をつくりあげたり、わかりたいことに積極的に関わるという地道な一歩の積み重ねがあるとも気づいた。自分の周りの人の現状や自分に何ができるかをしっかりと見つめることが行動へのスタートになる。私たち教師は横田さん実践から学び、多方面から生徒の成長に向けてのアプローチをしていかなくてはならないと思った。
８月７日（月）	視察中止により振り返り	今までの振り返りやアンケート集計、データ整理を行った。日本のアンケート結果とは違う内容で、興味深かった。
８月８日（火）	①ワークショップ ②セント・フランシス学校視察	台風の影響で大雨が続いており、日本では見たことのない被害に遭遇した。そのような中、被害に遭われ大変な時にも関わらず、私たちを受け入れてくださり一部屋ずつ丁寧に説明し、暖かい手料理まで準備をしてくださっていた校長先生の人柄に触れ感激した。校長先生の優しさと、障がいをもった子どもたちへの愛情が強く感じられ、教育者としてのあるべき姿を見させていただいた。教室には聞こえやすくなるような手立てがされており、他の障がいをもった子どもとの学習も一緒にできるとのことだった。目の前の子どものために全力を尽くすことは、国が違っても教育の基本であると感じた視察だった。

平成 24 年 9 月 19 日

平成 24 年度　教師海外研修　研修報告書

派 遣 国　　フィリピン共和国

学 校 名　別府市立別府商業高等学校

担当教科　商業科

氏　　名　森　　浩　三

１、今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

フィリピンという国を知ること、教育をはじめとする様々な格差の現状や国が抱える問題の把握、フィリピンで活躍する日本人の生き方から学ぶこと、フィリピンの人たちとの交流の中から自分自身が感じ取ることなどに主眼において、これらをどのように次世代を担う子どもたちに伝えていくかを考え研修に取り組んだ。

２、視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

貴重な体験をはじめ、NGO/NPO で活躍される日本の方のお話や、現地で活動されている JICA の協力隊の方の体験談など、あらゆる視点からフィリピンを学ぶことができた。

【参考になった点】

・　UNIQUEASE（ユニカセ）の設立理念でもある「人生の意味を深く考えていこう」という代表　中村八千代さんの言葉に、文化や慣習が違う国でも同じベクトルで頑張っていこうとする態度や、あえてソーシャルエンタープライズとしてこだわる中村さんの姿勢に、海外で活躍するためのエネルギーを感じることができた。

・　パヤタスでは、「何かしてあげなくては！」ではなく一緒に頑張っていこう・共に成長していこうとする姿勢を、NPO 法人ソルトの小川さんをはじめスタッフの皆さん、スカラシップを受けている子どもたち、活気あふれる町の人たちから学ぶことができた。スカラシップを受けている子の「7 年間学んだことを次の子どもたちに返すことが役目です」といった言葉は、次世代を育てようとする責任感と自分たちの住んでいる町のために何か恩返ししたいという気持ちを強く感じることができ、これからのパヤタスの発展を期待させてくれた。

・　聴覚障害を持っている子どもたちの支援のために活動し

ている協力隊の曽田さんのお話から、国の制度を変えるために日本人が政府と交渉するのではなく、フィリピン人が自ら動いて制度を変えていこうとする姿勢が大切であるということを学んだ。

【疑問に思った点】

・　最貧層のフィリピン人で義務教育が受けられない現状がある中で、政府の政策が広く最貧層まで行き届いていないように感じた。

・　様々な学校へ訪問し、筆記用具やノート・ぬいぐるみなど寄贈してきたが、その学校には役立てていただけると思う反面、全体を考えた時に、お金や物ではないもっと別の支援の仕方があるのではないかと感じた。

３、教育指導への活用について

・　フィリピンの様々な現状を踏まえ、「幸せ」・「生きること」・「本当の豊かさ」の意味など大きな視点から自分自身を見つめなおすきっかけ作りができればと考える。多様な価値観が存在する社会で、フィリピンで活躍する人たちに焦点をあてて自己の生き方について考えを深めていくことができるように取り組む予定である。

　国際理解・異文化理解の視点から、生徒自身が「今の自分にできること」を念頭におきながら「共生」について積極的に考えを深めることができるように努める。

４、研修に関する全般的な所感／意見について

・　今回の研修の中で、「私たちは貧しいけど、そればかり考えていたらやっていけない」、「私たちは 7 年間学んだことを、次の子どもたちに返すことが役目です」とパヤタスで聞いた言葉をはじめ、「フレキシブルな対応！」、「次世代の子どもたちのために活動を続けていかなくてはならない」、「どんなに小さくてもやれることがあったらやりなさい。それが世の中を変える一歩につながる」、など様々な場所で様々な力のこもった言葉をたくさん聞くことができた。これらの言葉全てがフィリピンの現状を表していると同時に、「一緒に頑張っていこう！」と励まされているようにも感じられ、私自身力をいただくことができた。

・　JICA をはじめ関連する様々な方たちのおかげで、いろんな気づきをはじめ自分自身のあり方について考えさせられる機会を持たせていただき、貴重な体験をたくさんさせていただいた。これら多くの学びを、生徒に様々な機会において伝えていきたい。

５、JICA に対する要望・提言

・　今回の研修では、洪水のため一部研修がキャンセルになったが、その分振り返りの時間や討議の時間を多く持てたことが良かったと思う。研修が終わってから夜集まって振り返りをする時間はなかなか持てないので、日程を長くしてでもこういった機会を設定した方がいいと思う。

・　家庭訪問だけでなくホームステイ（相手の負担にならなければ）など、

より生活に入り込んだ研修ができれば、さらに気づきや感じることなど多く出てくると思う。

・　教育や生活の面だけでなく文化面からもフィリピンという国を理解するために、世界遺産や資料館など文化的な施設の見学や訪問があってもいいかと考える。

６、今後の本研修参加者へのアドバイス

・タブレット PC があると子どもたちとの交流の時に見せたり、データの整理などに便利だった。

・振り返りシートを PC で作成しておけば、帰国してからの報告書がまとめやすい。

・英語力は大切だと痛感した。子どもたちともっと会話をしたいのに言葉が出てこなかったので、聞いてみたい項目だけでも英語訳を作成しておくと便利である。

・研修先で見たり聞いたりしたことが全て教材となるので、関係なさそうな乗り物や町の風景、めずらしい食べ物などの記録（撮影は許可を受けて）も頻繁に行うといい。

７、各訪問先の所感

日時	訪問先	所感
7 月３０日（月）	JICA フィリピン事務所 ソーシャルエンタープライズ UNIQUEASE（ユニカセ）中村八千代さん 	JICA では、フィリピンにおいて戦略的に地方での援助を下記の 3 つのポイントに絞って取り組んでいることを学んだ。①経済成長②貧困削減③平和構築　また全ての人が恩恵を受ける開発として、防災に関するインフラ整備をはじめ、教育メディアなど多岐に渡って活動する中で、円借款の規模は大きく無償支援の規模が縮小してきていることに政府の反応などもっと詳しくお聞きしたかった。 ユニカセでは、貧困のため勉強できなかった青少年の自立支援のために取り組んでいる中村さんの姿に感銘を受け、「子どもの成長が見れる時が幸せ」と言われた言葉に、教員としてとても共感を覚えた。
７月３１日（火）	ケソン市パヤタス地区ゴミ処分場（NGO ソルトパヤタスで活動する代表小川恵美子さん） 	想像していたゴミ山を目の前にして、その大きさが想像をはるかに超えていたことや、そこで暮らす人々の生活のあまりにも厳しい現状を目の当たりにして、計り知れない格差の実態を感じ取ることができた。 グループ討議でソルトパヤタスの方が言われた「人々のスマイルの裏側にある顔を想像してみてください」の言葉や、お母さんの一人が言われた「私たちは貧しいけど、そればかり考えていたらやっていけな

		い！だからいつも笑顔でいるんです」の言葉に強い刺激を受け、逆に勇気と力を頂いた。
８月　１日 （水）	サンタバーバラ国立高校　小松綾子隊員（料理）の活動視察 イロイロ特別支援学校林千恵隊員（ソーシャルワーカー）の活動視察	活動視察では、次世代を担う子どもたちのために様々な分野で活躍する JICA の隊員さんたちの草の根的な取り組みが、子どもたちだけでなく、住みやすい環境をつくる基盤づくりとして、地域や社会に大きな影響を与えていることに国際協力の意義とやりがいを感じた。
８月　２日 （木）	イロイロ障害者協会 曽田夏記隊員 ミアガオ国立高校 渡辺賢宏隊員（服飾）	障がい者が健常者と変わらず生活できる社会を目指して取り組む協会のひたむきな姿勢に、いつかフィリピンの障がい者を取り巻く社会の現状を変えていくことができると確信した。「今自分が取り組んでいることがすぐに花を咲かすわけではない。次世代の子どもたちのために活動を続けていかなければならない！」という協力隊の曽田さんの言葉は、障がいを持つフィリピンの人たちだけでなく、周りのたくさんの人たちの可能性を大きく広げていると実感した。
８月　３日 （金）	NGO　LOOB 活動視察 マンドリアオ高校 他２校 	今回訪問させていただいたマンドリアオ高校や２つの小学校で教育環境の不十分さを痛感した。教科書や教室・教員の不足をはじめ、衛生的にも校舎の下に排水が流れず溜まっている現状や、校舎の崩壊による危険性など、安全面でもかなり厳しい状況にあり、充実した教育環境で学習するためには課題が山積みであることを目の当たりにした。国が取り組まなければならない課題の優先順位が教育でないことに憤りを感じた。 そんな環境の中でも、子どもたちの学びたいという意欲を感じることができ、それを支援する LOOB のチャイルドマインディング活動や地域の母親たちによる裁縫プロジェクトなど、とても地域を盛り上げていると感じた。
８月　４日 （土）	イロイロ川洪水防御案件視察　中村隼人さん 	日本の支援によるフィリピンのインフラ整備事業が、洪水などの被害から国を守っていることにつながっている現状を見て、日本の技術力の高さを改めて感じるとともに、JICA の提唱する「全ての人が恩恵を受ける開発」を実感することができた。 「１０ある災害を７にまで減少させることが大きな目的」と言われた中村さんの言葉に、災害に対する対

		処の難しさを実感した。被害が起きてからの対応に重点を置くのではなく、防災に対する取り組みに重点を置くことの大切さを根付かせようと奮闘している中村さんの熱意を感じ取ることができた。 　せっかく整備された河川などがゴミや生活排水で詰まる事象が起きていることから、町のゴミの散乱の様子や投げ捨ての様子を見ても、国民のゴミの問題に関する意識の違いに疑問を感じた。
８月　５日 （日）	資料整理・教材収集 	午前中ミーティングのあと校種に分かれてこれまでの資料の整理や各学校でとっていただいたアンケートの集計をした。帰国してからの授業の展開について、大きなテーマを「生き方について　自分自身を見つめなおそう」と進路を踏まえた方向性を定めることができ、充実した話し合いができた。 　このミーティングの中で出てきた「土壇場力」という言葉が、これからの高校生にもぜひ身に付けさせたい力のひとつとして私自身考えさせられ、とても印象に残った言葉である。
８月　６日 （月）	NPO 法人 ACTION 横田宗代表 	横田さんの、思ったらすぐに行動するその姿勢にとても惹かれた。高校生の時に、一人でフィリピンに赴くその行動力に脱帽すると同時に、現代の高校生 100 人のうち、横田さんのように行動できる生徒が何人くらいいるか疑問を感じた。 　女性の収入向上支援である ecomismo（ｴｺﾐｽﾓ）で働くお母さんの家庭訪問では、パヤタスでもそうだったが普段の観光旅行では絶対にありえない貴重な経験をさせていただいた。片言の日本語で「私の家貧乏だけど、I’m Happy」と言ったお母さんの表情がとても印象的で、生活環境よりも精神的に幸せであることが、人生の中で大きなウェイトを占めることなど、それらを含め寛容な精神の持ち主だと思った。モノの豊かさが「幸せ」なのか？「幸せとは何なのか？」深く考えさせられる体験をすることができた。

８月　７日 （火）	洪水のためアパリ視察キャンセル・ホテルでワークショップ 	フィリピンの高校の先生から「なぜ豊かな国の日本で自殺者が多いのですか？」と質問された時に、改めて精神的な豊かさの重要性に気づかされ、私も含めて今の日本人に欠けている大切な要素をフィリピンの人たちは持っていると感じた。 今までお会いできたフィリピンで活躍する日本人の方に共通して言えるのは、とにかく行動しようとするチャレンジスピリッツであり、やはりフィリピンの国に対して、何かしたいという思いが彼らを動かしているのだと思う。その背景には「フィリピンが好きなんだ！」という気持ちがあるのだろう。日本を飛び出して知らない国の知らない地域で活動しようとする姿勢に私自身も何かできないかと考えさせられた。
８月　８日 （水）	耳の里親会視察 セントフランシス小学校 	大洪水の後始末などで大変忙しい中、我々の訪問を受けていただき大変感謝の気持ちでいっぱいである。セントフランシス小学校の浸水の被害の様子を見て、とてもいたたまれなくなった。復旧作業にかなり時間を費やすと思うが、1 日も早い復興と今後の活躍・発展を期待している。 ライフラインが全てストップしている中、ろうそくの明かりのもとで学校の紹介や施設設備の説明をしていただいた校長ベッキーさんの、ビジョンや取り組みが良くわかり子どもたちに対する温かい気持ちと、社会を変えていこうとする熱意が伝わってきた。

平成 24 年 9 月 17 日

平成 24 年度　教師海外研修　研修報告書

派 遣 国　　フィリピン
学 校 名　　宮崎大学教育文化学部付属中学校
担当教科　　英語科
氏　　名　　田村　京子

１、今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

〇各学校現場での取組・特徴、教員の姿勢・取組
〇支援を受けながら学校に通っている児童・生徒の現状
〇NGO・隊員としてフィリピンの教育支援に携わっている日本人の役割・取組

２、視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

フィリピンの教育に関わる学校現場、NGO の活動を視察することが出来、現状を少し理解することが出来た。教育を受けることが出来ない児童たちの原因は、

経済的な問題が主であるが、その中でも学校に通う交通費が捻出できないためにあきらめてしまうと言う事実は、貧困の度合い、国内における教育施設の不十分さを表しているように思う。今回の研修テーマであった「格差」という点に関しては、歴史的にも社会が抱える深刻な問題であり、国の中心にいる、いわゆる「富」を得ている人が構造変革に取り組まない限り、大きな変化は望めないと実感した。その煽りを大きく受けるのは、どこの世界でも子供達であり、最たるものが教育の不平等である。「教育の格差」を知る上で、整った環境で授業を受けることが出来ているフィリピン人の子供達が通っている学校はどうなっているのかという疑問は高まった。草の根レベルの NGO の方たちの取組が成果を上げ、全体から見ると対象となっている人数は少ないのかもしれないが、教育を受ける機会を得た子供達がいることが一筋の光である。

３、教育指導への活用について

〇フィリピンという国の現状を通して、途上国の抱える問題について理解し、考える機会にする。

〇フィリピンで活躍する日本人の姿を通して、生き方を考えるキャリア教育につなげる。

〇「つながる」という視点を英語の授業の取組に取り入れていきたい。

４、研修に関する全般的な所感／意見について

個人の旅行では 12 日間という期間で到底実現できない毎日が充実した学びのある研修であった。学んだ点は多くあるが、あえて１つに絞るとすれば、ACTION 代表の横田さんが言われていた今の日本に足りないもの「今日をがんばるというエネルギー」を出会った人々から感じたことである。それまでフィリピンに抱いていた「苦しい環境下におかれ大変で可哀想だ」との見方・考え方がソルトパヤタスの人々が持つパワーに触れ、一変した。彼らが抱く希望を共有していくことが大事であると感じた。課題を１つあげるとしたら、教師の質・意識の向上を図る必要があるということである。高校の教師と意見交換する中で実感したのは、短い期間での交流であったため一概に言えないとは思うが、施設的課題にばかり視点があり、人的課題に目を向けていないということであった。分校の小学校教師がより良い授業をと取り組んでいるのを見た時に希望を見出すことはできたが、授業力向上に向けての取組が体制的に整っているのかが疑問であるし、ないのであれば教育全体の向上を図る上で、教師の質を向上させることは最優先課題であると考える。意識ある教員が育つことで、政府への働きかけもより実のあるものになっていくのではないだろうか。

５、JICA に対する要望・提言

事前・事後も含め全研修の内容が充実しており、大変感謝している。フィリピンでの研修においては、昨年度までの反省を受けて、資料整理の時間を設けてくださったことも、タイトなスケジュールの中では有難かった。この充実した研修の中に、１～２か所で良いので、いわゆるその国が対外的にアピールを

している観光地を知る機会を入れて頂けると、授業を構築する上で生かせるかと思った。この研修を受けては、実際に見て聞いてきたことを伝えることが重要であると考えるため、その国がプライドとしている側面についても学ぶことが出来ればと思う。フィリピンの教育の現状について JICA の方がまとめた報告書やフィリピンが公的に出している学習指導要領のような資料が、可能な範囲で手に入ると有難かった。

６、今後の本研修参加者へのアドバイス

〇体調を整えて参加すること。研修中も睡眠をしっかり取るなど体調管理に努めること。

〇アンケートという形で質問するポイントを明確にして、全員で共有していたことは良かった。

〇研修中に意見交換する機会があったことは、自分の考えを整理し、深める上でも参考になった。

〇パソコン・ビデオカメラ等を持参する人を確認し、各施設での役割分担をしたことは良かった。

〇皆が持参したお土産を訪問先ごとに仕分けしたのは良かった。

７、各訪問先の所感

日時	訪問先	所感
７月３０日（月）	① JICA フィリピン事務所 ② uniquease：ユニカセ	① 日本の支援の大きさ、継続性を知り、JICA の支援を知る上でフィリピンを知ることは重要なのだと思った。 ② 中村さんの理念や思いがここで息づいているということは、設立当初から働いているローズと話したことで確信できた。“Children at risk”のためという意識が“ユニカセ”に携わる人々を動かしているということを実感した、
７月３１日（火）	① ソルト･パやタス活動視察	① 以前、テレビで見たスモーキーマウンテンが目の前にあり、そこで暮らす人々と接することが出来たことは非常に貴重な機会であった。自分の想像とは少し違っており、地域に活気があり、パワフルなお母さん達と夢を語る子供たちの様子から希望があることを実感した。小２の少年が言った「夢は総理大臣。貧困がなくなる社会を作りたい。」との言葉、3･11 の東日本大震災を受けて毎月 11 日に追悼イベントをしてくれた子供たちの思い等、ここで見て、聞いて、感じたことを教育現場に還元していきたい。小川さんの「つながり続けることが大事」との言葉を胸に刻んで。
８月１日（水）	① サンタ･バーバラ国立総	① ５年間有効な資格である National Certificate の推進について話を伺った。この資格を取得させようという

	合高校:小松隊員（料理）の活動視察 ② イロイロ特別支援学校:林隊員の（ソーシャルワーカー）の活動視察	動きが、設備を整え、各専門科の生徒たちの技術を役立てる場面につながったことに隊員が「これがやりたかった」と言われていたことが印象的だった。２年間という短い任期の中で、小さなことでも継続して取り組み、教職員・生徒たちの信頼を集めるには大変な苦労があったことと思う。 ② 視覚・聴覚・知的障害者のクラスと特進クラスで編成されている exceptional school であった。国は違えど、特別支援学校の児童・生徒たちは素敵な心を見せてくれた。聴覚障碍児の子供達が、手話もまともに出来ない私たちとコミュニケーションを取ろうとしてくれている姿に感激した。隊員が取り組んでいる就労支援は、対社会という取組の中で、開拓することは難しく、苦労が多いようだった。
８月２日（木）	① イロイロ障害者協会:曽田隊員(プログラムオフィサー)の活動視察 ② ミアガオ国立高校:渡辺隊員（服飾）の活動視察	① イロイロ市の学校に行けない障害児の割合は、全体の98％で、前日に訪れた SPED に通っている児童たちは幸運である。その通えない児童たちのための施設を建設するという予定を聞き、大きな進展なのだろうと実感した。協会は、積極的に行政に働きかけを行っているが、持続的な取組にすることは難しいとのことであった。 ② 中学生とほぼ同じ年齢の彼女たちが、私たちの呼びかけに素直に応え、笑顔で一緒にダンスをし、お返しに美しい歌声を聞かせてくれた。彼女たちの素晴らしい可能性を実感した。フィリピンの教育の問題点の１つは、学校全体の学ぶ雰囲気・環境を作る教師の存在であることを実感した。
８月３日（金）	① LOOB 活動視察	① LOOB さんが組んで下さったツアーのおかげで、フィリピンの教育の現状をより深く理解し、これまでの情報を整理することが出来た。K-12 プログラムに移行している現段階で多くの混乱が生じているようだった。視察した２校の小学校では、授業作りに熱心に取り組んでいる様子が見られた。１つ目の学校は、Coca-cola や pepsi などの看板が多く見られ、様々な企業がサポートしていることが分かった。LOOB の小林さんは、食育の面から見ると問題があると言われていた。２つ目の学校は、ごみ山のふもとにある分校であった。その学校は、水上と言って良い場所で、非常に厳しい環境

		の中にあった。そこでは、英語の授業を参観することが出来たが、指導過程にも工夫があり、フィリピンの教師の質向上への期待が高まった。
８月４日（土）	① イロイロ川洪水防御案件視察	①洪水対策は日本が一番支援を行っており、イロイロ島での対策も成果を上げ、市街地浸水 80%が 0%になったとのことである。防災意識については、ほとんどの国が意識が低いということも興味深かった。避難という意識は、比較的あるということだが、防災教育については、取組が甘く、指導が必要であるという印象を受けた。
８月５日（日）	① 資料整理	① 校種別でアンケート集計、授業作りについて打ち合わせが出来た。
８月６日（月）	① ACTION 活動視察	①代表の横田さんの生き方、発想力からは学ぶものが多かった。日本で ecomismo を紹介する際は、ヘアーサロンに特化しているものも面白い視点だと思う。美容師さんやダンサーを招聘し、子供達と交流してもらう“カプロジェクト”の発想、「フィリピンの仕事 100」の発刊等、未来を見据え、フィリピンの子供達に何が必要かを常に考えているからこそ生まれてくるのだろうと思う。先住民の酋長さんが横田さんに「自分の国や地域をよくしようとすでに活動しているのか」との問いは、日本にいる自分自身として大事な視点を頂いたと思う。
８月７日（火）	① 意見交換･資料整理	①洪水のため、視察は中止になった。代わりに行った皆との意見交換や今後の取組に向けて資料整理等をしたことは、大変有意義であった。
８月８日（水）	① ワークショップ･資料整理 ② 耳の里親会活動視察	①古賀さんが行ってくださった「貧困」というテーマのワークショップを通して、意見交換を行うことで、問題点に気づき、整理することが出来た。②内耳を使っての指導を行っており、学校では床にワイヤーを通し、振動を通して話している内容を理解する仕組みになっている。学校には、聴覚障害児のみならず、様々な障害児とともに健常児を受け入れており、インクルージョン教育が行われていた。新生児の聴覚チェックを行い、診断を行うこともスタッフが行っている。家庭に対する教育も徹底しており、手話ではなく会話でのコミュニケーションを行わせている。洪水被害の後であったため、暗がりの

		中での視察であり、内容を十分に理解したとは言えないが、ここに足を運ぶことが出来た意味は大きいと思う。移動の車中から見た街や人々の様子から洪水被害の現状を多少理解することが出来た。

全体を３～４枚で作成してください。

平成24年度　教師海外研修　研修報告書

派 遣 国　　フィリピン
学 校 名　　鹿児島県立志布志高等学校
担当教科　　英語
氏　　名　　東丸　直哉

１、今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

私は５年前、フィリピンのゴミ山で働く少女の特集を日本のテレビ番組で視聴し、大変強い衝撃を受けた。今年度の本研修テーマは、フィリピンの「格差と教育」であったため、まさに私が最も興味を抱いていたフィリピンという国の“今”を自分の目で見つめ、そしてその格差を感じ、また教育システムや問題点について学びとることが、本研修に臨むにあたっての私の目的であった。

２、視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

本研修では、普通の旅行ではなかなか行くことのできないフィリピンの学校やゴミ山、NPOなどを視察し、また現地の人々やフィリピンで活躍する様々な日本人と話をする機会が持てたことが一番の収穫であった。JICAフィリピン事務所の皆さん、青年海外協力隊員の皆さん、日本のNPOの皆さん、そしてゴミ山で暮らす人々や学校の先生や子ども達との交流を通して、様々な角度からフィリピンの“今”を学ぶことができた。

３、教育指導への活用について

本研修では、私個人として学んだことのみならず、教員仲間や同行員と、体験や感想を共有できたことが財産であった。皆で協力して撮った写真や動画、また現地でとったアンケートの集計も共有することができ、今後の授業実践で役立てることができるであろう。また、帰国後の事後研修やMLでの情報交換を通して学んだことを、今後の教育指導に活かしていきたい。

４、研修に関する全般的な所感／意見について

本研修では様々な人々と出会った。ゴミ山で暮らす子ども達と子どもの将来を心配する母親達、設備が十分でない学校で働く先生方や一生懸命に学ぶ子ども達、自分たちの地位と生活の向上のため、精一杯日々を生きる障がい者達。フィリピンには、日本とは明らかに比べものにならないほどの貧しさがあり、自分の力だけでは抜け出すことができない貧困や格差が確実に存在した。そんな暮らしの中でも、明るい笑顔と家族への思いを忘れないフィリピン

の人々に、日本人が学ぶべき姿があると痛感した。また、フィリピンの貧しい人々の暮らしを少しでも改善しようと、地道に活動をするJICAや現地NPO、ボランティアなどの日本の人々の姿に大変感銘した。教師として、本研修で学んだことを、日本の子ども達に伝える責務を感じた。

５、JICAに対する要望・提言

本研修では、JICA の事業や青年海外協力隊の活動視察だけではなく、現地の学校や特殊学校、

またフィリピンの貧困を象徴するゴミ山での暮らしなどを視察することができたと同時に、それぞれの場所でフィリピンの人々や子ども達と交流することができ、大変貴重な経験をさせて頂いたと感じる。また、フィリピンで地道な活動をされる NPO やボランティアの日本人と話す機会が多く与えられたことも大変ありがたかった。また、日本での事前・事後研修も充実しており、十分な事前準備をして研修に臨め、また、帰国後はじっくり振り返ることができたことも良かった。今後も、本研修が末永く続くことを期待する。

６、今後の本研修参加者へのアドバイス

事前研修から、実際の海外研修まで 3 週間ほど期間があったが、実際はなかなか準備に充分

な時間が割けないのが実情であった。しかし、今年度良かった点は、各訪問場所での挨拶や動画撮影担当者、また現地と日本の学校でのアンケート内容を事前学習の場で決めていた点である。そして、研修開始前から、教員と同行員がMLで情報交換できた点も大変良かった。

各訪問先の所感

日時	訪問先	所感
７月３０日（月）	ＪＩＣＡフィリピン事務所	空港やホテル、また JICA フィリピン事務所がある高層ビルなど、マニラでは常に銃を持つ警備員と麻薬探知犬がおり、この国の治安の悪さを実感した。 フィリピンにおける JICA の支援の歴史は古いが、なかなか貧富の差が狭まらない現状に、この国の抱える根深い政治・社会的な問題を感じた。
７月３０日（月）	ユニカセ	ストリート・チルドレンの自立に情熱を注ぐ中村さんの姿に只々感動した。何度も子ども達に裏切られながらも、“希望”を持ち続け、子ども達に愛情を注ぎ続ける中村さんの想いは、着実に子ども達や日本からの学生ボランティアに引き継がれていた。
７月３１日（火）	ソルト・パヤタス	今回の研修で最も行きたかったゴミ山の視察であった。パヤタス地区のゴミ山で暮らす人々を支援する団体ソルト・パヤタスは、母親の自立支援に加え、子ども達

		を奨学金、図書館、補習、ライフ・スキル等の様々な角度から支援している。実際に自立支援をしている家庭を訪問し、劣悪な環境に言葉が見つからなかった。フィリピンの最貧困層の暮らしを目の当たりにし、この国の深刻な貧困と貧富の格差に愕然とした。ただ、彼らの明るい笑顔に僅かながら救われた思いがした。
８月１日（火）	サンタ・バーバラ 国立総合高校	小松隊員が料理の指導をする学校を視察した。普通科と職業系の生徒が在籍する 3 千人規模の学校であった。これまで高校は 16 歳で卒業であったが、18 歳まで就職ができないため、大学に進学しない子ども達が荒れ、社会問題となっていたようだ。そこで今年度の 1 年生より高校は 18 歳までとなった。料理の資格取得に向け熱心に授業に臨んでいた。アンケート結果では、私の勤務校の 1 年生と比べると、夢が明確であり、自分のことが好きだと考えている生徒が多いことが印象的であった。
８月１日（水）	イロイロ特別支援学校	林隊員がソーシャル・ワーカーとして関わる学校と授産作業施設を訪問した。フィリピンの障がい者人口は９４万人（2000 年）だが、実際はその 8 倍とも言われており、障がい者の就学率はたったの２％とのことであった。障がい者に対する予算がなく、障がい者の雇用も努力義務であるため、就職も大変厳しいという現状があった。貧しい人、障がい者など、立場の弱い人が常に厳しい現実にさらされていると感じた。
８月２日（木）	イロイロ障害者協会	JICA 職員の現職として青年海外協力隊に参加している曽田隊員の活動を視察した。プログラム・オフィサーとして、障がい当事者のグループを各村で作り、home visit やラジオの広報などを通して、障がい者への理解を呼びかけている。「(障がい者に）哀れみではなく機会を与えてください」というモットーが、障がい者の就学率や就職率の低さを切実に訴えているようであった。
８月２日（木）	ミアガオ国立高校	渡辺隊員が服飾の指導をする高校を視察した。8 つのコースがある 1500 人規模の学校であった。規律がなく、授業が成り立ってないクラスもある現状を目にし、貧困や障がいを理由に学校へ通えない子ども達がいることを考えると複雑な思いがした。この国の教育制度の問題点を垣間見た。服飾の授業では、生徒と少し交流することができて良かった。

８月３日（金）	LOOB 活動視察	LOOB の UCLA 多目的ラーニングセンターでフィリピンの教育システムについて学び、マンドリア高校、マンドリア小学校に訪問した。フィリピンでは小学校の就学率は９６％であるのに対し、高校の卒業率は５０％という厳しいデータがある。マンドリア小学校や分校では子ども達の明るい笑顔に元気をもらうと同時に、この子ども達の将来がより良いものであるように願わずにはいられなかった。LOOB は小学校での食育支援とともに、ごみ投棄場のウエストピッカーズ（ゴミを拾いで生計を立てる人々）の支援を行っている。また、子どもを一時預かるチャイルド・マインディング活動を週に３回している。実際に子ども達と交流をして楽しいひと時を過ごしたが、彼らの帰る家が、ごみ投棄場近くの臭いがひどい劣悪な環境であるという事実に心が痛んだ。
８月４日（土）	イロイロ川 洪水防御案件視察	中村さんの案内でイロイロ川のハロ放水路等を視察した。せっかく川を整備しても、違法居住者が住み着いたり、川へのゴミ投棄による洪水防止機能の低下などの問題があり、完成後の地元自治体や住民の管理や努力が必要不可欠であると感じた。また学校における防災教育と避難訓練の必要性を改めて認識した。まずは子ども達の意識を高めることで、大人の意識を変えていくことが大切であるということであった。
８月６日（月）	アクション （エコミスモ）	アクションは児童福祉、青少年育成、女性の自立支援など、様々な活動を行っている。横田さんの人柄、行動力、マーケティング能力などに圧倒された。お菓子等のパッケージから作ったエコミスモ商品は、質が高く、母親達は自分達の仕事に誇りを持っていた。実際に商品を内職で作っている家庭を訪問し、豊かではないながらも、なんとか暮らしていける状態に満足しているようであった。横田さんの生き方自体も大変魅力的であり、日本の子ども達に是非紹介したいと思った。日本からスタディー・ツアーでやってくる子ども達の中には、現地でのホームステイを通して、日本で感じられなくなった家族の在り方を学ぶ子もいるという話が印象的であった。
８月８日（水）	セント・フランシス 学校	連日の洪水被害の中、ベッキー校長先生の好意により午後からの訪問が可能となった。日本の「フィリピン耳の里親会」の支援により、聴覚障害児のための設備がマニラで唯一整っている学校であったが、洪水により教室

		は水浸しであった。そんな最中、ロウソクを片手に教室を案内し、軽食まで用意してくださったベッキー先生のもてなしの心に研修者一同、大いに感激した。ホテルまでの帰りは、洪水により車が浸水しハラハラしたが、現地の人々の被害に比べれば何でもないと感じた。

平成 24 年 8 月　　日

平成 24 年度　教師海外研修　研修報告書

派 遣 国　　フィリピン
学 校 名　　曽於市立末吉小学校

担当教科　　教科全般
氏　　名　　久保　奈都紀

１、今回の研修参加に際して，特に主眼をおいた点

○　フィリピン(発展途上国)の現状と教育を知る。
○　開発教育，国際理解教育を学び，考えるための視野を広げる。
○　海外で働く日本人にふれ，自分にできることを考える

２、視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

物的な豊かさと心の豊かさは比例しないと実感。与えられた環境の中で，自分にできることを考え懸命に生きている姿に心を打たれた。「懸命に生きる」，ここに心の豊かさの源があるのでは…と思った。

その国の気質・国民性は各々で，だから世界はおもしろいのだと感じた。その国の文化を良い・悪いで分けるのではなく，その文化を知り，受け入れつつよいと思ったことを吸収しながら自分の視野も心も広めていこうと思う。フィリピンは，のんびりした印象でした。

今回の研修で，海外の教育を知ると同時に，自分の日本に対する無知を痛感。様々な事業にアンテナをはって，日本のこと，日本の世界との関わりをもっと勉強していきたい。

３、教育指導への活用について

○　世界で活躍する日本人・世界との関わり
○　幸せってなんだろう？自分にできることを考える
○　異文化体験

私が訪問し，感じたことを伝える授業ではなく，子どもたちが自分自身にできることを考える授業ができるよう研究していきたい。

４、研修に関する全般的な所感／意見について

教育に視点をおいて，海外に出るのは初めてでした。生活レベルの「格差」を顕著に感じたフィリピンで，教育を受ける子どもたちの権利を保障しようと奮闘する多くの人に心を打たれた。
今回の研修を通して「前向きに，素直に，一生懸命生きていこう」と思った。

５、JICA に対する要望・提言

今回の研修は，私にとってフィリピンの教育に触れる夢のような日々でした。旅行で行っても体験できないことばかりで，この機会に深く感謝いたします。毎日の情報量の多さとともに素晴らしい方への出逢いもあり，どっぷりと研修にはまった日々でした。事前・事後研修も含め，多くの先生方の考えや思いにもふれ，私自身の刺激となりました。

これからもこの研修が続くことを願います。青年海外協力隊の方々の話やＮＰＯ団体の方々のレクチャーが貴重な体験となりました。ありがとうございました。

６、今後の本研修参加者へのアドバイス

事前の訪問国の歴史や教育を調べておけば良かったと思いました。
1 週間いると，その風景になれてきますが…最初の感動を大切にして，記録も丁寧にしておくと帰国後に助かります。

７、各訪問先の所感

日時	訪問先	所感
７月３０日（月）	ＪＩＣＡフィリピン事務所訪問 ユニカセ訪問（中村さん）	フィリピンマニラは私の想像していた国の様子と違った。超高層ビルに驚いた。 ＪＩＣＡ事務所では，フィリピンと日本の関わりを知る。資金や技術協力を行っていることを知った。その資金は自分たちの税金。誰もが国際協力に関わっていること伝えていくべきである。 社会的企業を設立した中村さんの使命感・思いの強さに感動。強い信念を持って生きる輝いた女性。ユニカセで働く１８歳少女の言葉に胸を打たれた。「学校

		に行けていなかった時は，自信もなく夢もなかった。ここで仕事をしてからは夢ができた。努力をすれば，自信もついて変わっていける。私は，そのことを今のストリートチルドレンに伝えていきたい」環境が人を変える。努力できる環境が少ないことが課題である。
７月３１日（火）	特定非営利活動法人ソルト･パヤタス活動視察（小川さん）	貧しい生活の中で，明るく生きるお母さんたちの姿や子どもたちの姿に心を打たれた。地域の絆の強さ，協力体制に魅力を感じた。今の日本が失いつつあるものが，そこにはあった。与えられた環境を，どう受け止め，どう生きるのか。それは自分次第と考えさせられた。
８月　１日（水）	サンタバーバラ国立総合学校でＪＩＣＡ小松隊員の活動視察 イロイロ特別支援学校でＪＩＣＡ林隊員の活動視察	限られた環境の中で，工夫がなされていた。失業率，将来に不安を抱える中でも子どもたちは自分の力を身につけようと精一杯努力していた。 特別支援学校には知的，精神，視覚，聴覚と伴に特進クラスもあった。‘特別な才能を持っている人’という考え方のもとにつくられていて，日本との考え方の違いに驚いた。知的のクラスでは障がいの程度の応じて分けられていて，色々な学年の子どもたちが一緒に作業をしていた。 ジョブコーチシステムについて学んだ。
８月　２日（木）	イロイロ障害者協会でＪＩＣＡ曽田隊員の活動視察 ミアガオ国立高校（中等学校）のＪＩＣＡ渡邉隊員の活動視察	社会と障害者の両面にアプローチをし，成果を出されている素晴らしい協会であった。 曽田隊員自身も障害者となり苦しかった過去があったことを話された。自分と向き合い，障害を受け入れ，前向な姿に力をもらった。 ミアガオ国立高校の訪問。管理職も教職員もほぼ女性。学校は授業と休み時間の境がよく分からず，生徒がずっと教室と廊下をウロウロしていた。フィリピンの

		未来が心配になった。児童生徒の学力向上・規律を学ばせるための学校である。学校の役割は大きい。将来を担う子どもを育てる教師の役割も大きい。教師力向上の重要性を改めて感じ，自分自身の教師としての使命感・責任感を感じた訪問となった。
８月　３日（金）	ＬＯＯＢ活動視察（小林さん）	教育について詳しく知ることができた。大きな改革中であり，それに伴う現場の混乱が伺えた。教員不足・学校不足・教材不足に苦しんでいた。一方，教員志望・教員待機中の人も多く，なかなか職にもつけず，海外に出稼ぎに出る人も多いという現状にもどかしさを感じた。 　小学校では，一生懸命学ぶ子どもの姿を見て嬉しかった。しつけ面もしっかり教育されていた。 国・教育環境は違えど，教育の大切さ，教育の意味・教員の思いは同じである。
８月４日（土）	イロイロ川洪水防御案件視察	この洪水防御案件のおかげで，今回の洪水は被害が少なかったという。成果が出ていたことが嬉しく感じる。
8 月 5 日(日)	資料整理 マーケット視察 博物館視察	日本にあるような大型商業施設と変わらない商業施設。人々の生活レベルの経済格差が大きすぎて，心がついていかない。博物館はジオラマが立派で，フィリピンの歴史にふれることができた。
８月６日（月）	ＮＰＯ法人ＡＣＴＩＯＮ（横田さん）	フィリピンの子どもたちが自分自身の力で夢にむかってチャレンジできる環境作りをするという思いのもと活動をされている横田さんの事務所を訪問。「どんなに小さいことでも，やれることがあったらやりなさい。」その言葉は響いた。今の自分のやりたいことややるべきこと，精一杯できているか…その日を大事に，一生懸命生きていくという思いをもちたい。
8 月 7 日(火)		集中豪雨のため，政府機関・学校ともに

		休業，視察は中止。今までの訪問先も大きな被害を受け，避難生活を強いられていた。出逢った縁を大切に，できることをしていきたい。
8月8日(水)	セント･フランシス学校(耳の里親会支援学校)訪問	耳の里親会が支援をしている学校を訪問した。この学校は教材・教具も充実しており，少人数での教育が実践されていて，具体的な操作をしながら学ばせるなど学校としての機能がしっかりとしていて素晴らしい学校であった。ただ前日の洪水被害を受けていて，３０センチ以上浸水。水道も電気もとまった状態の中，ろうそくの明かりで丁寧に説明をされ，心遣いをされた校長先生に感謝。早くこの学校に子どもたちの笑顔が戻るよう願う。
8月9日(水)	移動	空港には２時間遅れのため、５時間滞在。 時間にルーズな国で、待ち合わせ時間も守らない。公共交通機関も遅れる。レジに人がたくさん並んでいても、自分の役目の仕事だけをする。そんな環境に滞在し、そんなに急がなくても、こちらのペースでのんびり生きていくのもいいのかなと思う。のんびり生きる生き方に憧れながらも、日本に帰ってきて日本の正確さに安心する私はやっぱり日本人なのだと思った。

平成 24 年 8 月 31 日

平成 24 年度　教師海外研修　研修報告書

派 遣 国　　フィリピン
学 校 名　　指宿市立山川中学校

担当教科　　英語科
氏　　名　　宿里　京子

１、今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

今回の研修では次の２点に主眼をおいた。１つ目は，フィリピンの教育の現状である。貧富の差，生活環境の差，障害の有無がどのようにフィリピンの子どもたちの教育に影響をもたらしているのかを知りたいと思った。２つ目は，フィリピンで活動する日本人の想いである。国際協力の現場にいる日本人が日々どのようなことを考えて活動をしているのか。その想いを知ることで日本にいる私たちがすべきことが見えてくるのではないかと考えた。

２、視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

参考になったことは，フィリピンの人々の生き方である。私たちが出会ったフィリピンの人々は，どんなに困難な状況にあっても希望を忘れていなかった。それどころか明るく前向きに生きていた。「私たちは貧しいけれど，そればかり考えていたらやっていけない。」ゴミ山の麓に暮らす母親がこのように言っていた。困難な状況に負けず，強くたくましく生きる姿に学ぶものがあった。

パヤタス地区のゴミ山

パヤタス地区で刺繍の仕事をする人々

疑問に思ったことは，フィリピン国内の人々の格差に関する考え方である。格差が存在する現状をどう思っているのか。富裕層に属する人々の考え，貧困層に属する人々の考えをそれぞれ知りたいと思った。

３、教育指導への活用について

次の２つの観点から教育指導を考えている。１つ目は，フィリピンと日本の子どもたちの違いについての授業である。本研修ではフィリピンと日本の子どもたちに同じ内容のアンケートを行った。その結果様々な違いが見えてきた。最も特徴的だったのは，フィリピンの子どもたちの勉強への意識の高さであった。「今一番ほしいものは何か」という問いに「勉強すること」「卒業すること」と答える子どもが多くいた。また，自分に対する考え方にも違いがあった。日本の子どもたちの多くが自分のことを好きではないと答えたのに対し，フィリピンの子どもたちは全員自分の好きなところを答えた。「今幸せですか」という問いにも９４％の子どもたちが「はい」と答えた。フィリピンの人々の前向きな生き方を示す結果となった。このような違いから学ぶ授業を行いたいと考えている。

次に，フィリピンの人々のたくましい生き方と彼らを支援する日本人について知る授業を行いたいと考えている。私たちが出会ったフィリピンの人々は前向きで明るかった。生活は決して楽ではないが，困難な状況に負けない力があった。そして，彼らを支援する日本人もみな前向きで生き生きとしていた。フィリピンで活動する日本人の存在を知ることで，日本の子どもたちが行動を起こすきっかけになるような授業をしたいと思っている。

４、研修に関する全般的な所感／意見について

本研修でたくさんの人々と出会った。単なる観光や旅行では行けないようなところにも行くことができた。一緒に歌ったり踊ったり，家庭訪問をしたり，意見交換をしたり。深い心の通った交流ができたと思う。この出会いを大切に生活したい。

５、JICA に対する要望・提言

事前・事後研修が充実していることがよかった。事前研修で何を見るのか撮るのか買うのか，目的をはっきりともって渡航することができた。帰国後も事後研修で他校の先生方と意見交換をし，授業を作ることができた。授業化，実践化を大切にした，実りの多い研修だったと思う。

６、今後の本研修参加者へのアドバイス

事前に準備していてよかったことは，現地の言葉でのあいさつ，交流会用の歌やダンスである。あいさつは，自己紹介程度でもいいので準備していった方がよい。自分たちの言葉を覚えてくれたという気持ちがうれしいとおっしゃってくれた。歌リコーダーとハーモニカを使った日本の歌の紹介も楽しんでもらえた。事前に曲目を決め，練習をして臨んだことがよかった。

歌と演奏「さくらさくら」　　拍手喝采！ユニカセにて　　子どもたちと一緒にダンス！
「上を向いて歩こう」

７、各訪問先の所感

日時	訪問先	所感
７月３０日（月）	JICA フィリピン事務所	日本のフィリピン支援は歴史が長い。協力隊の派遣は 50 年になる。フィリピンへの支援は，無償資金協力から有償資金協力に移行してきている。これはフィリピンの経済の発展によるものである。フィリピンの学校の現状について。フィリピンの学校は無償。しかし，交通費や制服などにお金はかかる。交通費が払えず，学校に通えなくなる子どももいる。
７月３０日（月）	マクロビ風レストラン UNIQUEASE（ユニカセ）〔代表　中村八千代さん〕	「援助に頼った支援には限界がある。」という思いから社会企業という形で支援を始めた。ユニカセで働く若者は，様々な NGO の受益者だった子どもたち。支援によって教育を受けられても，企業への就職は難しい。教育と企業の間にある溝を埋めるのがニカセだと言われていた。中村さんは母のような愛情でスタッフに接していた。時には厳しく，時には優しく，時にはとことん語り合う。スタッフはみな厳しい環境で育ってきた若者たち。それぞれに傷を持っているスタッフを教育し，仕事をするのは並大抵のことではない。「この子たちをどうにかしたい」という強い気持ちがあるのだと思った。スタッフの一人ローズさんは，「次世代の若者にチャンスを与えたい」と夢を語ってくれた。ローズさんが話していたことは中村さんの夢そのものだった。中村さんは「希望こそが憎しみの連鎖を断ち切ることができる。」とおっしゃっていた。ユニカセの若者たちがまさに希望なのだと思った。
７月３１日（火）	特定非営利活動法人ソルト・パヤタス〔代表　小川恵美子さん〕	パヤタス地区はエネルギーに満ち溢れていた。ゴミ山で仕事をし，ゴミ山のすぐそばで暮らす人々。ヘルスセンターで見てもらえる患者は一日３０人。近いうちに立ち退きを迫られているという場所もあった。そんな中でも住民たちは明るく前向きに強く生きていた。12 歳の女の子イダヤンの家を訪問させてもらった。お風呂もトイレも台所もない一部屋の家だったが，家族のつながりを強く感じた。「一番大事なものは何？」という私たちの問いに彼女は「お母さん」と答えた。それを聞いたお母さんは涙ぐんでいた。ソルト・パヤタスの活動を知り，パヤタス地区の厳しい現状も目の当たりにした。日本にいる私たちにできることを

		本気で考えたいと思った。
８月１日（水）	サンタ・バーバラ国立総合学校〔青年海外協力隊(料理)小松隊員〕	日本とフィリピンの学校の違いについてフィリピンの生徒たちと意見交換をすることができた。通学方法(日：徒歩か自転車，比：トライシケル)，昼食(日：給食，比：家に帰るか弁当)，部活(フィリピンにはない)など，お互いの違いについて知ることができ，楽しい時間となった。
８月１日（水）	イロイロ特別支援学校〔青年海外協力隊（ソーシャルワーカー）林千恵隊員〕	SPED(Special Education)の考え方が面白いと思った。視覚，聴覚，知的に障害のある子どもたちと一緒に特進クラスがある学校であった。障害があることもスペシャルなことだとする考え方は見習いたいと思った。フィリピンの障害のある子どもの就学率は２％だということには驚いた。
８月２日（木）	イロイロ障害者協会〔青年海外協力隊（プログラムオフィサー）曽田夏記隊員〕	21 年という長い歴史を持つ障害当事者の団体であった。スタッフの方々は，前向きで明るかった。障害者の権利を主張したり，家で引きこもっている障害者と話をしたりという活動を行っているとのことだった。隊員として派遣されている曽田さんの考え方にも感銘を受けました。「ピア(同じもしくは似た体験を(共有)した人)」という立場・考えを大事にしていた。相手に寄り添うことの大切さを教えてもらった。
８月２日（木）	ミアガオ国立高校〔青年海外協力隊（服飾）渡辺賢宏隊員〕	1500 人が通う職業訓練校。服飾コースの生徒たちと交流をすることができた。私たちが日本の歌を披露すると，フィリピンの歌を生徒たちが歌ってくれた。フィリピンの国歌も披露してくれた。とても美しい歌だった。フィリピンの子どもたちの美しい歌声に感動した。
８月２日（木）	世界遺産　ミアガオ教会	スペイン統治時代に建てられたバロック様式の教会。ヤシやココナッツといった南国のレリーフが特徴的だった。教会自体は，地元の人々が礼拝に訪れる信仰の場となっていた。
８月３日（金）	非政府組織 LOOB〔代表　小林幸恵さん〕	フィリピンの教育制度について詳しく学んだ。これまで 10 年だった初等・中等教育が国際基準に合わせて今年から 12 年になった。しかし，教室・教科書・教師は慢性的に不足しており，2 年の延長に現場は対応しきれていない。小学校の先生たちと意見交換では，一人の教師が 60 人の生徒の面倒をみていると聞いた。「子どもたちがでなかったことができるようになったときが一番嬉しい」という先生たち。国境を越えて同じ志

		を持つ先生方と出会えたのは励みになった。
８月４日（土）	イロイロ川洪水防御案件〔JICA担当　中村さん〕	日本の ODA によって行われたイロイロ川の工事によって，それまで市街地の 80%が水に浸かっていたのが，工事後は 0%になった。川に降りる階段には色が塗ってあり，危険度が一目でわかるように工夫がされていた。工事が終わると住民は 100%安心と思ってしまうことが多い。そのため，防災訓練などソフト面での支援も必要だと言われていた。
８月６日（月）	非政府組織 ACTION〔代表　横田宗さん〕	横田さんは日本とフィリピンどちらも大事に思って活動をされている方であった。フィリピンの母親たちの生活を向上させるために，世界規模で考え，活動をされていた。横田さんは，日本とフィリピンを比べて今の日本に足りないものについて,「今日がんばるというエネルギー」とおっしゃっていた。また，日本は夢に向かって挑戦できる場所だとも言われていた。日本の子どもたちに伝えたいと思った。
８月８日（水）	セイント・フランシス小学校〔耳の里親会　活動視察〕	大雨の中，視察を受け入れてくださった。床上まで浸水し，校内は大変な様子だった。そんな中丁寧に説明をしてくださった。聴覚障害の子どもたちに手話に頼らずその子が持つ聴覚能力を最大限に活かして教育をしているということだった。耳の里親会からの様々な支援がなされていた。子どもたちのためにと働かれる校長先生の熱い思いに感動した。

Ⅲ．授業実践例報告書

視野を世界に広げよう

氏 名　有馬良紀（ARIMA YOShIKI）
中間市立中間西小学校（福岡県）
担当教科：特別支援学級

●実践教科：総合的な学習の時間
●時 間 数：２２時間
●対象学年：特別支援学級、全学年

☆カリキュラム☆

実践の目的

〇フィリピンを知ることにより、異文化への理解を深める。
〇フィリピンのゴミ山と日本のボタ山を比較することにより、日本が敗戦から復興してきたことと、現在のフィリピンの経済発展とを重ね合わせて考える。
〇ゴミ山に生きる少年の夢と自分たちの夢を比較して、厳しい環境の中でも前向きに生きていくことの大切さを考える。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【１時限】（特別支援学級） テーマ：美しいフィリピン ねらい:フィリピンの美しい自然を知る。	〇フィリピンの自然 ・世界遺産（トゥバタハ海中自然公園） 〇フィリピンの動物 ・マンタ、ジンベイザメ	ポストカード 写真 貝のキーホルダー
【２時限】（特別支援学級） テーマ：すばらしいフィリピン ねらい：フィリピンの新旧の建物から、その発展の様子を知る。	〇フィリピンの建物 ・高層ビル、グリーンベルト、イロイロ島の教会（世界遺産）、マニラのホテル	写真
【３時限】（特別支援学級） テーマ：ワイルドなフィリピン ねらい:日本とは違うフィリピンの街の様子を知る。	〇フィリピンの街の様子 ・警備員、火薬犬、車道での物売り 〇フィリピンの乗り物 ・ジープニー、トライシクル、ペディキャブ	写真
【４時限】（特別支援学級） テーマ：おいしいフィリピン ねらい：フィリピンの食文化を知る。	〇フィリピンのくだもの 〇フィリピンの料理 ・レチョン、バロット	バナナ 写真
【５時限】（特別支援学級） テーマ：フィリピンという国 ねらい：フィリピンの国の概要を知	〇フィリピンの位置、気候、広さ、人口、言葉、国旗、お金、服装	地図 写真 フィリピンのお金

る。		バロン
【６時限】（特別支援学級） テーマ：フィリピンの歴史 ねらい:フィリピンと日本の関係を歴史の観点から探る。	○スペインの植民地、南蛮貿易の基地 ○スペインからの独立、アメリカの植民地 ○日本の侵攻、フィリピンの独立 ○エドゥサ革命	写真
【７時限】（特別支援学級） テーマ： フィリピンと日本 ねらい： 現在のフィリピンと日本の関係を考える。	○フィリピンにある日本の会社 ○フィリピンの反日・親日感情 ○日本からフィリピンへの援助	写真 フィリピンの新聞 パイの実
【８時限】（特別支援学級） テーマ：パヤタスの子どもたち ねらい:厳しい状況下でも、希望を失わず生きているパヤタスの子どもと自分を比較する。	○６０年前の地元の炭坑 ・ボタ山で石炭を拾う子どもたち ○フィリピンのゴミ山 ・ゴミ山で生きる子どもたち ○ジョシュア君の夢と自分の夢	写真 ボタ山の石炭 メンコ
【９時限～１０時限】（６年生） テーマ：活躍する JICA を知ろう。 ねらい:異文化への理解を深め、世界で活躍する JICA の役割を知る。	○JICA とは何か？ ○古賀隊員によるキルギスの説明 ○西宮隊員によるガーナの説明	パワーポイント キルギスの民族衣装 ガーナのかご
【１１時限～１４時限】（１・２年生） テーマ：おいしい楽しいフィリピン ねらい:フィリピンの食文化や遊びから、異文化への理解を深める。	○フィリピンの美しい自然 ○フィリピンの食文化 ○フィリピンの遊び	パワーポイント バナナ メンコ
【１５時限～１８時限】（３・４年生） テーマ：ワイルドなフィリピン ねらい:フィリピンの自然や街の様子から、異文化への理解を深める。	○フィリピンの美しい自然 ○フィリピンの乗り物 ○フィリピンの街の様子	パワーポイント バナナ メンコ 地図
【１９時限～２２時限】（５年生） テーマ：ゴミ山の少年 ねらい:希望を失わないゴミ山の少年から、今の自分を考える。	○フィリピンのゴミ山 ○フィリピンのゴミ山と日本のボタ山の比較 ○ジョシュア君の夢と自分の夢	パワーポイント ボタ山の石炭 メンコ 地図

☆授業の詳細☆

（１）特別支援学級での授業

私の担任するクラスは、特別支援学級で６年生の男児が３人在籍している。その子どもたちも理解できるよう、細かく８回に分けてくわしく授業を行った。朝の挨拶も「マガンダン　ウマガ　ポ」とタガログ語でするようにし、フィリピンをより身近に感じるようにした。

＜第１時＞美しいフィリピン

まず最初に、フィリピンのすばらしさを知ってもらおうと、フィリピンの美しい自然を紹介した。子どもたちは特にフィリピンの動物に興味を持ち、いろいろ質問してきた。また、お土産として、きれいな貝のキーホルダーや絵はがきをとても喜んでいた。

＜第２時＞

次に、フィリピンの建造物で、歴史が深い一面と近代化されている一面も見せるようにした。私が宿泊したホテルの豪華な設備をうらやましがっていた。しかし、トイレで紙を流さないことには、とても驚いていた。

＜第３時＞

フィリピン社会を街の様子から考えていった。ジープニーの乗り方（どこでも自由に乗り降りできる）などから、そのおおらかさなどを見つけていった。また、警備員が自動小銃を持って警備するなどから、銃社会であることの問題点も考えていった。

＜第４時＞

フィリピンの食文化を考えていった。フィリピンは常夏の島で熱帯のフルーツの宝庫であることを市場の写真から見つけていった。また、フィリピン料理のレチョンやバロットにとてもびっくりしていた。

＜第５時＞

フィリピンの国の概要について、位置・気候・面積・人口・言葉・国旗・お金・服について調べていった。私が着ていたバロン（フィリピンの男性の服）をとてもほめていた。言葉の末尾に「ポ」をつけるのをおもしろがっていた。

＜第６時＞

フィリピンの歴史を日本との関係から見ていった。スペイン植民地時代に日本と南蛮貿易でつながっていたこと、太平洋戦争の戦場となり、たくさんの人が死んだことなどを学んだ。今でもたくさんの日本兵の遺骨が眠っていることに憤りを感じていた。

＜第 7 時＞

現在のフィリピンと日本の関係を調べていった。日本のコンビニがフィリピンの街角にあることや、日本車がフィリピンで人気があることを現地の新聞で見つけた。JICA の活躍により様々な援助がなされ、反日感情から親日感情へ変わっていったことも学んだ。

＜第 8 時＞

フィリピンのゴミ山に生きる子どもたちと日本のボタ山に生きた子どもたちを比較した。いずれも厳しく貧しい環境だが、その中で希望を失わずに生きる姿勢を学んでいった。ゴミ山とボタ山の状況がとても良く似ていることに驚いていた。

（２）１・２年生での授業

題材名を「おいしい楽しいフィリピン」として、フィリピンの食文化や遊びから異文化への理解を深めるようにした。

導入はフィリピン産バナナを食べることから、フィリピンの学習を始めた。「おいしいね」ととても喜んで、スムーズに学習にはいることができた。

パワーポイントでフィリピンの豊かな自然を見ていった。世界遺産であるトゥバタハ海中公園のきれいな海に目を見張り、そこに生きているジンベイザメやマンタの大きさに驚いていた。

フィリピンの市場の写真から、フォトランゲージで熱帯のフルーツがたくさんあることを発見していった。また、ブタの丸焼きのレチョンからフィリピン独特の食文化を学んでいった。子どもたちの中から

「気持ち悪い」という声も上がったが、日本人がタコを食べることを気持ちが悪いと思っている外国人がいることを紹介し、食文化には国によって大きく異なることを確認した。

最後に、フィリピンで買ってきたメンコを使って遊んだ。絵柄が日本アニメの「ナルト」だったので、とても不思議がっていた。「ドラえもん」「ポケモン」「ドラゴンボール」など、日本アニメがフィリピンに限らず世界で人気があることを話すと、子どもたちはとても感心していた。メンコを初めてする子どもばかりだったので、なかなかひっくり返らなかったが、それでもとても楽しそうに遊んだ。

（３）３・４年生での授業

題材名を「素敵でワイルドなフィリピン」とし、フィリピンの自然や街の様子を通して、日本との違いを見つけ、異文化への理解を進めることをねらいとした。

導入は、フィリピンの街角にある日本資本のコンビニやそこで売られている日本のお菓子から、日本とフィリピンの密接なつながりを考えた。

１・２年生低学年同様、パワーポイントでフィリピンの豊かな自然を見たあと、フィリピンの街角の乗り物を紹介した。フィリピンの庶民の乗り物であるジープニーは、日本のように決まったバス停はなく、どこでも自由に乗ることができること、降りるときもスピードが落ちたときに飛び降りることにビックリしていた。運賃も、乗客が手渡しで運転手に渡すことに、途中で盗る人はいないのか不思議がっていた。トライシクルは、サイドカーのバイクなのに6人も乗っていて、警察につかまらないことに驚いていた。

「路上での物売り」の写真でフォトランゲージを行った。「いつ・どこ・なに」をポイントに考えさせた。「銀行」「PARKING」の立て札から「昼、銀行前の駐車場で、パンを売っている」と推測したグループもあった。正解は「朝、大通りの車道で、パンを売っている」である。フィリピンが経済成長を進める中で、車が増え渋滞しているので、物売りが止まっている車に駆け寄り、パンを売っていることに驚いていた。

（４）５年生での授業

５年生では、自分自身の生き方を問い返すため、「ゴミ山に生きる少年」を扱うことにした。しかし、パヤタスのことだけを扱うと、フィリピンに対するイメージが悪くなる。そこで、１時間目に３・４年生と同じような授業をし、２時間目にゴミ山の写真を見せて、写真から気づいたことを自由にフォトランゲージさせた。　「ブルドーザーがある」「ゴミが散らばっている」「立ち入り禁止の看板や柵がある」「とても臭そう」「貧しい人しか住んでなさそう」「貧困で差別されている」などがでた。ここでは、貧しい人たちがゴミの中からお金になるものを探して、生計を立てていることを説明した。

次にボタ山の写真を見た。今から 50 年前、中間市には炭鉱があり、敗戦からの復興を支えた。そこに生きる子どもたちは、ボタ山から石炭を拾い家計を助けた。「フィリピンには、今の日本じゃ考えられない風景があったけど、昔の日本もあんな感じだったとは想像がつきません」と、日本とフィリピンを重ねて考えてくれた子もいた。最後にジョシュアくんの夢を、自分たちの夢（野球選手、パティシエ、看護師など）と比較して考えた。小学校 1 年の彼が「大統領になってフィリピンをもっと良くする」という夢を持っていることを話すと驚きの声が上がった。「7 才の小さな子でも、大統領になりたいという大きな夢を持つことはすごいと思いました。自分も大きな夢を持ちたいです。」「貧しい人もいる中、ジョシュア君は大統領になる夢があるなんてすごい」という感想もあった。厳しい環境の中でも、前向きに生きていくことの大切さを、子どもたちも感じてくれたと思う。

（５）６年生での授業

６年生では、社会科で「世界で活躍する日本人」という単元で、青年海外協力隊のことを扱う。そこで、JICA 福岡デスクの古賀さんと北九州デスクの西宮さんに出前講座をしていただいた。

導入は、「JICA とは何か？」を説明していただき、資源や食糧を海外に依存している日本は、世界の国々と協調していかなければならず、そのためにも発展途上国への援助は必要であることを押さえた。

次に、古賀さんからキルギスのことを紹介してもらった。キルギス人は、日本人と同じ顔立ちをしており、「キルギス人と日本人は兄弟で、魚が好きな人たちが海を目指していき、日本人になった」と信じられていることで、子どもたちも今までほとんど知らなかったキルギスに、親近感がわいたようだ。

また、西宮さんからガーナの籠作りことを紹介してもらった。ガーナは日本の時間の流れは全く異なりとてもゆる

やかなので、最初は非常にとまどったそうである。籠作りも商業ベースに乗せるためには、同じ規格で作らなければならないのだが、それがなかなか理解されず苦労されたそうである。しかし、現金収入が増える中で信頼を得ていったことを、子どもたちも感心していた。

☆成果と課題☆

〇特別支援学級の授業では、8 回にかけてじっくり授業を行うことができた。そのおかげで、フィリピンの地理や歴史、現在の問題などを日本と比較しながら、子どもたちといっしょに考えることができた。

〇朝の挨拶を、タガログ語の「マガンダンウマガポ」ですることにより、フィリピンを身近なものに感じることができた。

〇校長をはじめ先生方の理解もあり、自分の担任する特別支援学級以外でも全校のクラスで授業ができた。しかし、フィリピンのことを紹介するだけに終わり、深く掘り下げて学習することはできなかった。

〇フィリピンのバナナを食べたり、フィリピンで買ったメンコやお菓子、ボタ山の石炭など、写真だけではなく、実物に触れて学習するようにしたので、子どもたちが興味・関心を持ってくれた。

〇子どもたちの感想の中に「フィリピンのことをいろいろ知って、フィリピンに行きたくなりました」とあるように、フィリピンに対する良いイメージを与えることができた。

〇フィリピンのゴミ山と日本のボタ山を比較することにより、日本が敗戦から復興してきたことと、現在のフィリピンの経済発展とを重ね合わせて考えることができた。

〇ジョシュアくんの夢と自分たちの夢を比較して、厳しい環境の中でも前向きに生きていくことの大切さを、子どもたちも感じてくれた。

〇この研修で、担任している子どものフィリピン人のお母さんからフィリピンのことを教えてもらって信頼関係を持とうとしたが、なかなか難しかった。

☆参考資料・教材など☆

〇小学社会６上・下　　教育出版
〇社会科資料集６年　　青葉出版
〇ボタ山のあるぼくの町　山口勲写真集　　海鳥社
〇筑豊のこどもたち　土門拳　　築地書館株式会社
〇炭鉱　本橋成一写真集　　株式会社現代書館
〇外務省ホームページ

フィリピンから世界へそして・・・
「生きる」ということ

氏 名　福喜　京子（FUKUKI　KYOUKO）
西海市立瀬戸小学校（長崎県）
担当教科：特別支援学級

●実践教科：道徳・学活・英語科
●時 間 数：合計１４時間
●対象学年・人数：特別支援学級
２名
６年生　　３０名
５年生　　３

☆カリキュラム☆

実践の目的

○　日本から一番近い東南アジア「フィリピン」の概要を知らせ、私が見てきたフィリピンを伝える。
○　映像やアンケートで比較しながら、日本（自分）とフィリピンの「同じ」「違う」「なぜ」「どうして」に気づかせたり、考えさせたりする。
○ 生きるとはどういうことなのか。今自分にできることは何かについて考えさせる。

授業の構成（小学校５年生対象の授業実践）

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【１時限】 テーマ：【フィリピンってどんな国？】 ねらい：写真やクイズからフィリピンについて興味・関心をもつ。	・地図でフィリピンの位置を確認する。 ・DVD とクイズからフィリピンについて知る。 ・自分（日本）と「同じ」「違う」、「なぜ？」「どうして？」を考えさせる。	世界地図 写真 DVD ワークシート
【２時限】 テーマ：【フィリピンと私たちの「同じ」「違う」「なぜ」「どうして」について考えよう】 ねらい：フィリピンの子どもたちに取ったアンケートと日本の子どもたちに	・現地の子どもと日本の子どもに取ったアンケートの結果から４つの項目について紹介し、比較する中で気づいたことを出し合う。 ・フィリピンの子どもたちが大切にしているものに「家族」、ほしいもの（したいこと）に「勉強」・「食べ物」・「幸せ」と思っているのは	アンケートの結果 ワークシート

取ったアンケートを比較ながら、その背景にあるものについて考える。	なぜか？を考えさせる。	
【３時限】 テーマ：【フィリピンの子どもたちの背景にあるものについて考えようⅠ】 ねらい：現地の子どもたちの様子をフォトランゲージを通して知り、気づいたことを出し合う。	・子どもたちがおかれている環境下をフォトランゲージをする中で、気づいたことを出し合う。 ・アンケートを取った子どもたちが住んでいるところは、「パヤタス地区」というごみ山地区であることを知らせる。	写真 （フォトランゲージ） ワークシート
【４時限】 テーマ：【フィリピンの子どもたちの背景にあるものについて考えようⅡ】 ねらい：DVD を視聴し、映像や解説を通して、現状に迫る。	・子どもたちが住んでいる「パヤタス地区」が、どんな場所でどんな生活を送っているのかを DVD で確かめ、アンケートの理由を考える。	DVD ワークシート お金・米 ペットボトルや空き缶
【５時限】 テーマ：【世界の現状を知る。】 ねらい：フィリピンの学習から世界へ と目を向けさせ、世界の現状を知る。	・「かわいそう！」「自分たちと違う！」・・・これで終わり？実は・・・フィリピンが特別なわけではないことを知る。 ・フィリピンだけでなく世界には格差がある国がたくさんあるということを資料から読み取る。	資料１「どうなってるの？世界と日本」 資料２「学校に行きたい！」
【６時限】 テーマ：【生きるということ】 ねらい：生きるということを考え今、自分たちにできることは何かについて考えさせる。	・「生きる」ために必要なことについて考えさせる。 ・自分が今できること・今からできることは何かについて考えさせる。 ※世界に目を向け地域に生きること	ワークシート

☆授業の詳細☆

【第１時限】

テーマ：【フィリピンってどんな国？】

ねらい：写真やクイズからフィリピンについて興味・関心を

※写真やクイズを通して、身近にある国であることに気づせ

１　今日の学習は、・・・「〇〇〇〇〇から世界へ」
〇〇〇〇〇に入る国は・・・
ヒント・・・島国（島がたくさんある９・台風・バナナ
→フィリ

２　フィリピンのことで、他に知っていることはありますか
３　今年の夏に、私はフィリピンに行ってきました！
そこで見てきたこと、知ったこと、感じてきたことをみんなに伝えたいと思います。そして、フィリピンという国を入り口にして、みんなと一緒に日本そして世界のことを考えていきたいと思います。

４　今日のテーマは「フィリピンを知ろう」

授業の流れは・・・
・私が見てきたフィリピンを映像 DVD で

・クイズ
授業のポイント
※自分（日本）と「同じ」「違う」「なぜ」「どうして」
を考えながら学習をすすめていきましょう。

５　DVD 視聴
クイズのヒントが出てきますからよく見て下さい。

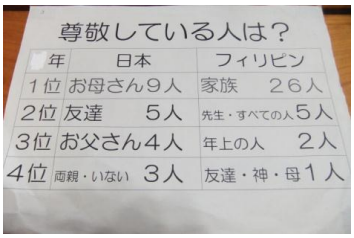
６　四択クイズ（パワーポ
Ⅰフィリピンの国旗は？　Ⅱフィリピンの首

Ⅲフィリピンの島の数は？　Ⅳフィリピンの通貨は？
Ⅴ食べるときの道具は？　Ⅵ代表的な料理は？など

【第２時限】
テーマ：【フィリピンと私たちの「同じ」「違う」「なぜ」「どうして」について考えよう】
ねらい：フィリピンの子どもたちに取ったアンケートと日本の子どもたちに取ったアンケートを比較ながら、その背景にあるものについて考える。

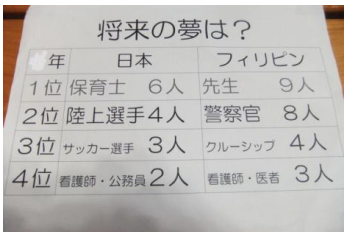
※アンケートを提示し、その結果から、気づいたことを発表！

現地の児童や生徒にとった
アンケート１０項目の中から
４つのアンケートを提示し、
結果から、気づいたことを
発表させた。
「同じ」ところや「違う」
ところを比べる中で、
「なぜ」「どうして」
が気づきとして出てきた。



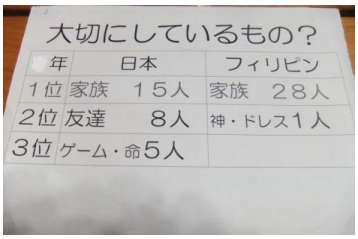
尊敬している人は？

年	日本	フィリピン
1位	お母さん９人	家族　２６人
2位	友達　５人	先生・すべての人５人
3位	お父さん４人	年上の人　２人
4位	両親・いない　３人	友達・神・母１人



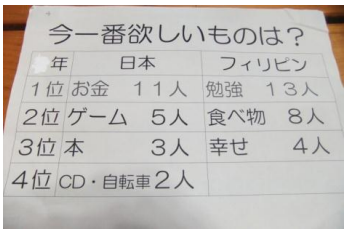
将来の夢は？

年	日本	フィリピン
1位	保育士　６人	先生　９人
2位	陸上選手４人	警察官　８人
3位	サッカー選手　３人	クルーシップ　４人
4位	看護師・公務員２人	看護師・医者　３人



大切にしているもの？

年	日本	フィリピン
1位	家族　１５人	家族　２８人
2位	友達　８人	神・ドレス１人
3位	ゲーム・命５人	



今一番欲しいものは？

年	日本	フィリピン
1位	お金　１１人	勉強　１３人
2位	ゲーム　５人	食べ物　８人
3位	本　３人	幸せ　４人
4位	CD・自転車２人	

尊敬している人は？
N･･･お母さん

大切にしているもの？
N･･･家族

将来の夢は？
N･･･保育士
F･･･先生

一番ほしいもの？
N･･･お金

ほしいもの（したいこと）
日本の子どもたち・・・「お金」「ゲーム」
フィリピンの子どもたち・・・「勉強」「食べ物」「幸せ」

一番ほしいもの？
N･･･お金

なぜだろう？

【第３時限】
テーマ：【フィリピンの子どもたちの背景にあるものについて考えようⅠ】

ねらい：現地の子どもたちの様子をフォトランゲージを通して、気づいたことを出し合う。

※アンケートをとった子どもたちがどのような環境下におかれているかを班ごとに１枚の
写真から推測させた。

１　アンケートの結果からフィリピンの子どもたちが、

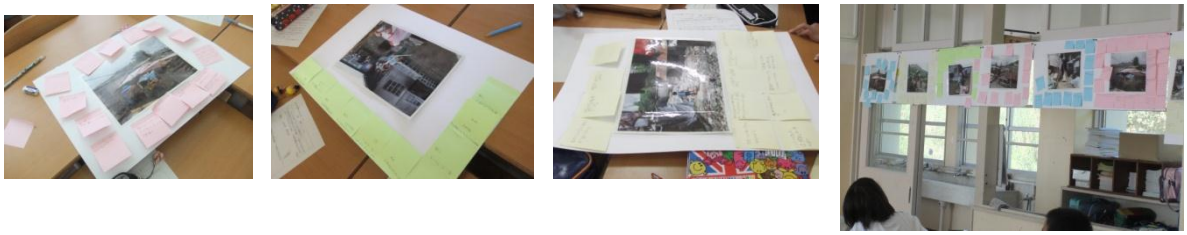
大切にしているもの・・・「家族」
ほしいもの・・・「勉強」・「食べ物」「幸せ」

と思っているのはなぜでしょ→

予想

２　「フィリピンの子どもたちの背景にあるものについて」考えてみたいと思います。

アンケートをとった子どもたちが住んでいる場所を写真で見て、気づいたことや思ったことを付箋に書いて貼り、班ごとに意見を出し合いましょう。



３　口出しタイム・・・付箋をつけ終わった後に、班で見て回わり、意見を交換した。

【第４時限】
テーマ：【フィリピンの子どもたちの背景にあるものについて考えようⅡ】
ねらい：DVD を視聴し、映像や解説を通して、現状に迫る。
※この写真は､｢パヤタス地区｣というところで､ごみ山地区であることを伝え、この周りがどうなっているのかどんな人たちが住んでいてどんな生活を送っているのか DVD で確認した。(DVD 視聴 24 時間テレビで放映分)

１　DVD 視聴

２　概要を説明

パヤタス地区　　２万人
（小中学生約７０００人）３部制
貧困層　　１日２ドル以下
最貧困層　１日１ドル以下
パヤタス　3000 人（スカベンジャー）
ゴミ拾い、再利用できる物を売って生活している人々
P100～P150（200 円～300 円）
１ドル（約８０円）で現地で買える物
米１キロ（３０ペソ）＝60 円　　缶コーラ２本
ジープニー＝7 ペソ
トライシクル(オートバイにサイドカー)＝80 ペソ
１ペソ＝2 円　　80 円＝40 ペソ

３　実際に家庭から缶やペットボトルを持ち寄り、重さを量って換金計算をすること

【第５時限】
テーマ：【世界の現状を知る。】
ねらい：フィリピンの学習から世界へと目を向けさせ、世界の現状を知る。
※資料１「どうなってるの？世界と日本」と資料２「学校に行きたい！」から世界にはこ

のように格差がある国がたくさんあることを読み取った。

１　「かわいそう！」「自分たちと違う！」・・・これで終わり？
　　実は・・・

フィリピンが特別ではなくて・・・

抜

表

２　世界の状況を知る。

☆開発途上国とは、産業や技術の発達が遅れていたり、1 日わずか 1 ドル以下（100 円～200 円）で生活をしなければならない。開発の遅れた国々のこと。☆それに対し、産業や経済が発達している国々を「先進国」

<u>開発途上国</u>に暮らす人々の数は、世界人口（約６６億人）8 割以上と言われている。世界約１９０カ国のうち約１５０カ国の国々

私たちの身の回りにはいつも食べ物や水や衣服あって、当たり前のように舗装された道を歩い乗り物を使ったりして学校や病院に通っていま

地球規模で見渡してみると、これは、決して「当たり前」の暮らしではありません。
<u>日本が特別</u>であるということ　日本が<u>当たり前でない</u>ということなんです。

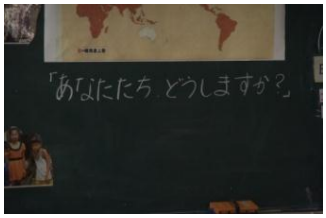
【第６時限】
テーマ：【生きるということ】
ねらい：今自分たちにできることは何かについて考えさ
これまでの学習を振り返り、フィリピンや世界の問題に
向けさせ、今自分にできることは何かを考えさせた。

１　みなさんには、夢や希望を叶えるチャンスがあります。
　　（日本も格差社会であるということにも触れた。）
２　世界中の人たちや子どもたちが、平等に与えられているものがあります。
　　それは「命」「生きること」「生を受けて生まれてきた」ということです。
３　「生きる」ために必要なことは・・・

生　き
勉強　食　べ
仕事　お

「食べること」（衣食住）
「食べる」ためには、「お金」が必要
「お金」を得るためには、「仕事」をしなければならない
「仕事」につくためには・・・

４　私たちが「今できること」
「今からできること」は何か？
自分の考えをまとめ、付箋に書き、みんなで今の思いを発表し合いましょう。



（今からできること・将来できることなど）
・ものをたいせつにする。・人を大切にする。家族を大切にする
・勉強をがんばる。感謝をして生きる。
・自分の命や人の命を大切にする。
・将来の夢に向かってあきらめず努力する。
・将来支援団体に入り、人の役に立ちたい。
・海外に広く目を向ける。・一人一人が世界の現状を

５　最後に・・・『世界に目を向けながら、地域に生きる』について話した。
　実は、パヤタス地区の人たちは、東日本大震災の支援をしていただいていた。

６　授業を通してまたは終えて、考えたこと思ったこと（児童のワークシートから抜粋）

・最初は、なぜこんな勉強をするのかと思ったが、最後にやっと分かった。これからは自分のことだけでなく、世界の人々のことを考えながら生活していきたい。
・人はみんな平等に命をもらっているので、差別などをしないで、自分の命も周りの人の命も大切にしていきたい。
・フィリピンの人たちのようにもっと家族や人を大切にしていきたい。
・フィリピンの人たちのように笑顔で、自分のことよりも人に優しくしてあげられる人間になりたい。
・自分は毎日当たり前のように生活しているけど、これからは、何気なくしていることや食べていること、物や命に感謝し、世界の人たちのことも考えていきたい。
・苦しい環境のもとでも、日本のことを考えてくれている（東日本大震災で募金活動）ことに驚いた。自分もこれからは、募金活動などをしていきたい。

・東日本大震災で募金活動をしてくれたことを知った。僕達にできる恩返しをしたい。
・今まで以上に命の重みを感じた。
・世界には、私と同じ子どもでも苦労している人がたくさんいることが分かった。このことを心の中におきながら、世界に目を向けて生活していきたい。
・世界のことをもっと知りたいので、英語を勉強したい。
・日本人は、贅沢だし、いい環境の中で暮らしている。世界へ目を向けるとそれは当たり前ではないことに気づいた。ぼくは、今まで以上に勉強をがんばり、世界に貢献したい。
・私たちは、明日が来るのは当たり前だと思っている。このことを当たり前に思わないで、一日一日を大切に行きたい。

☆成果と課題☆

特別支援学級の児童を対象にした実践授業については、写真や映像を見たり、現地で購入した楽器やおもちゃ、絵本を通して異文化に触れさせたりした。本人達なりに感じるものがあったように思う。また、本校の先生方にもフィリピンの現状を話させていただく中で、５年生と６年生で還元授業をさせていただくことになった。授業を実践する上で、児童の実態把握や導入をどのように仕組み、着地点（最終的に何をねらうのか）をどこにするのかなど、何度もこちらからアプローチし、検討させていただき、担任ではない学年での還元授業が実現した。また、あることがきっかけで中学校からも授業をしてほしいという申し出があり、校種の垣根を越えての初めて中学校で授業をさせていただくこととなった。しかも小学校の教員でありながら英語科で行って欲しいという要望があり、学習指導要領のどこに位置づければいいのか、中学校指導要領を初めて手に取ることになった。中学校の英語科の担当の先生とは、生徒の実態や授業のねらいについて何度も打ち合わせを重ねた。ALT も交え模擬授業も行い、本番に臨んだ。今回の研修をきっかけに、還元授業への取り組みは私にとって教師力が高まると共に、国際理解教育・開発教育への可能性を感じた。また、なんと言っても授業に向かう児童生徒の目の輝き、先生方の熱意があってこそと感謝の気持ちでいっぱいになった。そして、子どもたちの目の輝きは、フィリピンの子どもたちの「学びたい」想いと同じ目の輝きをしていたように思う。

(成果)

〇日本から近い国でありながら、あまり知られていないフィリピンの国のことを伝えることができた。
〇フィリピンの現状を伝えていく中で、世界にも目を向けさせることができ、さらに今自分が住んでいる日本のことや日本との関わりを考えることができた。

〇この授業を通して「生きるということ」はどういうことなのかを真剣に考えることができた。
〇JICA の方(長崎デスク南さん)に授業を参観していただき、授業後アドバイスをいただいたことは大変勉強になった。また、中学校での授業では、JICA の方（南さん・古賀さん）協力隊員 OG の木村さん・松野さんに参観に来ていただき、よい緊張感の中で授業をさせていただき、その後の反省会の内容も大変参考になった。

(課題)
〇特別支援学級担任という立場でしたが、還元授業を他学年でさせていただいたことには感謝の念でいっぱいである。授業時間外で、小出しに話題にする時間が取れなかったのが悔やまれる。その分を掲示等で情報を発信していった。
〇伝えたい内容が盛りだくさんだったために、授業を仕組む中で自分の思いと児童の実態に温度差を感じることがあった。どのようにして自分の意識レベルを児童の意識レベルに合わせるか導入(出発点)と終末(着地点)に悩んだ。

☆参考資料・教材など☆
フィリピン研修で撮った写真・ビデオ
フィリピンで買ってきたもの
フィリピンでとった児童・生徒のアンケート集計結果
にほんでとった児童・生徒のアンケート集計結果
JICA ウェブサイト
「どうなってるの？世界と日本」（JICA 国際協力機構）
「学校に行きたい」（JICA 国際協力機構）
愛は地球を救う２４時間テレビからの映像

“My First Step”ー国際理解を進めるために

氏 名　溝口　啓子(MIZOGUCHI Keiko)
長崎鶴洋高等学校（長崎県）
担当教科：英語科

●実践教科：英語Ⅱ・総合学習の時間など
●時 間 数：１３時間（総学１時間含む）
●対象学年：２年生総合学科、３年生

☆カリキュラム☆

実践の目的

〇これまでは生徒に英文を読み取らせる際に、単なる異文化理解で終始していた。今回の教師
海外研修を通して私自身が学んだことは、今後国際理解教育を進めていく上で大きな指針とな
った。その学びを通して、生徒により“reality”を伝えられるような教科実践につなげたい。

〇「将来何をしたいのか決められない」、「学校にただなんとなく来ている」、そのような生徒が自校には多く見受けられる。２年生総合学科の「自己開発Ⅰ（総合学習の時間）」の時間を使って、フィリピンで取らせて頂いたアンケートの回答と自校のものとを比較することで、彼らが現在の生活や学びの姿勢などについて振り返るきっかけにしたい。

〇教科のみのアプローチでは限られた人数にしか途上国の現状が伝わらない。そこで、ボランティア部に協力を仰ぎ、フィリピンの子どもたちに役立つアクションが何か起こせないかを共に考えてもらう。また、職員へ向けて、今回の研修先であったNGOソルト･パヤタス､LOOBの扱う商品の宣伝と販売を行う。

〇私自身が携わっている長崎県高等学校国際教育研究協議会の運営において、歴任の学校が実施してきた内容を踏襲するのではなく、本会を意味のある形で続けていくために、総会や研修会、その他の行事の中身をさらに充実させたい。本会に加盟している学校の理事（教員）が県下には４３名いる。その先には２千人以上の生徒がいる。まずは事務局から国際理解を深めるための取り組みについての情報を発信していきたい。

☆授業の構成☆

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【１時限】２年総合学科 テーマ：自己の生き方を見つめる ねらい：フィリピンの高校生と自校生徒のアンケート結果を比較し	１．フィリピンの画像を見せながら生徒の興味・関心を喚起する ２．回答内容を比較し気づきをグループ討議 ３．フィリピンで活躍する日本人、横田さん	DVD （フィリピンの写真） パワーポイント ワークシート

て、自己の生き方や生活、また学ぶ姿勢について振り返る	の紹介と「チャレンジ券」の話 ４．振り返り	アンケート
【２～３時限】３年水産科選択者 テーマ：就学率について ねらい：途上国の教育についてフィリピンの事情を交え、現状を知る	１．教科書の英文読解を行う ２．Photo Language の活動 ３．貧困のスパイラルについて ４．振り返り	パワーポイント DVD 教科書・ワークシート 写真／カード
【４時限】２年英語Ⅱ選択者 テーマ：「児童労働」とは何か ねらい：単なる手伝いやアルバイトと、児童労働が異なることを認識する	１．家事の内容を英語で表現する ２．Photo Language の活動 ３．先進国と途上国とは ４．教科書本文の Introduction (Part 1) ５．振り返り	教科書 写真 教科書 ワークシート（本文）
【５時限】２年英語Ⅱ選択者 テーマ：途上国の児童労働の実態 ねらい：児童労働に関する写真を利用して本文の内容理解を深める	１．様々な写真を見せて英問英答 ２．Part 1 の読み取り・パラグラフ読み ３．　ILO のデータを提示する （世界の児童労働の数） ４．振り返り	パキスタンの子どもの写真（カーッペット製造の様子） ワークシート（本文）
【６～７時限】２年英語Ⅱ選択者 テーマ：児童労働について英語での理解を深める ねらい：児童労働について英語で話せるようになる	１．単語カードを使って Part 1 の復習 ２．ペアで retelling を行う ３．写真を見ながら retelling に挑戦 ４．Part 2 の Introduction ５．振り返り	児童労働の写真 教科書 ワークシート（本文） ワークシート①
【８～９時限】２年英語Ⅱ選択者 テーマ：貧困とは何かについて考える－最貧困層の生活・最低賃金 ねらい：貧困をキーワードに brain storming を行い、web map 上に表すことで、様々な問題が要因となっていることを知る	１．再貧困層の生活・最低賃金について ２．Part 2 の読み取り／パラグラフ読み 貧困の主な理由を読み取る ３．Part 2 の Introduction ／本文の読み ４．貧困から連想される事柄を web map 上に書き出す（Group work） ５．振り返り	教科書 ワークシート（本文） ワークシート② 模造紙 マジック
【10 時限】２年英語Ⅱ選択者 テーマ：　貧困の輪の活動／児童労働撤廃のための国際的な取り組み ねらい：貧困の輪の活動を通して、貧困に起因する児童労働をはじめとした様々な問題の解決が容易でないことを知る	１．Part 3 の復習（内容・重要構文） キーワードを用いて口頭で review／確認のためのペア読み ２．Listening の活動 ３．貧困の輪 ４．振り返り	教科書 単語カード ワークシート（本文） ワークシート③ 模造紙 貧困の輪カード（7 枚） マジック
【11 時限】２年英語Ⅱ選択者 （国際教育研究協議会　研究会） テーマ：パヤタス小川さんについて	１．Warm up ／Quiz ／ ビデオ ２．Lesson 全体の内容の復習 ３．Listening & Speaking ／	パワーポイント ビデオ ワークシート④

／貧困の輪を断ち切るには ねらい：積極的に言語活動を行う／貧困の輪を形成する要因が複雑に絡み合っていることを知る	Who is this woman? ４．貧困の輪を断ち切るには？ ５．振り返り	英文のカード マジック 貧困の輪（前時のもの）
【12 時限】２年英語Ⅱ選択者 テーマ：南北問題とは何か／フェアトレード商品を実際に味わう ねらい：フェアトレードの意義・なぜ私たちは学ぶのかを考える	１．Warm up ／ Role-play ２．Why do we learn? ３．南北問題とは？ ４．What is “Fair Trade”? ５．チョコの試食とコーヒーの試飲	パワーポイント ワークシート⑤ ペットボトル２本 フェアトレードチョコ コーヒー
【13 時限】２年英語Ⅱ選択者 テーマ：第８課のまとめを行う／小川さん、中村さんの活動 ねらい：国際機関だけでなく個人レベルでできる国際協力を考える	１．パヤタスの人々の暮らし ２．２４時間 TV のビデオを見る ３．What can We do? ４．振り返り	パワーポイント ビデオ（２４時間 TV） ワークシート⑥ 模造紙 マジック

☆その他の取り組み

①自校職員へ向けての物品販売

自校職員に対して、ソルト・パヤタスが支援しているアトリエ・リカの刺繍製品を１１月に、また、LOOB が作製したカレンダーの販売を１２月に紹介し、数多くの商品を購入してもらった。フェアトレード商品を購入することが「国際協力の一つの形」になることを多くの職員に伝えることができた。手作りの商品の良さが分かって、２回目以降も購入する職員もおり、今後も機会を捉えて商品購入の協力を仰ぎたい。

（リカの刺繍入りタオルやブックカバー、バスラバック）　（LOOB の就学支援カレンダー）

②長崎県高等学校国際教育研究協議会での取り組み

昨年７月、県下の高校生対象の英語研修の中で、途上国の現状や日本とのつながりについて考えてもらうワークショップを企画した。また、理事会（１月２５日）において、「国際理解を深める授業実践の試み」と題して、加盟校や関係団体（県国際交流協会、県国際課、JICA デスク）、自校職員に、英語Ⅱの授業

を見て頂いた。年度末に発行予定の本会機関紙「はりみち」の中で、推進員の南さんに協力して頂き、「ちょこっと国際理解教育」（仮題）を掲載する。

③学級での取り組み

担当学級に配布する学級通信に「ぐっちーのフィリピン紀行」のコーナーを設け、写真と共にフィリピンの学校や子どもたちの様子、途上国支援に取り組まれている日本人の活動についてシリーズ化して紹介を続けている（現在 Vol.7 まで発行済み）。

担当学級の男子生徒が、実践授業やこの通信の内容を通して、自身の置かれている状況がいかに恵まれているかを感じ、途上国が抱える貧困問題について考えたことを、「真の幸せとは何か」というテーマでエッセイにまとめてくれた。中高生の国際協力のためのエッセイコンテストに応募したところ、佳作を受賞することができ、先日のJICA九州での表彰式に出席させて頂いたところである。

＜学級通信＞

＜表彰式の写真＞

（受賞の様子）

ぐっちーのフィリピン紀行　②　～フィリピンの教育事情～

フィリピンでは３T（teacher, textbook, teaching room）の不足が深刻です。公立学校の先生が約１０万人足りていないので、小学校でも１学級５０～６０人の児童がいたり、学校が３部制になっているところもあります。今年６月から新しい教育制度 K-12（世界基準に合わせた幼稚園＋公教育１２年：日本と同じ）が始まっていますが、政府の予算（今でも最大の予算が割かれている）を１０倍にしないと対応できないそうです。

私が訪れた FJK 小学校は、水の上に校舎が建てられていました。児童は３人で１冊の教科書を使っているそうで、この時は先生手作りの模造紙に書かれたワークシートで勉強していました。教室の照明も十分ではなく、グラウンドもありません。そのような状況でも、子どもたちは学ぶことにひたむきで、黒板を真剣に見つめる眼差しが強く印象に残りました。子どもたちの学ぶ姿勢に「今置かれている環境で自分は最大限の努力ができているのか」と考えさせられました。彼らにとって、学ぶことは人生を変える武器になり得る、だから必死なのです。

（Ｈ２４．９．２２号より転載）

④ボランティア部との活動

現地で撮った写真やビデオをボランティア部員に見せ、フィリピンの教育事情や人々の暮らしについて説明をした。彼らに「私たちにできる支援は何か」を考えてもらい、文房具集めに取り組むことになった。文化祭の中で展示発表を行ったり、ポスターを校内に貼って全校生徒に協力を呼びかけた。集まった文房具の詳細は以下の通りである。JICA デスク福岡の古賀さんがフィリピン JICA 事務所の直原さんに連絡を取って下さった。直原さんが偶然にも帰国をされていたので、集まった文房具を持ち帰って下さった。セント・フランシス学校の様子を早速メールで知らせて下さり感謝している。本校の生徒に頂いた画像を見せると、聾学校の子どもたちの輝いている表情を見て、自分たちの集めたものが役に立ったと感激していた。

（ボランティア部の生徒）

（セント・フランシス学校の生徒）

ノート	４０冊
鉛筆削り	４台
筆箱	１０個
鉛筆	１５ダース
消しゴム	２０個
クレヨン	１セット
分度器	３セット

☆授業の詳細☆

①総合学習（総合学科２年生１１８名対象）１時間

フィリピンの高校生と自校生徒のアンケートの回答の比較を行った。自由に気づきや感想を述べてもらう形で授業を進めた。事後研修の際に、明るいイメージを持ってもらえるような授業の進め方が大事であるとアドバイスを頂いて

いたので、南国の花や果物、都会の雰囲気やファーストフード店など賑やかな写真を織り交ぜた DVD を最初に見せたことで、生徒は終始活発に意見を述べてくれた。

アンケートの回答を比較すると、生徒からはすぐに、「神！」や「前向き」や「夢があってすごい」、「自分に自信があってすごい」などの率直な感想が次々に出てきた。

フィリピンで途上国支援を行っている横田さんの「チャレンジ券」の話を引用させてもらい、授業を締めくくった。その後、生徒に感想の記入と簡単なアンケートに答えてもらった。

授業後のアンケート
①日本以外の国の出来事に関心をもつことができた　　―　はい：１１８名　いいえ：０名
②貧困や紛争など世界で起こっている問題を知っている ―　はい：８１名　　いい

【感想】

〇日本の「当り前」は、フィリピンでの「幸せ」なのだと思った。今の環境に感謝したい。
〇今の自分の生活は、工夫や協力などなくても良い便利なモノが周りに溢れている。
〇今日一日を必死に生き抜いて、将来に向かって頑張っているところがすごいと思う。
〇日本に生まれて来ただけで「チャレンジ券」がたくさんある、無駄にしてはいけない。
〇モノに恵まれているのにそんなに幸せと思う人が少ない日本、そういう意味では羨ましい。

②英語理解（３年生２３名対象）２時間

〇女子の就学率を取り上げた課である。本文に「国連のミレニアム宣言」が記載されており、“Food for Education”の取り組みが紹介されている。授業では本文の読解の後に、Photo Language の活動を行った。就学率についてはフィリピンの現

た。
〇貧困の「悪循環」（“Vicious circle”と教科書には表記）
写真の生徒はフィリピン人を母親に持ち、授業の際も他の生

③英語Ⅱ（２年生１９名対象）１０時間　／教科書 LovEng ENGLISH Ⅱ（啓林館）

英語Ⅱの教科書の Lesson 8 に“CHILD LABOR（児童労働）”の問題を扱った課がある。海外研修を通して私自身が途上国の現状を知ったことをきっかけとして、生徒に日本の外で起こっている問題に目を向けさせ、同時に問題の切実さを感じてもらえる授業を組み立てることを心がけた。特別な授業の設定ではなく、通常の英語の授業の中でフィリピンや途上国の様子を伝えることを心がけた。また、生徒には、できるだけ言語活動（英語を読む・聞く・書く・話す）を通して、途上国の抱える問題を理解してもらえるように、タスク中心の授業構成とした。以下は合計１０時間の授業の詳細である。

●１時間目

正月明けの最初の授業だったので、冬休みの過ごし方などを会話形式で聞き、そこから家事について話を広げた。ゲームを通して、家事に関する英語表現を引き出した。その後研修で撮影した写真を用いて Photo Language の活動に入るとすぐに、ある一人の男子が「児童労働の写真？」と気づいた。各グループで情報を共有した後に、本文の導入を行った。

●２時間目

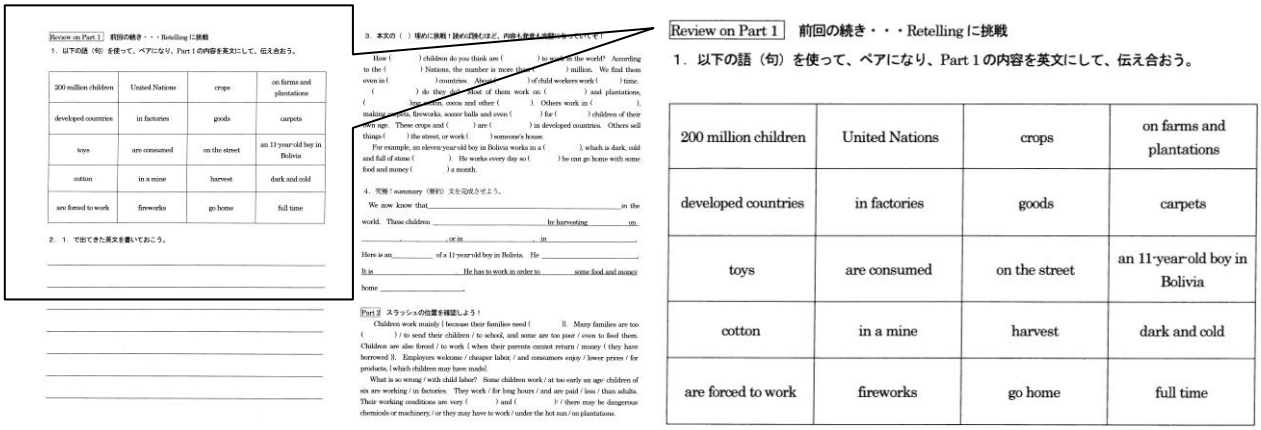
前の時間に使った写真に、新たな写真を加えて英問英答を行った。“What do you think are they doing?”や“Where are they working?”などの簡単な質問に答えてもらった。この Warm up の活動により、本文 Part 1（以下に掲載）の内容の読み取りは非常にスムーズに進んだ。

Lesson 8 CHILD LABOR - Part 1 …Most of them work on farms and plantations, harvesting cotton, cocoa and other crops.　Others work in factories, making carpets, fireworks, soccer balls and even toys for richer children of their own age.　These crops and goods are consumed in developed countries.　Others sell things on the street, or work at someone's house….

●３－４時間目

下のワークシートを用いて、ペアでの retelling を主の活動とした。課の導入で用いた写真とワークシートにあるキーワードによって、生徒はやや難しさを

感じながらも、ペアで協力しながらよく取り組んでいた。この活動により、生徒が少しでも世界的な問題や話題について英語で話すことのできる機会を増やしていきたいと考えている。



Review on Part 1　前回の続き・・・Retelling に挑戦

1．以下の語（句）を使って、ペアになり、Part 1 の内容を英文にして、伝え合おう。

200 million children	United Nations	crops	on farms and plantations
developed countries	in factories	goods	carpets
toys	are consumed	on the street	an 11-year-old boy in Bolivia
cotton	in a mine	harvest	dark and cold
are forced to work	fireworks	go home	full time

●５－６時間目

Part 2 に登場する英文（以下に掲載）の中に too poor とある。その状況がどのようなものか、最貧困層の生活について数字を用いて説明をした。本文の読み取りの後、poverty（貧困）というキーワードから連想される事柄を web map 上に表すグループ活動を行った。その後にグループ内で出てきた内容を、他のグループと共有した。

> (Part 2) Children work mainly because their families need money. Many families are too poor to send their children to school, and some are too poor even to feed them. Children are also forced to work when their parents cannot return money they have borrowed. Employers welcome cheaper labor, and consumers enjoy lower prices for products, which children may have made. …

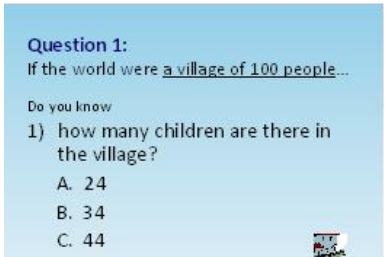
●７時間目

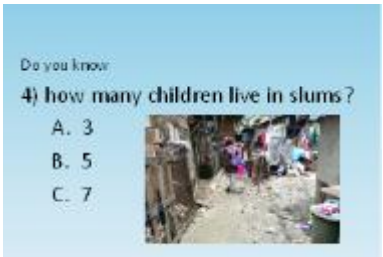
Part 3 の内容まで読み進めた後に、「貧困の輪」の活動を行
Poverty（貧困）と書かれたカードを中心に、７つの要因カ
をグループ毎に話し合って並べてもらうと、５グループと
並びになっており大変興味深かった。その後、理由を説明
らった。

●８時間目（国際教育研究協議会理事会・研究会）

Warm up の活動に、「世界がもし１００人の村だったら…」をもとにしたクイズを実施した。

今回は扱っている課が児童労働をテーマにしているので、「子ども」のデータに焦点をあてた出題をした。各グループとも協力して答えてくれた。　（下はクイズに用いたスライド）





その後、スラム街を中心にフィリピンの映像を見てもらった。パヤタス地区の住人が住むすぐそばに大きなスモーキーマウンテンがそびえ立つ映像には驚きの声があがっていた。教科書本文で、国連や ILO、国際機関が児童労働撤廃の取り組みを進めていることを読み取っていたので、本時は NGO の活動として、パヤタスで支援活動を行っているソルト・パヤタス代表の小川さんを紹介することとした。その際に Running Dictation という言語活動を通して、グループ内で英語のやり取りをしながら情報を集めてもらった。小川さんの写真をその後に見せると、生徒は英文で小川さんの説明ができるようになっていた。パヤタス地区に住み、ソルトの奨学生でもある Angelica さんの夢や、Children Empowerment Program についても触れた。

授業の後半には、前時に考えた「貧困の輪」の貧困を断ち切る１か所をグループで話し合ってもらった。大半の生徒が、貧困の後に続く「学校に行けない」という要因を選んで印を入れていたが、参観の方々に加わって頂き（推進員の南さんが助けて下さいました）、「その問題が解決するとすべてが問題なく回り始めるか」との問いかけに、「確かに…ここだけでは即解決につながらない」と議論をさらに重ねていた。授業後の質疑応答の中で、貧困から生じる諸問題や要因の複雑さに気付かせるアプローチができれば、と南さんにアドバイスを頂いた。

●９時間目（フェアトレードの意義 ― 私たちにできること）

授業の始めに、男子生徒２人組にある role-play をしてもらった。学校に行けない理由については既に学んできたが、ここで Why do you learn?（なぜ学ぶのか、なぜ勉強が必要なのか）という問いを生徒自身に投げかけたかったからだ。そのため、彼らの知らない言語で「危険」と書かれたペットボトルと、さらに別の言語で「水」と書かれたものの２本を用意し、喉が渇いて飲み物がほしい状況設定でロールプレイをしてもらった。２人とも文字が読めない状況で、結局勘に頼ることで運よく水を選ぶことができた。現実に文字が読めないことで、

薬を適切に服用できない、地雷のある地域に誤って入ってしまうなど命に関わる危険があることを話すと、生徒たちはただの活動でよかったと話していた。南北問題について説明をした後は、フェアトレードの意義について考える時間とした。授業の最後に、フェアトレードチョコレートを用いて作ったお菓子とフェアトレードコーヒーを生徒たちに味わってもらった。

なぜ学ぶのか？－生徒の回答から

〇将来進学または就職するため（自分の夢の実現のため）／お金を稼ぐため／より良い生活を送るため／社会で生活するための常識などを身につけるため／生きるため／自立するため　など

学ぶこと、フェアトレードについて考えたこと

〇学びたくても学べない人たちがたくさんいることを知って、勉強できることが幸せなことだと思った。〇多くの国が救われるのなら、ある程度の値段であっても是非フェアトレード商品を買いたい。

※フェアトレードという言葉を聞いたことのある生徒は１９人中誰もいなかった。

●１０時間目

１０時間のまとめとして、２４時間 TV で特集されたソルト・パヤタス、ユニカセの VTR を見てもらうことを中心に授業を構成した。まず、パヤタスの人々の暮らしについて、集めたペットボトルなどのゴミ１kg の取引価格の表（事後研修で小学校グル―プが作られたもの）を提示した。その後に映像を見る視点をワークシートで示し、ビデオを見てもらった。生徒の感想を見ると、小川さんや中村さんの話された言葉一つひとつがとても重く、生徒の心に伝わっていたようだ。その後、“What can we do?”（私たちにできることは何か）をテーマに、各グループで話し合ってもらい、一人１枚のカードにキーワードを書いてもらった。最後に、授業者自身の言葉、キーワードを示し、授業を締めくくった。

☆成果と課題☆

「微力でも無力ではない」と最後の授業で男子生徒がつぶやいた。私の教育実践はまだスタートしたばかりで今は無力に近い。しかし、拙い授業を通してでも、日本の外に目を向け始めた生徒が少ないながらも出てきたことは嬉しい成果である。また、写真や映像などの視覚教材が見る人の想像力を強烈に喚起する効果についても知ることができた。今はまだ児童労働や貧困問題を表面的にしか扱えていない。問題の核心に迫る授業を実践するためには、私自身が次のステップに進まなければならない。今後はこれまで以上にアンテナを張って、様々な国際協力団体の活動にも注目し、自身の情報を update していきたい。

☆参考資料・教材など☆

〇ソルト・パヤタス通信「大地の塩」４０号　〇DAYS Japan 2005 OCT　〇横田さん資料

〇集まれ地球の教室 JICA　〇世界がもし１００人の村だったら ②、子ども編、完結編

「宇宙船“地球号”の一員として」

氏 名（Fukuyama　Takahide）
山鹿市立鹿北中学校（熊本県）
担当教科：数学科

●実践教科：
特設（行事）・学活・道徳
●時 間 数：５時間
●対象学年：３年生・全校生徒

☆カリキュラム☆

実践の目的

TV、ラジオ、新聞やインターネットで海外のニュースは毎日流れている。気になった情報を調べようと思えばいつでも調べることができる。しかし、子どもたちは「他の国のこと」「遠い世界のこと」としてとらえて、自分の問題ではないと考えていることの方が多いように感じる。同じ国で起こった東日本大震災でも同じことがいえるのかもしれない。そこを人ごとではなく自分のこととしてつないで気づかせていく役目が私たちにはあると思う。この研修で得た経験や知識、そしてこの感動を子どもたちに伝えていければと思う。刺激を与え続けることで、少しずつ視野が広がっていくのではないか。

宮沢賢治の言葉の中に「世界中の人が幸福にならない限り個人の幸福はありえない。」という言葉がある。自分の幸せを追求するためには、周りの幸せを考え行動していくことが大切であると私たちに教えてくれている。

同じ地球に暮らす仲間として、自分のこととしてとらえ、自分に何ができるのか、どんな力をつけていかなければならないのかを考えさせる必要性を感じ、以下の目的を設定した。

〇異なる文化や習慣に触れ、多様な見方や考え方ができるようにするとともに、同じ地球に暮らす仲間としてつながっているということを自覚させる。
〇人類愛を持って海外で活躍する日本人の生き方や考え方に触れることを通して、相手の立場や考え方を尊重し、世界の一員として人類の福祉に貢献しようとする心情を育てる。
〇海外の現状を知り、自分の生活を振り返る活動を通して、真の「豊かさ」とは何か、自分たちに求められているものは何かを考えていこうという心情を育てる。
〇どんな困難な状況におかれても「夢」や「希望」が生き方を変えていくことを知り、希望を持って自分の人生を切りひらいていこうとする態度を育てる。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
研修前 【世界一大きな授業】 テーマ：震災から見えてきた教育の大切さ ねらい：世界中のだれもが教育を受けられるために何ができるか考える。	世界で6700 万人の子どもが学校に通っていない現状を知り、スマトラ沖地震の災害後の子ども参加の事例をもとに、身近なところから地球規模に視野を広げ、世界中の子どもが教育を受けられるために自分には何ができるかを考えさせる。最後に野田総理への提言書を書く。	・映像『津波の前と後』制作の背景 ・テレビ、CD デッキ パソコン、プロジェクター ・インターネット ・ A5 サイズの紙 ・ ワークシート
【１時限】 テーマ：真の豊かさとは？ ねらい：いろんな国の家族の生活の様子を知り、真の豊かさとは何かを考える。	班ごとに異なる４カ国の写真「地球家族」の写真を用いて、世界中の暮らしを想像し、日本の暮らしと比較することで、豊かさとは何かについて考えさせる。今後行う国際理解教育の導入として行う。	・「地球家族」の写真 ～世界３０カ国の普通の暮らし～ ・付箋紙 ・ワークシート
【２時限】 テーマ：海外で暮らす日本の子どもたちとフィリピンの子どもたち ねらい：海外で暮らす日本の子どもたちと、フィリピンの子どもたちの現状を知り自分たちの生活を振り返る。	フィリピンで撮った写真や動画を見せながら、同じ年代の子どもたちの生活の様子を理解する。また、フィリピンの日本人学校に通う子どもたちの生活の様子を紹介し、自分たちの生活を振り返る。自分の身近なこととして考えさせるために海外で暮らす日本人学校の「子ども」にも焦点をあて、比較させながらフィリピンの子どもたちの現状を理解させる。	・プロジェクター ・スライド
【３時限】 テーマ：「熊本から世界へ」～Global な視点を持つ～	JICA 熊本県国際協力推進員の木下俊和さんに来ていただいて、グローバルな視点を持つということはどんなことなのか、これから	・JICA 出前講座 ・パワーポイント

ねらい:JICA の取組を知り、これからの国際人として必要ものは何かを考える。	の国際人として必要な力は何かを考えさせる。自分のこととしてとらえさせるために「木下さんの生き方（キャリア教育の視点）」に焦点を当てて内容を構成していただいた。	
【４時限】 テーマ：〇格差に負けないで希望を持って生きているフィリピンの人々 ねらい：どんなにつらい状況に直面しても、努力することによって現状を改善できることを知り、自分自身の将来に希望を感じることができる。	フィリピンの紹介ビデオを見て、プラスイメージを持たせる。フィリピンで作られた商品を見て、その背景を考えさせる。フィリピンの貧しい地域の写真を見せ、それが商品と関係していることに気づかせていく。その商品を作っている人の笑顔の写真から現状を受け入れ、それを改善しようと努力する現地の人々の力強さを感じさせる。最後にその背景には日本の NGO の方々の支援があることを知らせる。実際に商品を触らせ、その苦労や努力を実感させる。 マイナス的なイメージの植えつけにならないように気をつけ、どんな厳しい状況でも、努力を重ねることによって将来に希望を持つことができるということを感じさせる。	・イメージビデオ ・フィリピンで撮ってきた写真 ・フィリピンの商品 ・付箋紙
【５時限】 テーマ：海外で活躍する日本人 ねらい：海外で活躍する日本人の生き方や考え方に触れることを通して、相手の立場や考え方を尊重し、世界の一員として人類の福祉に貢献しようとす	「海外で国際貢献をしている日本人」に焦点を当て、世界の一員としての自覚と自分に何ができるかを考えさせる。フィリピンで出会った NGO の方々、協力隊員の想いや生き方を写真とビデオを使いながら紹介する。（中村さん・小川さん・小松隊員・林隊員・増田隊員・渡邊隊員・小林さん・JICA 中村さん・横田さん・耳の里親会）	・写真、ビデオ ・研修レポート

る心情を育てる。		
【国際理解掲示板】 テーマ： 世界に目を向けよう ねらい： 国際理解掲示板を設置し、世界へ目を向ける機会を多く持たせ、自分のことと関連づけて考える。	月ごとに担当を決めて張り替えを行う。道徳の授業やその他の授業で関連した内容を掲示する。作成には生徒たちが関わりながら作るようにしている。	・広用紙 ・写真
【防災キャンプ】 テーマ： 防災に備える ねらい：災害時、地域のリーダーとなって活躍できる基本的な知識や態度を身に付ける	１泊２日で防災キャンプを行った。JICA の中村さんから「地域防災コミュニティー」の重要さを教えていただきプログラムに反映することができた。	・日本赤十字熊本支社 ・ボランティア団体（あいの会） ・社会福祉協議会

☆授業の詳細☆

【事前】

１．「世界一大きな授業」を説明する。

２．挙手や参加型のアクティビティ「部屋の四隅」方法で、クラス全体にクイズを出す。

３．「クイズの回答と解説」を使いながら、答え合わせをする。質問に登場する外国の場所を世界地図で確認しながらすすめる。（世界の現状を知る）

４．2004 年12 月に発生したスマトラ沖地震から7年以上が経ち、被災地や被災した子どもたちは津波の後にどのような取り組みをしたか考える。

～ 映像『津波の前と後』視聴～

５．「子どもクラブ」の活動を知り、自分たちができる「世界の子どもたちが学校に行けるようにする取組」を考える。

６．各グループで出た意見や話し合ったことを全体に発表する。

７．野田総理への提言書を書く

【授業後の感想より】（原文のまま）

〇世界で６７００万人の子どもが教育を受けられないと知って、びっくりしました。私たちは、当たり前に学校に来て「勉強が嫌だ」とか言っているけどとても恵まれているなと思いました。まずは現実を知ることが大切だと思いました。

〇「津波はすべての人を平等にした。そして、子どもたちが地域を変える主役になった」という言葉が印象に残った。「子どもクラブ」を作り、自分たちで地域を変え、発展させていこうという自主的な取組はすごいと思った。自分

も地域のために何ができるのかを考えていきたい。

【１時限】

１．「豊かさ」とは何か思いつくものを書く。

２．地球家族から異なる国の４枚の写真を配り、フォトランゲージをし、思いついたことを付箋紙に書いて貼る。（写真を見て気づいたこと・不思議だなって思ったこと・日本と違うなと思ったことなど）

【ルール】①自分の考え・気づきを否定しない。②友だちの考えを否定しない。

３．考えを共有し、豊かだと思う順番に写真を並べ、その理由も含めて発表する。

４．日本の写真を見せ、何番目に入るかを考える。

５．感想を書く。

【生徒の感想より】（原文のまま）

〇お金があることが豊かなことだと思っていたが、それだけではないと思えてきた。僕は、笑顔がある生活が豊かなことではないかと思った。

〇日本の写真は物が多すぎて、こうやって写真を見ると無駄なものが多く贅沢だと思った。周りから見て貧乏だと感じても、暮らしている本人が幸せだと感じることができればそれが豊かなことだと思う。

【２時限】

１．アンケート結果を見る。

２．日本人学校の生活の様子を知る。

３．フィリピンの基礎知識（場所・人口・宗教等）

４．フィリピンで暮らす日本の子どもたちの生活を知る。

５．フィリピンの人々の生活の様子を知る。

６．フィリピンの子どもたちの現状を知る。

７．感想を書く

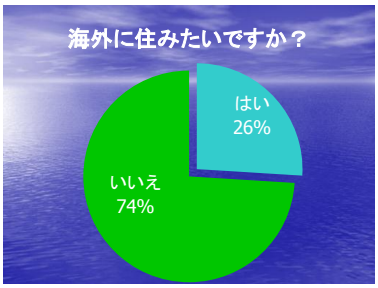
【授業後の感想より】（原文のまま）

〇僕は国際理解教室の授業の中で、フィリピンの人々の様子を写真やビデオを見たりしたけど、子どもたちやフィリピンに住んでいる日本のこどもたちもみんな笑顔で、たとえ貧しい生活をしていても前向きな考えを持って暮らしているのですごいなと思いました。日本以外の国ではいろいろな人たちがいて、それぞれ違った生活をしているけどみんな同じ地球に住んでいるのでこれから仲良くしていかなければいけないと思いました。

〇日本人学校について話を聞いて、日本と似ていると知りました。時々他校との交流もあることを知って、楽しそうだなと思いました。私は、フィリピンとかの最初の印象は、貧しいなどしか思っていなかったけど、みんなが明る

く前向きな性格な所があり、私たち日本人も学ばなければならないところもあるなと思いました。そして、これからもたくさんの国のことを知り、もっと世界中が仲良くなる必要があると思いました。

【授業で使ったスライド】



【３時限】

１．自己紹介、クイズ（世界の人口、国の数、発展途上国とは等）
２．JICA とは
３．海外青年協力隊の活動
４．海外青年協力隊に参加しようと思った理由、今までの生い立ち
５．パプアニューギニアでの活動の様子
６．多文化共生の時代
７．海外で気づいたこと、海外で学んだこと
８．グローバルな視点を持つ人材とは
９．感想

【生徒の感想より】（原文のまま）

〇今日の授業で、更に国際貢献について興味をもつことができました。木下さんの言葉に「英語ができることにこしたことはないけれども、基本的にはいろんな人とコミュニケーションをとることから始めればいい」という言葉があり、英語が苦手な私でもできるんだと思えてとても参考になりました。国際関係の仕事もいいなと思ってきました。

〇これからは外国の方と接する機会も多くなると思います。お互いの文化や考え方の違いを認めながら共生していきたいです。海外に行かなくても、世界を想いながら熊本で生活するということも、国際理解につながるということも分かった。

〇JICA についていろいろと知ることができました。命に何の不安もなく、安全に暮らせる人なんてほんの一握りしかいないことに驚いて、安全に暮らせない人たちに思いをはせました。「自分の生活に満足しなければならない。満足な生活ができない人がいる。それを助けようとする人がいる。」この事を忘れてはいけないと思いました。

【４時限】

１．フィリピンの概要を紹介したビデオを視聴し，感想を発表する。

２．フィリピンで作られた商品の写真を見て，感想を発表する。

３．フィリピンの現状を知る。（フォトランゲージ）

(1)　グループに分かれ，写真を見て気づいたことや疑問に思ったことなどを書き込む。

(2)　各グループで出た内容を発表し，共有する。

(3)　各写真についての説明を聞く。

４．そこに暮らす人々の写真を見る。

(1)　笑顔の写真を見て、その背景を考える。

(2)　商品と笑顔とのつながりを知る。

(3)　実物に触れる

５．感想を書く

６．教師の説話を聞く

(1)日本人の関わりを知る

【授業で使った写真】

【生徒の感想より】（原文のまま）

〇写真に写っていた笑顔が印象的だった。ゴミ山で生活しなければならないのはとても大変なことだと思うが、その中で笑顔で生活できるのですごいと思った。貧しい現状を変えていこうと努力する姿勢は日本の私たちも見習わなければならないと思った。

〇商品がとてもかわいくて欲しいと思いました。しかし、その商品の背景には、フィリピンの人たちの自立への想いが入っていて最後に触ったときには何か重み

を感じることができた。私たちは当たり前に生活していることをもっと感謝しなければならないと思いました。努力することで道は開けていくんだと思いました。

【５時限】

１．海外で活躍する日本人 Best３（知っている日本人は誰）
２．前時を振り返る。（フィリピンの商品を見せる）
３．海外で活躍する日本人とその想いを知る。

(1)ユニカセ（中村さん）　(2)ソルト・パヤタス（小川さん）
(3)サンタバーバラ高校（小松隊員）　(4)イロイロ特別支援学校（林隊員）
(5)イロイロ障害者協会（増田隊員）　(6)ミアガオ国立高校（渡辺隊員）
(7)LOOB（小林さん）　(8)イロイロ防水防御（JICA 中村さん）
(9)ACTION（横田さん）　(10)耳の里親会

４．感想を書く
５．共有する

【生徒の感想より】

〇こんなにも多くの人が国際貢献をされているということを初めて知りました。中でも、フィリピンの若者のために私財をなげうってまでも支援している中村さんはすごいなと思いました。自分の子どものように接しておられて、本当の家族と同じなんだと思いました。僕も、困っている人の為に何か役に立てるような人になりたいと思いました。

〇困っている人たちのためにたくさんの人たちが支援されているのを知って、日本人であることが誇らしくなりました。私も、この人たちのように国際貢献できるような仕事に就きたいと思うようになりました。みなさん強い信念を持って活動されている様子がよく分かりました。

【国際理解掲示板】

昇降口前の掲示板を「国際理解掲示板」として確保し、毎月テーマを決めて、掲示している。

９月　フィリピンってどんな国？
１０月　オリンピックの感動をもう一度
１１月　地雷除去（カンボジア）
１２月　世界の衣装
１月　世界のお正月

【国際理解掲示板】

２月　外国でも有名な日本の歌は？
３月　スマトラ沖地震（東日本大震災と関連して）

道徳、教科で習ったことに関連する掲示をするようにして、生徒の興味関心を高めるようにしている。

【防災キャンプ】

１泊２日の日程で、１３の研修を行った。水の補給や寝る場所など様々な制限を設けて実施した。

【研修１】青少年赤十字の話
【研修２】災害講話
【研修３】救急救命法（AED、心肺蘇生）
【研修４】自分の災害時の行動予測
（地区生徒会における災害想定）
【研修５】災害時炊き出し訓練
（ハイゼックス米体験）
【研修６】夕食
【研修７】片付け
【研修８】ダンボールベッド設置
【研修９】避難訓練
（停電時における夜間の避難）
【研修１０】簡単にできるエクササイズ
（心のストレス軽減）
【研修１１】バケツリレー
【研修１２】設備撤去・片付け
【研修１３】防災作文

☆成果と課題☆

・フィリピンで学んだことを少しは生徒たちに還元できたのではないか。事前、事後研修で学んだフォトランゲージやマッピングなどワークショップ形式の参加型授業ができた。生徒たちの感想の中にも表れているように少しずつ国際的な目が育ってきているように感じる。継続して実践していくことで更に深まりがきたいできる。たくさんの方とのつながりができたことが、私自身の大きな収穫になっている。

●時間の確保が難しかった。年間計画が決まっており、今回は特別に時間を作ってもらって行うことができた。来年度は、４月のうちにきちんと計画を立てて実践していく必要性がある。知ることや考えることはある程度できたが、「気づき、行動する」という段階まで至っていない。これからは教師側からのさらなる仕掛けが必要になってくると思う。そのために、どんなことができるのか、どんなことをさせたいのか私自身の研修を深めていかねばならない。

知ることからつながる、関わる

氏 名　梅山　文（ UMEYAMA Aya）
相良村立相良中学校（熊本県）
担当教科：英語科

●実践教科：英語、道徳
●時 間 数 ：６時間（英語４，道徳２）
●対象学年：１年生
●対象人数：２１名

☆カリキュラム☆

欲しいものは全て手に入り、生きていく上で少々の困難があっても大人の助けを受け何不自由なく生活している日本の子どもたち。そして、自分に自信がない、夢がないという。このような子どもたちが年々増えている日本において、彼らが世界の現状について積極的に目を向け、日本と諸外国との関係を認め、国際社会のために行動をすることは大変難しい今日である。しかし、この一瞬にも、世界中には夢を持ちながらも命を落としている子どもたちがいる。この格差に私自身がこの研修に参加することで改めて気づくことができた。自分に自信がない、夢がない、一人では何もできないと思っている子どもにも、それぞれのよさがあることに気づき、それぞれの力を発揮することで将来社会の一員として自信を持って生活していってほしい、そして自分ができることから日本のみならず国際社会に貢献して欲しいと考える。今回、私がフィリピンにおいて五感を通して感じたことを伝え、子どもたちと共に考えることで、まずは知ることや気づくこと、関わることの大切さに気づき、そして今後彼らが広い視野や寛容の心を持ち、生きていってくれることを願って授業を組み立てた。

実践の目的

〇日本以外の国について興味関心を持ち、知ること、関わることの重要性を確認する。
〇異なる文化に触れることで、多様なものの見方や考えがあることを理解する。
〇貧困について考えることで、自分たちの生活について振り返り、さらに多くの人が幸せに生きていくために自分自身ができることを考える。
〇世界の国々に助けられながら生活している日本人と世界の現状を確認することで、国際社会における日本人の役割と国際協力について考える。

〇一人一人には価値があり、それぞれに大きな力を持っていること、それを世の中のため
に発揮することの大切さをフィリピンで出会った人々や、資料に登場する人物の生き方
を通して理解する。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【第１回】 テーマ：フィリピンを知ろう ねらい：フィリピンという国について知る。新しく知ることと、先入観との違いを受け入れる。	・フィリピンについての質疑応答をする。 ・フィリピンで撮ってきた写真や、事後研修で作成したパワーポイントを通して、フィリピンの現状を知る。	・パワーポイント ・国旗 ・写真 ・音楽 ・フィリピンで入手した品物
【第２回】 テーマ：笑顔の源は？ ねらい:パヤタス地区で暮らす人々の笑顔と現状について学ぶ。	・いきいきと暮らす人々の姿を知る。 ・パヤタス地区のゴミ山の写真を見せ、それが何であるか考える。 ・ゴミで作られた商品が子供たちの学校生活を助けていることを知り、自分たちの生活を振り返る。	・写真 ・リサイクルで作られた商品 ・ワークシート
【第３回】 テーマ：パヤタス地区について知る ねらい:フィリピンにおける貧困の現状を知り、今後自分たちがどう行動すべきかを考える。	・映像を通して、パヤタス地区について知る。 ・世界の日常と自分たちの生活の違いを理解し、問題点について考え自分の考えをまとめる。	・DVD（24 時間テレビ） ・写真
【第４回】 テーマ：世界の現状と JICA の活動について知る ねらい：世界の現状と JICA の活動について資料を通して知る。	・前回の授業を振り返る。 ・貧困について考える。 ・世界の現状と JICA の活動についてパワーポイントを通して知る。 ・これまでの授業を通して学んだことを、エッセイとしてまとめる。	・パワーポイント ・原稿用紙
【第５回】 テーマ：国際協力について考える ねらい：身近な人物を通して、国際協力を考える。	・熊本県教育委員会から出されている資料を活用し、宇良田唯子の生涯について知る。 ・国際協力について考える。	・読み物資料 ・ワークシート
【第６回】 テーマ:青年海外協力隊の活動につい	・資料を通して青年海外協力隊について知る。	・読み物資料 ・感想用紙

て知る ねらい:様々な人たちの活動から一人一人の力の偉大さに気づく。	・一人からでもできること、一人の力が大きいことに気づく。	

☆授業の詳細☆

【1 時間目】「フィリピンについて知ろう」

フィリピンについての質問を出し、生徒の知識や関心をまず確認した。フィリピンが位置する場所は知っており、どういうイメージかと聞くと、「バナナ」「暑い」「発展途上国」などがでてきた。そこで、事後研修中に中学部で作成された映像や写真を見せ、現在のフィリピンについて知らせた。また、私が現地で得たものを見たり触れたり、マンゴーなどを食することでフィリピンを身近に感じさせた。また、現地の方々の笑顔の写真を見せ、生き生きと暮らしている人々とその生活について次時に詳しく学習することを伝え楽しい雰囲気で終わった。

【提示した写真と授業風景】

【2 時間目】　「笑顔の源は？」

前時に見せた写真を見せ、写真を見た感想を出させ、どうしてこのような笑顔になれるのかを考えさせた。生徒が考えた理由として、

・友達がいるから　・毎日楽しいから　・夢や希望があるから　・教育が違う
・環境がいい　・人との触れ合いがある　・助け合いながら生きているから

などの意見が出た。私からフィリピンの人たちの特性として、信仰心が高く家族愛に溢れていること、考えがポジティブな人が多いことや、これから先のことで悩まず、生きている今を大切にし楽しもうとする傾向があることなどのプラス面を伝えた。そしてその後、パヤタス地区のゴミ山の写真を見せ、それが笑顔に関係していることを伝えた。生徒たちは、その山が何であるのか、そこにいる人は何をしているのかを考え発表した。その後、私から生活のためにゴミを集めて暮らしている人たちがいることなどの説明を聞くと、驚きと衝撃を受けていたようであった。また、前回見せたフィリピンの品物は、実は笑顔の大人たちが作成したもので、その商品から得たお金が奨学金となり、子どもたちが学校に行けているということも知らせた。授業で知ったフィリピンの現実と、自分たちを振り返り生徒たちは真剣に感想を書いていた。

〈生徒の感想〉
・フィリピンの映像を見たときは、みんなが笑顔で、思っていたよりも豊かなのかなと思っていました。でも、今日の話を聞いて、家族のために自分たちでいろんな工夫や苦労をして暮らしていることがわかりました。
・フィリピンはもっと自然が豊かだというイメージがあったけど、ゴミをも燃やせないのは大変なことだと思いました。
・フィリピンという国を知って、はじめは世界についてあまり関心はなかったけど、多くのことを学ぶことができてよかったです。学校に行けることを、改めて幸せなんだと感じました。
・写真で見た子どもたちの笑顔の裏には、何とか子供を学校に行かせようと頑張る大人たち

【提示した写真】

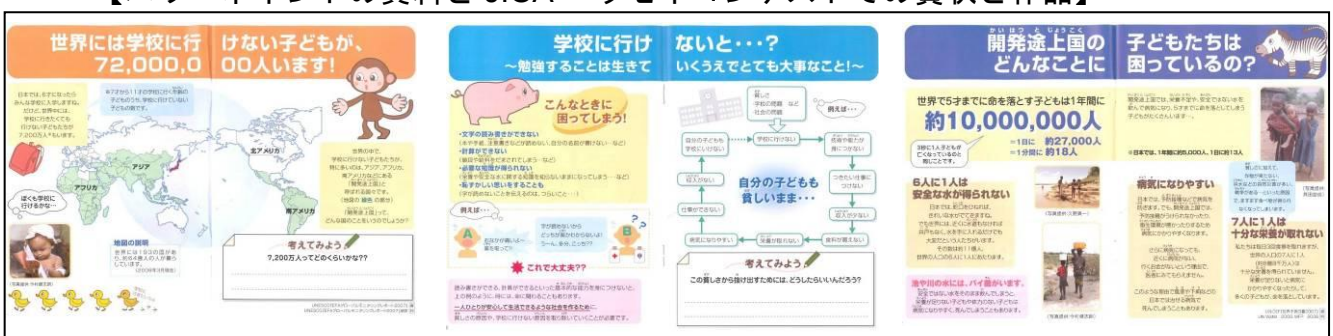
【3 時間目】　「パヤタス地区について知る」

前時で知ったパヤタス地区。詳しく知るために 24 時間テレビの映像でパヤタス地区の現状と、NGO で活躍する日本人の小川さんたちの具体的な活動を見せた。この映像を通して、生徒たちは、安心して眠ることができる家があることがいかに幸せなことか、そしてフィリピンで人々を支えている日本人がいることに気づいた。子どもを学校に行かせるために作られた商品が日本人の活動によって生まれており、それらのように人々の生活を支えるために生産されているフェアトレード商品というものがあるということも生徒たちは初めて知ることとなった。

【4 時間目】　「世界の現状と JICA の活動について知る」

JICA 資料「どうなってるの？世界と日本」から情報を抜粋し、クイズ形式で発展途上国の問題を提起し貧困について考えさせた。1 ドル以下で生活している 11 億人の人々や学校に行けない子どもたち、5 歳未満で亡くなる子どもの数など想像以上の現実に終始生徒たちは真剣に話を聞いていた。その後、JICA の活動内容を示し、日本の役割や自分たちにできることが何であるかを考えさせた。そして、その思いを形として残そうと「JICA エッセイコンテスト」に応募した。ここまでの 4 時間は、私が英語を担当している１、２年生全員に対して行った。生徒たちのそれぞれの思いがしっかりと綴られ、授業を行う前よりも視野が広がり、前向きなことばがエッセイの中で多く見られたことに嬉しく思い、また生徒に知る機会を与えることの大切さを改めて実感した。生徒たちの取組の結果、『学校賞』と『熊本県青年海外協力協会賞』を受賞することができた。私の説明を聞いたあとに参加賞としていただいたファイルを受け取った生徒たちには、エッセイを書いた充実感と、世界と自分がつながっていると感じているような嬉しそうな表情が見られた。生徒たちは、毎日そのファイルを使っている。

【パワーポイントの資料と JICA エッセイコンテストでの賞状と作品】

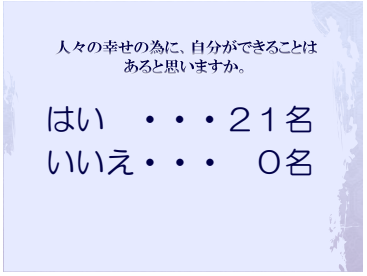


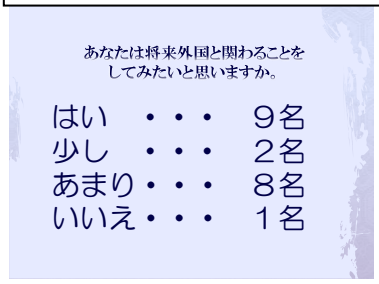
〈生徒の感想〉
・世界中には「おかえり。」と言葉をかけてくれる人がいない子どもたちがたくさんいる。
　だからといって、すぐに支援に行くことはできないし、多額の寄付もできない。だから、
　私は全てのことに感謝しようと思った。多くの日本人が支援に行っていることも知った。
　強い意志を持って活動されている。私は将来、医者になりたいと思っている。多くを学び、
　一人でも多くの命を救い、社会に貢献していきたい。
・多くの発展途上国から、東日本大震災のときに寄付をいただいた。戦争や貧困で厳しい生
　活にもかかわらず集められたこのお金は、先進国からの寄付金に比べれば決して大きくな
　い数字です。しかし、日本よりお金が必要な国のはずなのに、寄付をしてくれた。私はそ
　れをとても大きなものと捉えている。だからこのことを忘れず、私も募金をし

【5 時間目】　「国際協力について考える」

「熊本の心」には、県出身者の業績が綴られている。私はその中でも宇良田唯子さんという女医を取り上げ、身近なところから国際協力のために尽力した人がいたことを知らせた。日本でも活躍を期待されたがそれでも海外へ行き、多くの苦難を経験し、最終的には現地の人と心を通わせ信頼された宇良田さん。その人生のターニングポイントにおける選択や生涯を通しての生き方を見つめ、生徒たちはこれからの自分たちについて考えた。終盤に、私が今回のフィリピン研修で出会った方々についても説明し、いろいろな形で自分の力を活かせることを伝えた。

【パワーポイントの資料と生徒の事前アンケート】





【６時間目】　「青年海外協力隊の活動について知る」

熊本県版の道徳教材『心つないで』（教育出版）に掲載されていた資料「アフリカで」を活用し、青年海外協力隊の活動について学習した。その資料を見せる前に、ケビン・カーターが撮った「ハゲワシと少女」という写真を見せ、そ

〈生徒の感想〉

・国の違いで、いじめや差別があったりすることがあるけど、皆同じ人間だから、唯子さん
　のように平等にすることを忘れないように生きたい。

・心の広い人になり、多くの人と交流していきたいと思った。

・ぼくは、できるかできないか迷ったら行動できずにいるけど、唯子さんは迷っても現地に
　行って多くの人を救われたのがすばらしい。

・自分がやろうと決心したことは他の人に負けないくらい努力をして、多くの人に貢献でき
　る人になりたい。

・自分のやりたいことに一生懸命になり、自分で選んだ道に後悔せず、最後まで

の写真のおかげで世界中がアフリカの貧困の状態を知ることができたことを知らせた。また、その後に彼が写真を撮ることを優先し、少女を真っ先に助けなかったということで非難されたことにも触れ、行動にはリスクがあるかもしれないが、自分で正しいと思ったことや感じたことを行動に移すことで何かが変わるかもしれないということを伝えた後、資料を読んでいった。感想には、人の役に立てるよう日頃からできることをしていきたいという趣旨のものが多く、将来への希望を感じることができた。

☆成果と課題☆

・フィリピンという一つの国を通して、日本以外の国について興味関心を高めることができ、
　様々な生活や文化、考え方があることを認め理解させることができた。

・普段の生活では知りえなかったことを知ることで、自分以外の人のことに目を向け真剣に考
　え、また自分たちの生活を振り返るよい機会となった。

・世界の現状を知り、「貧困と格差」を是正するために日本人としてできることは何かを考えさ
　せることができた。また、世界に支えられている日本の立場を理解させることができた。

・今後、ゲストティーチャーを有効に活用するなど、継続的に国際理解や国際協力への取組を
　行っていきたい。

・今回の学習で学んだことや思いを、実際に今後の行動に移すことが大切であると感じている。

☆参考資料・教材など☆

・フィリピンで撮影した写真、入手した品物
・事後研修で作成された映像及び音楽
・24 時間テレビ DVD
・JICA 資料「どうなってるの？世界と日本」
・フェアトレード商品
・JICA エッセイコンテスト応募用紙
・熊本県道徳教育用郷土資料「熊本の心」
・道徳教材「心つないで」（教育出版）

「フィリピンの貧困から学ぼう！」の実践

氏　名　　森　　浩　三（Mori Kouzou）
別府市立別府商業高等学校（大分県）

●実践教科：文化祭特別講

ＬＨＲ　商業

●活動回数：４回
●対象学年：全学年
●対象人数：全学年（４８０名）

３年生（２回目以降の実践４０名）

☆カリキュラム☆

実践の目的

〇本校の生徒には、人間関係や些細な躓きから「学校に行きたくない」・「学校をやめたい」などすぐに口にする生徒が少なからずいる。世界の貧困の現状に目を向けることで、学校に通って学んでいること自体のありがたさを再認識し、教育の重要性を考える機会を持つことで、学習をはじめ自分の進路に対する意識を高める。

〇フィリピンをベースに活躍しているＮＧＯやＮＰＯの方の活動内容や体験談をはじめ、海外でボランティア活動に取り組んでいる人々（学生などを含む）の姿から、自分のあり方や生き方について考察を深める。働くこのとの意義を生活のためだけではなく、自分の生き方や人生と深く関わるものとして捉えることで、自分と真摯に向き合いキャリアを積極的にプランニングする姿勢を身につける。

〇フィリピンの社会の情勢や学校の現状など、様々な知識を吸収するうえで、異なる文化や国際理解の視点から「今の自分にできること」を念頭において、豊かな国際性（世界認識）を育む。また多文化が共生する社会を目指し、地球規模でものを考え主体的に取り組む力を養う。指導にあたっては「国際社会において活躍できる日本人」の育成に偏らず、日本との関わり、歴史的な背景など様々な視点からアプローチし、どのように共生していくかに重点をおいて学

習を深める。

〇スモーキーマウンテンでゴミを拾って生活している現状から、そうしなければならない背景を踏まえ、ＮＰＯ の協力のもとで取り組むリサイクル商品生産の様子から、生活支援のための継続的なビジネスを考える。またリサイクル商品を扱うことから持続可能なエコ活動をはじめ環境について考えを深める。

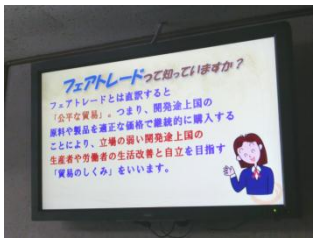
活動の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材および機材
【１回目】 対　象：全校生徒 　　４８０名 テーマ：貧困の現状から考える ねらい：フィリピンの高校生徒と日本の高校生の意識の違いを踏まえ、学ぶことの大切さについて考える	・国際協力推進員の話（２名） ・撮影してきた静止画・動画を導入とし使用する。フィリピンの現状を認識させる。 ・事前に採っておいたフィリピンの高校生と日本の高校生（本校生徒を含む）アンケートの集計結果を提供する。意識の違いを感じさせる。 ・ＮＨＫの番組「スーパープレゼンテーション」を授業で活用（貧困と教育に関する）する。 世界の貧困の現状から、教育の重要性について考えさせる。	・パヤタスを撮影した動画 　および静止画 ・アンケート集計結果 ・ＮＨＫスーパープレゼンテーション番組（許可済） ・ＰＣ　プロジェクタ ・プレゼンテーション資料
【文化祭での取り組み】 （フェアトレード商品等の販売） テーマ：身近な国際協力の在り方を考える	・文化祭でフェアトレード商品（チョコレート）と、ケニアの子どもたちの支援のため協力隊から依頼のあったミサンガを販売する。（商業調査部による企画・販売）	・フェアトレードチョコレート ・ケニア産ミサンガ ・紹介ポスター
【デジタルサイネージを活用した取り組み】	・パヤタスで暮らす人々の現状など校内の電子看板（ﾃﾞｼﾞﾀﾙｻｲﾈｰｼﾞ）を活用し、認識を深める。	・デジタルサイネージ※１ ・提示用スライド教材（２週間で更新）

【２回目】 対　象：３年生 テーマ：自分の進路など生き方について考える ねらい：フィリピンで活躍するＮＰＯやＮＧＯの方の取り組みから、また長期ボランティアとして取り組んでいる方の姿から、働くことの意義について考察を深める。	・編集した動画（ＮＰＯの方などの話・取り組みの様子）を見せる。 ・ワークシートに感じたことや気づいたこと、今の自分の働くことに対する考えを記入する。 ・ワークシートをもとにグループで「働くことの意味」について討論する。 ・今の学校での取り組みが、将来の自分につながることを再確認し、進路に対する意識を高める。	・撮影したＮＰＯ法人のソルトやACTIONの代表の方の話（動画） ・ＪＩＣＡの協力隊で活躍する方の取り組みの様子（静止画・動画） ・ＰＣ　プロジェクタ ・ワークシート（働くことについて） ・プレゼンテーション資料
時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材および機材
【３回目】 対　象：３年生 テーマ：豊かな世界認識を育もう ねらい：歴史的背景やその国の日本との関わりなど、様々な視点から共生を考える	・ＪＩＣＡ「学校へ行けない世界の子どもたち」の冊子を活用し、約7000万人の子どもが学校に行けていない現状を把握する。 ①なぜ学校へ行けないのか？ ②学校に行かないとどうなるか？ ③貧困のスパイラルの原因を考える ・開発途上国での貧困の現状を踏まえ、自分たちを取り巻く環境について考える。（物の豊かさが幸せか？） ・貧困の原因・日本との関わり、歴史的な背景などから、どうすれば共生の社会を築けるか考える。	・ＪＩＣＡ資料「学校へ行けない世界の子どもたち」 ・ＰＣ　プロジェクタ ・撮影した動画・静止画 ・プレゼンテーション資料 ・フィリピンの歴史に関する資料
【４回目】 対　象：３年生 テーマ：ゴミのリサイクル商品から地球環境を考えよう	・購入してきたリサイクル商品を何も言わず見せる。 ・リサイクル商品の製造が、貧困地域で生活している人の貴重な収入源になっている	・ジュースパックや洗剤の空き袋を加工して作られたバッグやキーケースなど※２

ねらい：ジュースパックなど拾ったゴミを加工して商品化することで、継続的なビジネスとなること、貧困地区における生活支援につながることを理解する。	ことを知る。 ・ＮＰＯ法人の方の話（動画）（貧困地域に暮らす人たちの生活支援・就労支援となっていること） ・ジュースパックなどゴミの回収をはじめ再利用することで、環境を配慮した取り組みにつながっていくことを理解する。	・撮影した動画・静止画 （加工の様子など） ・ＰＣ　プロジェクタ ・ソルトや ACTION などの NPO 法人に関する資料 ・プレゼンテーション資料

【使用教材】※１　　※２

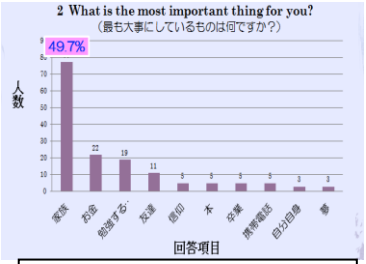


校内電子看板（ﾃﾞｼﾞﾀﾙｻｲﾈｰｼﾞ）

ジュースパックを再利用した商品

☆授業の詳細☆

【第１回】（全校生徒対象）



アンケート集計結果　一部

文化祭（マーキュリー祭）において全校生徒を対象（保護者も参加）に国際理解についての実践授業を行った。フィリピンの高校生と日本の高校生の意識の違いについて、アンケート結果をもとに授業を展開した。全校生徒対象だと細かな指導や配慮が難しく、ワークショップなどグループでの意見交換ができにくいので、こちらの意図していることが伝わりにくい。また当日は文化祭ということもあり、生徒はお祭りムードで、国際理解教育という状況ではないだろうと心配していた。しかしながらこちらが想像していた以上に生徒が話に集中しており、こちらの問いかけにも積極的に答える姿も見られた。

（実践授業にあたり）

・できる限り一方的な話にならないように生徒に問いかける場面を多く設けた。

・映像や画像を多く使用し飽きないように努めた。

・フィリピンと日本の高校生の、教育や家族などに対する意識の違いをアンケートによって比較

実践授業後、生徒からもっと話が聞きたいなど声をかけられ、その関心の高さに正直驚いた。
また実践授業にＪＩＣＡ大分デスクより渡辺さん、ＪＩＣＡ福岡デスクより古賀さんのお二人（共に青年海外協力隊で活躍）が来校し講演に参加していただいた。お二人にはＪＩＣＡの役割をはじめ海外青年協力隊隊員として活動されたモンゴルやキルギスについての体験談などを話していただいたが、リアルな話が生徒の関心をさらに高めていた。
今回の実践授業では視聴覚メディアを活用した実践授業とするため、ＮＨＫエデュケーショナルより活用の依頼のあったＮＨＫ　Ｅテレで放映中の「スーパープレゼンテーション」の番組を本実践授業に取り入れ活用した。番組自体が全編英語なので、生徒には少し難しいだろうと予測していたが、字幕等から「貧困における教育の重要性」を少しは感じ取ることができたのではないかと思う。何より貧困の問題が世界規模で取り上げられていることを実感できたと思われる。

【第２回】
フィリピンにおいてＮＰＯやＮＧＯで活躍する人たちの姿から、また長期ボランティアに取り組んでいる人たちの姿から働くことの意義について考える時間を設定した。
フィリピンで働こうと考えるようになったきっかけやその熱い思いから、現在の自分を振りかえることで授業を展開した。ワークシートを活用しグループで「働くこと」について討論したが、予想以上に自分の思いや考えについて、堂々と述べている姿に

少々驚いたと同時に頼もしく感じた。

ACTION 代表　横田宗さん　　ソルトパヤタス代表小川恵美子さん

【第３回】

ＪＩＣＡ資料である「学校に行けない子どもたち」の冊子を活用し授業を展開した。①なぜ学校へ行けないのか？②学校に行かないとどうなるか？③貧困のスパイラルの原因を考える　の３つを柱に学習を深めた。

フィリピンの貧困の現状を知ることで、自分たちの「幸せ」の再認識になっていないか、援助する側の日本人としての自己満足になっていないか、国際化へのとりくみが「国際社会で活躍できる日本人」の育成に傾斜していないかなどについて留意し、歴史的な背景や社会情勢など踏まえ多文化共生について考察を深めることができた。感想の中に、「身の回りのことでいっぱいいっぱいの毎日だけど、少しでも世界（フィリピン）の貧困の現状を知ることができて、身の回りだけではない世界に視野広げることの大切さを感じました」という文章を見つけ、僅かではあるが世界認識から共生を考えようとする意識が高まってきていると感じた。

【第４回】

実際にゴミとして拾ってきたジュースパックの空き袋を提示しながら、ジュースパックや洗剤の空き袋を再利用し作成したバッグやペンケースなど（フィリピンで購入してきたもの）を見せることで、本当にごみを再利用していることが実感できたと思う。またこれらごみのリサイクル製品の製造にあたることで、貧困地域に暮らす人々の生活の糧、就労支援につながっていることを理解することができた。

ＮＰＯやＮＧＯ法人の活動の様子から、貧困地域に暮らす人々の就労支援だけでなく、地球規模での環境を考えた取り組みであることを理解し、今自分にできることについて考える機会とすることができた。

☆授業外での取り組み☆

校内電子看板（デジタルサイネージ）を活用した国際理解教育

生徒向け電子看板（2010 年度卒業記念品）において、１０月上旬よりフィリピンの教育格差をはじめ、フィリピンで撮影してきた貧困の現状などをスライド形式で生徒に紹介した。この電子看板は、音声はなく始業から放課後１７時まで繰り返し再生されるもので、休み時間や放課後など、授業時間外に生徒に

伝えるものである。内容を一週間のサイクルで変更し提示したが、立ち止まって見る生徒も多くフィリピンの貧困の現状について、少なからず意識を高めたように感じる。中でもスモーキーマウンテン（ゴミ山）に関する画像には強い関心を示していた。

フィリピンの貧困の現状をはじめマニラ市内の様子、学校の様子などを、第１回の全校生徒対象の実践授業をする前に画像データとして提示しておくことで、「なぜフィリピンなの？」といった導入での違和感もなく、スムーズな実践授業を展開できた。（下写真）

フィリピンの貧困の現状１

フィリピンの貧困の現状２

また、文化祭でフェアトレード商品の販売を商業調査部の活動の一環として行うことから、フェアトレードの意味や趣旨をはじめ、国際フェアトレードラベル機構について文化祭までの約１ヶ月間提示した。

フェアトレード紹介スライド１

フェアトレード紹介スライド１

生徒の反応については、電子看板の更新当初は「フェアトレードってなに？」という状態であったが、文化祭が近付くにつれて生徒の認知度も高まってきた。何より身近な国際協力として、スーパーなどに買い物に行った際に注意して商品を見るようになったと生徒の声を聞くことができたことがうれしかった。

電子看板を活用し視覚に訴えることで、少しずつ生徒の世界認識、国際理解も深まってきているように感じる。

電子看板を活用した情報提供は引き続き行っている。

フェアトレード商品の販売

文化祭においてフェアトレード商品（チョコレート）を販売した。

販売にあたり、フェアトレードの趣旨を書いた模造紙や途上国の貧困の様子をＡ３版の写真で印刷し販売する場所に掲示した。会場設営や掲示物の作成は商業調査部が行った。

商品の仕入れにあたっては商業調査部内の話し合いから、金額的には高校生であることを考慮し 200 円を超えないもの、また個数については全校生徒の３割にあたる１６０個を考えたが、売れ残りを回避することも考え、フェアトレードチョコレート１００個を仕入れた。

フェアトレードチョコレートについては販売初日で完売し、こちらの予測をはるかに上回る反応だった。予定では文化祭期間の２日間とも販売する予定だった。

また今回フェアトレード商品を販売するにあたり、ＪＩＣＡの国際推進員との相談の中で出てきた、ケニアの子ども支援のためにケニアのお母さん方が作られたミサンガをあわせて販売することとなった。早速ケニアからミサンガを送っていただくことにしたが、文化祭に間に合わせるためには早急にケニアより発送しなくてはならず、現在７０個を用意できるとのことだったので７０個限定の販売となった。ミサンガについては２日間で完売したが、女子生徒だけでなく男子生徒や保護者の購入も多く見られた。

生徒だけでなく保護者にも国際協力を呼びかける２日間となり、フェアトレード商品やミサンガの購入が、身近な国際協力につながっていることを実感することができたと思われる。

ケニアから送っていただいたミサンガ

青年海外協力隊の方から送っていただいたケニアの写真

販売の様子

☆成果と課題☆

（成果）

〇フィリピンの貧困の現状から教育の必要性と、今の自分がやらなければならないことの再確認ができ世界の中の日本を意識することができた。

〇ＮＰＯやＮＧＯの方の活躍の様子から、職業観（自分にとって仕事とは何か？働くことの意味は？）について意識を高めることができた。自分の進路に対して真摯に取り組む姿勢がさらに高まってきたと思う。

〇フィリピンの歴史的な背景や日本との関連、社会情勢を深く学ぶことで、グローバルな視野で共生社会を創造していこうとする姿勢を身に付けている。継続した取り組みの中で豊かな世界認識ができるように育んでいきたい。

〇地球環境を考えたエコに対する意識を深めることができた。ゴミを再利用したリサイクル商品の製造から、貧困地域に暮らす人々の就労支援と継続的なビジネスとしての機会を融合した取り組みであること学び、働くことが収入だけではない自分の人生のこれからの生き方を考える機会となった。

（課題）

●情報を提示しすぎてやや消化できてない印象を受けた。「貧困」をキーワードに実践授業を展開してきたが、「豊かな日本でよかった」など「幸せ？」の再確認に終わっていないか？の疑問が残る。

●フィリピンだけではなく、今後実践授業などの取り組みをするうえで、外国にルーツを持つ生徒すべてに対して事前のケアを十分に行う必要性を感じた。

●　本校では国際理解教育を、キャリア教育の一環としてや総合的な学習の時間などに位置づけて取り組まれていない。赴任してから地域の大学の留学生と交流するなどのイベントはあったが、年間をとおしての恒例の行事とはなっていない。また分掌としてもどの部署が担当するのか決まっておらず、ほとんど取り組みとしては行われていないのが現状である。

今回の一連の取り組みがイベント的な今年度限りの実践ではなく、国際観光都市別府市が設立する市立の高等学校として、今後継続的な国際理解教育を推進していきたい。そのためにはどの教科が担当するとかではなく、まずは学校全体で取り組める環境づくりの必要性を感じる。

本校は県立高校の後期再編整備計画により２０１４年を最後に募集停止となり近隣２校と統合する予定である。新設校には国際関係の学科が設置される予定であることから、新設校に引き継いでいける取り組みを今後目指していきたい。

【参考資料】

・「学校に行けない子どもたち」JICA 出版　　・「多文化共生社会の教育」天野 正治, 村田 翼夫:著

・改訂開発教育・国際理解教育ハンドブック（財団法人 国際協力推進協会）

【協　　力】JICA 九州　JICA デスク福岡　JICA デスク大分　ＮＨＫエデュケーショナル

～世界を見つめ、自分を見つめよう～

田村　京子（Tamura Kyoko）
宮崎大学教育文化学部附属中学校（宮崎県）
担当教科：英語科

●実践教科：英語科、道徳、学活
●時間数　：６時間
●対象学年：中学１年生
●対象人数：学級（４０名）
学年（１６０名）

カリキュラム☆

実践の目的

〇　フィリピンの現状を知ることから、開発途上国の抱える問題について理解を深め、それらの問題の解決について主体的に考え行動しようとする能力を養うとともに、他に対する思いやりの心と人権感覚を磨く。

〇　NGO 団体や青年海外協力隊などの活動を伝えることで、開発途上国支援のために尽力する日本人の生き方について知り、自身の今後の生き方について考えるとともに、国際的視野を培う。

〇　フィリピンに住む方たちとの交流を通して、異文化を理解する心を育むとともに、海外への興味・関心を高める。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【事前学習】 テーマ：「国際協力について知り、フィリピンの子供たちとつながろう」 ねらい：外国の子供たちとつながる経験をすることで、外国を身近に感じる。	・『Mother House』の創設者である山口さんのことを紹介し、『国際協力とは？』と考えるきっかけ作りをする。 ・アンケートを実施する。 ・担任（私）が研修でフィリピンを訪問することを伝える。 ・折り紙を送ろうと提案し、実際に作業する。 ・筆記用具等の提供協力について話す。	・山口絵里子さんの取組を紹介する映像 ・アンケート ・折り紙
【１時限】 テーマ：「フィリピンの現状について知ろう」	・フォトランゲージの手法を用いて、フィリピンについて写真からわかる情報・気付いたこと	・ソルト・パヤタスで購入した商品 ・フィリピンの写真

ねらい：フィリピンの子供達の暮らす現状を知り、開発途上国について考える。	を班で出し合って話し合った後、全体の場で発表する。 ・実際の映像を見せる。	・「24時間テレビ（2012）」新垣結衣さんフィリピン訪問時の映像 ・内容をまとめたパワーポイント資料
【２時限】 テーマ：「貢献する生き方」 ねらい：フィリピンで活躍する日本人を通して、人に貢献する生き方について考える。	・普段ゴミになるものが商品になることを知る。 ・NGOアクションの代表である横田さんのことを紹介する。	・ecomisomoとLOOBの商品 ・ecomisomoを紹介している画像 ・ecomisomoの紹介記事 ・横田さんの記事「チャレンジ券」 ・内容をまとめたパワーポイント資料
【３時限】 テーマ：「フィリピンにグリーティングカードを送ろう」 ねらい：外国の子供達とつながる経験をすることで、外国に対する興味・関心を高める。	・英語の授業を使って、フィリピンの現状について知らせる。 ・英語を用いてグリーティングカードを作成する。	・フィリピンの子供達の写真
【４時限】 テーマ：「青年海外協力隊の活動について知ろう」 ねらい：国際協力員の話を通して、実際に海外で貢献するということについて知る。	・JICA宮崎デスクの﨑田さんに依頼し、国際協力の視点とご自身の経験について話してもらう。	・﨑田さんが作成したパワーポイント資料
【５時限】 テーマ：「フィリピンの子供たちの考え方と比較してみよう」 ねらい：アンケート結果をもとに、フィリピ	・フィリピンの子供たちのアンケート結果をまとめたものと自分たちの結果をまとめたものを提示する。 ・アンケート結果について班で話し合い、気付いた点を発表す	・フィリピンの高校生のアンケート結果 ・学級のアンケート結果 ・LOOBカレンダー

ンの子供達との考え方の違いを知ることから異文化について理解を深める。	る。	
【６時限】 テーマ：「マジカルバナナ」 ねらい：フィリピンのバナナ農園について知ることを通して、開発途上国が抱える問題に目を向けるとともに自分たちの身近な生活とも関係があることを知る。	・クイズでフィリピンのバナナについての概要を知る。 ・ロールプレイを通して、バナナ農園で働く人たちの現状を知るとともに、２つの農園を比較することで問題点を明らかにする。 ・カードゲームを通して、授業で学んだことの振り返りをする。	・教材「マジカルバナナ」

☆授業の詳細☆

【事前学習】対象：学級

Mother House の創設者である山口絵里子さんの取組を紹介し、国際協力と言っても様々な取組があることを伝え、「国際協力とは？」と考えるきっかけ作りを行った。また、フィリピンの子供達との実態比較をするためのアンケートを実施した。その後、私が研修でフィリピンを訪問し、現地の子供達と交流することを伝え、折り紙を作ろうと提案し、実際に作業を行った。折り紙には、自分の名前をローマ字で書くように指示した。中には、漢字とローマ字の両方で書いたり、メッセージを簡単な英語で書いたりする生徒もいた。写真１～３は、現地で子供達に折り紙を渡している場面である。これらの写真は、研修後に生徒達に紹介し、直接渡すことができたことを報告すると喜んでいた。現地の学校から筆記用具等を提供してくれないかという依頼があることを伝えたところ、多くの生徒達が、後日家庭から筆記用具等を持って来てくれた。

［写真１］

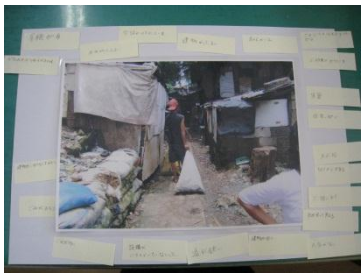
［写真２］

［写真３］

【第１時限】対象：学級

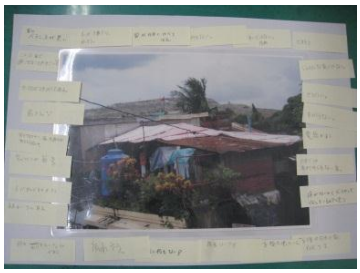
導入では、ソルト・パヤタスで購入した刺繍の絵を見せて、感想を言わせた。そこから、ゴミ山とソルト・パヤタス地区の写真を使ったフォトランゲージの活動に移った。その活動は班で行い、個人で気付いたことを付箋に書き出した後、意見を出し合う時間を設定した（写真４～６は生徒がフォトランゲージで取り組んだものの一部）。その後、写真別に気付いた点を発表させながら、私が写真の背景についても伝えていった。自分たちが想像していた状況よりも、厳しい状況の中で暮らしていることを知り、皆一様に驚いていた。最後に、2012 年 8 月に放送された日本テレビの「24 時間テレビ　愛は地球を救う」で新垣結衣さんがフィリピンを訪問した際の映像を紹介した。実際にフォトランゲージの取組で知り得た地域の内容でもあり、より深く知ろうと真剣に視聴していた。

［写真４］



［写真５］

［写真６］



《生徒の感想より》

「私は、今日の授業を通して、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前ではないということに気づきました。生活が苦しくて、子供でも働いていたことに驚きました。ゴミ山で亡くなった子供たちがいることを初めて知り、私は今学校に来ていることは当たり前ではないと思いました。私は、これから当たり前とは思わず、感謝の気持ちを忘れないでいたいです。」

「スラム街出身というだけで仕事につくための面接すら受けさせてもらうことが出来ないというのが、とても印象に残った。何が原因で、あんなに大きなゴミの山ができてしまうのか知りたいと思った。」

「フィリピンの子供たちは、毎日困難な事をしているのに、１日１日がとても楽しそうな姿をしていて、すごかった。私もやれることがあったら、活動したいと思いました。フィリピンにも、日本人がいて、一生懸命活動しているので、すごいなあと思いました。」

「私もフィリピンに行ったことがあるから、テレビで言っていたことはよく分かります。私が行った観光用のきれいな一部から少し出ると、貧しい暮らしをしているたくさんの人たちがいました。今、世界で貧しい暮らしをしているのは、フィリピンだけでなく、たくさんの国があります。だから、一度に救うことはできなくても、小さな１つのことから始めることはとても大切だなあと思いました。」

「今は、現実的に感じることができないけど、そのような人たちがいるということを改めて感じ、自分はものすごく幸せな環境で育っているんだと実感しました。一人の力じゃどうにもできないけど、私もそういうことに興味をもち、将来少しでも、そのようなボランティアに参加したいと思いました。他人ごとではすませられないなあと思いました。」

【第２時限】対象：学級

導入では、ecomismo の商品を紹介し、何で出来ているか想像させた。実際に手に取らせて見せたことで、お菓子の袋からこんなにも丈夫でオシャレな品物が出来るということに驚いていた。その後、実際に作成体験をしたことやトライシクルに乗った体験などについて映像を見せながら話した。そして、「どんな人たちが何のためにこの商品を作っているのか。」を考えさせた。子供たちのために商品を作っているお母さんたちのことに触れた後、横田さんの生き方について紹介した。高校生の時に単身で、しかも何のツテもない状態でフィリピンの孤児院再建の手伝いに行った話や、大学生で NPO を立ち上げた話等、皆驚きながら、真剣に聞いていた。それから、横田さんが日本人の子供たちに向けて書かれたメッセージ「チャレンジ券」という記事を読んだ。最後に LOOB さんの商品や活動についても紹介した。（写真７～９は授業の様子）

［写真７］

［写真８］

［写真９］

《生徒の感想より》

「僕は、人間の良いところは平等だが、環境は平等ではないという言葉になるほどなと思いました。それを考えると、僕が日本に生まれたのは、とても幸せなことだったんだなあと思いました。横田さんもチャレンジ券を使うことで、恵まれない子たちのチャレンジ券を増やしているんだと思います。僕もそのようなことにチャレンジ券を使いたいです。」

「横田さんのように、一度目標を立てたら、達成するまで努力をしたいと思いました。貧しい国では、目標を立てても達成できない環境になっています。だから、その人たちの分まで、一度決めた目標は最後までやり抜こうと思います。」

「確かに、日本で生まれたからこそ、『将来に何になろうかな～』なんて余裕持って言えるのであって、きっと外国の子供たちの中では、『将来何ならなれるかな？』と夢も限られてくるのだと思います。私たちは、勉強にしろ、部活にしろ、目標に向かってがんばれるという幸せを持っています。私は、改めて自分たちは本当に幸せだということを実感し、これからは外国の子供たちの分まで、がんばろうと思うし、少しずつでもそういう子供たちの支えになりたいし、何か支援できたらな･･･と思います。」

「私は、普段、失敗したらどうしよう、どうせできない、というネガティブな考えを何かするたびにしてしまいます。でも、それは多くのチャンスをもっているから、と書かれていて、私は幸せなんだと実感しました。横田さんのように大きなことはできないけど、自分の夢に向かって、貧しい国の人たちの分もたくさんチャレンジしていきたいです。」

「フィリピンの子どもが、家庭の関係だけで、自分の夢が実現できないということが印象に残った。『生まれながらに将来が決まる』そのことを思うと、僕はもっと『チャレンジ券』を使おうと思う。」

【第３時限】対象：学年　　［写真１０］

英語の授業で、フィリピンの子供たちにグリーティングカードを送る活動を行った。英語でクリスマスと新年の挨拶を入れたグリーティングカードを作成した。作成に入る前に、フィリピンの子供たちの写真を見せて、彼らを取り巻く環境等について話をした。担任学級以外の生徒にフィリピンのことについて話す貴重な機会となった。送付先は、研修でお世話になったNPOの方々にご協力頂いた。中には、Face Bookに写真を掲載して、紹介して下さった団体もあった。（写真１０は、生徒が実際に作成したカードの一部である。）

【第４時限】対象：学年

実際に、国際協力に携わった経験のある方の話を聞いて、海外で貢献するということはどんなことかを具体的にイメージする機会を作りたいと考え、JICA宮崎の国際協力推進員である﨑田さんに講話をして頂いた。パワーポイントを使って、世界の現状や国際協力に関する知識を確認された後、ご自身がインドネシアで青年海外協力隊として派遣されていた時のことについて紹介された。（写真１１は授業の様子である。）　　［写真１１］

【第５時限】対象：学級　　［写真１２］

最初に、写真を見せながら、フィリピンの学校の様子を紹介した。写真では、同世代にあたる高校生の学校生活の様子が分かる写真を中心に見せ、就学年数の違い等、特徴的なことにも触れた。その後、以前アンケートを行ったことを思い出させ、同じアンケートをフィリピンでも行った話をすると、その結果に大変興味を示した。班で気づいたことについ

て話し合う場面を設定したが、様々な視点から意見をまとめていた。自分たちにとって当たり前のことが当たり前ではないなど考え方の違いがあることに着目した班や、家族を大切にするという点は一緒だと似ている点に着目した班が見られた。また、フィリピン人の精神的な強さや純粋さに着目した班もあり、アンケートを通して得られたフィリピンへの印象は好意的なものであることが分かった。（写真１３は、授業の様子である）

《生徒の感想より》

「今日のフィリピンの画像やアンケートの結果を見て、日本とは大きく違っていると感じた。僕たちが当たり前のように持っているものを、フィリピンの人たちは欲しがっていた。でも、フィリピンの人は、いつも笑顔でいた。物では日本の方が上でも、心ではフィリピンから学ぶことは多いと強く感じた。」

「フィリピンの印象が変わりました。正直言うと『お金がなくて困っている国』でした。でも、今日の授業で『強い人が多い国』に変わりました。」

「フィリピンの人にとって大事なものは、日本人にとって当たり前だというものが多いと思いました。親や家族を大切にしている人が多いのは、宗教も関係しているのではないかと思います。」

「今日は、フィリピンの人たちと自分たちのほしいもの、将来の夢などが全然ちがって、日本でのほとんど当たり前は、外国（フィリピン）では、ふつうのことではないから、感謝しないといけないなと思いました。あと、フィリピンと日本の学校では学校に通う年数が違うことにも驚きました。」

「改めてフィリピンの良さが分かりました。フィリピンの人は、大人を大切にし、経済的に厳しいのに、精神的に大人だと思った。私たち日本人は、もう少し自分を見つめ直すべきだと思う。」

【第６時限】対象：学年

JICA 宮崎の国際協力推進員である﨑田さんにご協力いただき、教材「マジカルバナナ」を使って授業を行った。この教材を全て扱うには５０分は短いため、﨑田さんも試行錯誤してくださり、事前の打合せで何度も練り直しを行った。結果として、中学１年生に楽しく学びながら、開発途上国の抱える問題点を認識してもらうねらいを達成する上では、良い流れができたと考える。また、バナナという題材は、自分たちの生活と開発途上国の現状が関係していることを身近に捉えるのに有効であったことが生徒の感想からも伺える。今回は、学年の担任の先生方にご協力いただき、ティームティーチングという形で授業を行った。先生方からも楽しく学べたと言って頂いた。まずは、クイズでフィリピンのバナナについて概要を知る活動を行った。その後、ロールプレイを行い、２つの農園の比較を行った。ロールプレイでは、なりきって演じる生徒達もおり、楽しくも真剣に話の内容を理解していた。その後、カードを使って、授業のまとめを行ったが、数枚迷うカードがあるようであった。（写真１３～１５は授業の様子である）

［写真１３］　［写真１４］　［写真１５］

《生徒の感想より》

「お芝居にすると頭にすぐ入ってきて、わかりやすかった。ＡよりもＢの方がフィリピンの人の暮らしも安全もいいと思うが、雇われていたら変更できないからかわいそうだと思った。バランゴンとキャベンディッシュは、とても違うことが分かった。買う時は、今日感じたことを忘れずに考えたいと思う。」

「いつも食べる側だから生産者の事は考えたことがなかったけど、演じてみて、農家の人も苦労しながら生きているんだということが分かった。毎朝バナナは食べているが、どこで作られ、誰が作ったのかということは気にしていなかったから、気にしたい。」

「演じてみて、フィリピンでは貧しい状況の中で育てたバナナを日本に売っても『黒い所があるから･･･』と買わない人がいて、日本はとてもぜいたくなのかもしれない･･･と改めて思いました。演じるのが大変だった！でも、楽しかった!!フィリピンの農薬とか使っていないバナナは少し黒みを帯びていた。そういうのを食べたい。」

「バナナ農園で働く人々は、農薬など使っていて、体の具合が悪くなることがあることを知って、バナナを作るのにこんなに苦労すると思うと、バナナを倍おいしく食べることができると思います。バナナに種類があることを知り、輸送されるときの保存の仕方がちがうことに気づくことができました。これからは、バナナを買うときにしっかり見て、買うようにしようと思いました。」

「同じバナナを育てることでも、生活の仕方は変わるんだなと思った。フィリピンで作られたバナナを見ただけで『え～』と思うのはよくないと思った。私たちが食べているバナナは、どれも同じようなものだと思っていたけれど、それを育てているバナナ農家の人の暮らしは違うんだなあと思った。」

「バナナ農園で働いている人の生活がとても苦しいという現状が分かりました。しかし、一方のバランゴンを生産している人たちはちゃんとお金がもらえて、学校に行けていた。格差があった。日本では外見だけでバナナの価値を決めるんじゃないことを学んだ。」

☆成果と課題☆

〇テーマに掲げたように、世界を見つめることを通して自分を見つめるという点は、生徒の感想に自分を振り返ってのコメントが多く見られたことで、ねらいに迫れたのではないかと考える。〇流れとしては、ソルト・パヤタス地区の生活を中心に「フィリピンの現状」を知り、横田さんの取組を紹介することで「貢献する生き方」について学び、アンケート比較をすることで異文化につい

て考えを深めるという形にした。特に、アンケートの比較は同世代の意見が反映されているため、生徒たちに異文化に関心をもたせ、理解を深める手段としては有効であったと考える。
〇事前学習として折り鶴を作成し、実際に届けるという活動を行ったことは、生徒がフィリピンの子供たちとのつながりを感じる良い機会となった。英語の授業で行ったグリーティングカードを通しての交流も同様に、フィリピンの子供たちを身近に感じる機会となった。
〇学年の先生方にご協力いただき、還元授業を学年の取組として行えたことで、より多くの生徒たちに国際理解について考える機会を作ることができたとともに、先生方に理解を深めて頂く機会を作ることができた。
〇JICA 宮崎デスクの﨑田さんやフィリピンでご活躍の NPO 法人の方々にご協力いただき、授業を進めることができた。このことは、生徒が国際的な視野で行動するということを実感するとともに、海外との精神的な距離を縮める上でも役に立ったと思う。
●開発途上国が抱える問題について理解を深めるところまでは行ったが、実際に具体的な行動に移すまで持っていくことはできなかった。より計画的な取組にするとともに、情報を発信していかなくてはいけない。
●生徒たちの行動を見ていると、遠い国の子どもたちへの思いやりと身近にいる友達への思いやりという点を、別次元でとらえているように受け取れる。それは、一般的にもありがちな傾向ではあるが、生徒たちが、身近な問題と結びつけて、より豊かな心が育まれるよう支援していかなくてはいけない。

☆参考資料・教材など☆
・フィリピンで購入した商品
・フィリピンで撮影した写真・動画
・記事『今　君たちに伝えたいこと　「生命」をテーマにした子どもたちへのメッセージ　チャレンジ券』　NPO 法人 ACTION 代表　横田宗　道徳と特別活動 2008.9
・動画『この日本人がすごいらしい　世界を変えた強い女スペシャル　バッグ販売でバングラデシュの人々の自立を支援する日本人　山口絵里子（2011/02/11 放送)』テレビ東京
・動画『24 時間テレビ　愛は地球を救う 35　新垣結衣海外リポート (2012/08/26 放送)』日本テレビ
・平成 24 年度 JICA 九州教師海外研修アンケート集計結果

〈ご協力いただいた方々〉
・JICA 宮崎　国際協力推進員　﨑田佳予子さん
・NPO 法人ソルト・パヤタス代表　小川恵美子さん

・NPO 法人 ACTION 代表　横田宗さん
・NPO 法人　LOOB 代表　小林幸恵さん
・レストラン　ユニカセ代表　中村八千代さん
・宮崎大学教育文化学部附属中学校第 1 学年職員

フィリピンの今

自分の生き方を見つめよう　～フィリピンの人々と活躍する日本人～

東丸　直哉（HIGASHIMARU Naoya）
鹿児島県立志布志高等学校（鹿児島県）
担当教科：英語科

●実践教科：英語Ⅰ，LHR，
総合的な学習の時間，ESS 部
●時 間 数：各５時間
●対象学年：１年生（２クラス），
１・２年生（ESS 部）

☆カリキュラム☆

実践の目的

- ○　フィリピンの今を知らせ，日本との様々な違いを感じとらせる。
- ○　フィリピンの様々な立場の人々の暮らしを紹介し，自分自身の暮らしとの違いを考えさせる。
- ○　フィリピンで活躍する日本人について学ぶ。
- ○　フィリピンの高校生と自分たちのアンケート結果を比べ，自分自身の生き方を見つめさせる。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1～２時限：研修出発前】 テーマ：ゴミ山で暮らすマニカ ねらい:フィリピンのゴミ山で暮らす少女の暮らしについて知る。	・フィリピンのゴミ山で暮らす１２歳の少女マニカを特集したテレビ映像と，その２年後の映像を見せる。 ・フィリピンでとるものと同じ内容のアンケートに回答させる。 ・フィリピンの子ども達に渡す折り紙を作成させる。	・2005 年 / 2007 年 フジテレビ放送「世界がもし 100 人の村だったら」 ・アンケート用紙 ・折り紙

【３時限】 テーマ：フィリピンの今 ねらい: フィリピンの今について学ばせ, 日本との様々な違いについて感じ取らせる。	・フィリピンの菓子を試食させる。 ・フィリピンはどこにあるか，世界の白地図に色を塗らせる。 ・“フィリピンクイズ”に答えさせる。 ・フィリピンの流行歌を聴かせる。 ・写真，映像，模型，資料等を見せながら，現在のフィリピンについて知らせる。	・菓子，地図，フィリピン国旗, フィリピンのお金等 ・BGM ・ワークシート ・パワーポイント ・jeepney，tricycle の模型オモチャ
【４時限】 テーマ：フィリピンで働く日本人 ねらい : フィリピンの学校, 障がい者支援施設, ゴミ山の現状を知らせながら, そこで支援活動をしている日本人の生き方について考えさせる。	・写真，映像，現地で購入した商品等を見せながら，様々な学校，施設ゴミ山での暮らしを説明しながら，それぞれの場所で支援活動に従事している日本人について紹介する。 ・日本テレビ「24 時間テレビ（2012 年 8 月）」で放送された特集を見せ，フィリピンの貧困問題について再度理解させる。	・パワーポイント ・現地の人々の暮らしを支える様々な商品 ・2012 年日本テレビ放送「２４時間テレビ」
【５時限】 テーマ：フィリピンの高校生 ねらい: フィリピンの高校生にとったアンケート結果と, 授業実施クラスで回答させたアンケート結果を比較させ, 自分たちの生き方や価値観などについて考えさせる。	・パワーポイントを使いながら，フィリピンの高校生と自分達とのアンケート結果を比較させる。 ・授業を通した感想文を記入させる。 ・現地の人々の暮らしを支える様々な商品をじゃんけんで買った生徒にプレゼントする。	・パワーポイント ・感想文記入用紙 ・現地の人々の暮らしを支える様々な商品

☆授業の詳細☆

1～２時限「ゴミ山で暮らすマニカ」

１，２時限はフィリピン研修に行く前に行った授業である。2005 年と 2007 年にフジテレビで放送された「世界がもし 100 人の村だったら」で放送された，フィリピン・マニラ市のゴミ山（ステージングエリア）で働く少女を特集した映像を担当クラスで見せた。マニカ（１２歳）は，父親は殺され，母親は病気で寝込んでいるため，幼い二人の弟の面倒を見ながら，一家の大黒柱として一日中ゴミ山で換金できるものを探す生活を続けていた（当時はゴミ山で働く子どもが多かった）。マニカの家族には大人の稼ぎ手がいないため，そのゴミ山で最も稼ぎが少なく，食事も３日に一度という生活であった。

事後研修の中で，親がフィリピン人の生徒へのフォローはどうすべきか（『フィリピン＝貧しい』というイメージからいじめにつながることはないのか）という危惧や，フィリピンの負のイメージばかりを生徒に植え付けるのはよくな

いのではないかという意見もあったが，その点においては，高校では特に問題にはならないと感じた。私はこれまで，担当学年が変わるたびに，進路指導などのあるタイミングでこのテレビ映像を必ず生徒に見せてきた。フィリピンを語る上で，ゴミ山での暮らす人々の問題はフィリピンが抱える大きな社会のひずみの一つであり，決して無視することのできないものである。今回の研修では，ゴミ山を視察できることが分かっていたので，生徒には「フィリピンの現在のゴミ山での様子を実際に見てきて，それを報告します！」と伝えて，研修に参加した。また，現地の子ども達に渡すための折り鶴や手裏剣を，生徒は熱心に心を込めて作ってくれた。

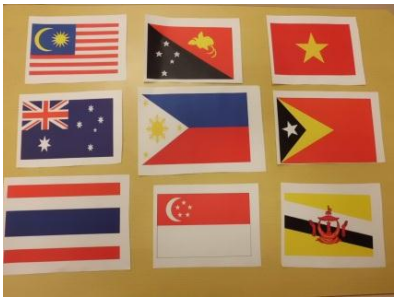
３時限「フィリピンの今」

３時限目からは研修後の授業である。帰国後すぐに，お土産のお菓子を担当クラス全員に配布し，フィリピン研修に関する質問に適宜答えたりしていたが，詳しい報告（授業）が学校行事や授業進度の関係でなかなかできず仕舞いで，結局，一つのクラスでは，この３時限目の授業の実施は年明けになってしまった。しかし，この頃，高校 1 年生は２年次の文系・理系選択を考える時期であったため，５時限目で扱うフィリピンと日本の高校生のアンケート結果を比較する授業が，生徒の進路指導においてちょうど良いタイミングであった。

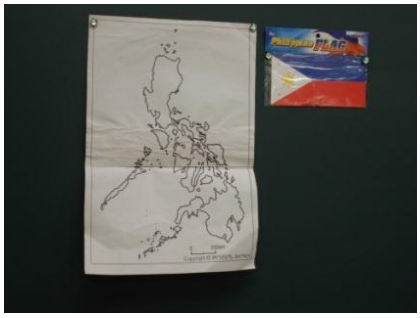
まずは導入として，フィリピンについて簡単に理解させた。世界の白地図を用意し，フィリピンに色を塗らせた。自分自身も研修前はフィリピンの位置を正確に把握していなかったが，生徒もしかりであった。私たち日本人はアジアにいながら，いかにアジア諸国に無関心であるかという事実を垣間見た気がした。その後，フィリピンの国旗当てクイズ（【資料１，２】），そして英語でのフィリピンに関するクイズ（【資料３】）を行った。BGM として，フィリピンの曲（【資料４】）をかけた。これらは現地の CD 屋で店員に勧めてもらったもので，英語とフィリピン語の両方の曲が入っているという観点で選んだ。日本の曲とは違う雰囲気を持ちながらも馴染みやすいメロディーであり，生徒にはなかなか好評だった。

次に，フィリピンという国や暮らし全般を紹介した。事後研修で高校グループの授業発表用に大分県の森先生が作ってくださったパワーポイントを元に，様々な画像を貼り付け，合計 224 枚のスライドになった（【資料５】）。説明中心にならないよう配慮し，質問を投げ掛けながらスライドを進めた。最初はマニラ市の高層ビルや滞在した高級ホテルの部屋の様子，食事の風景など，フィリピンの“光”とも言うべき裕福な部分を紹介した。しかし同時に，フィリピンはアジアでも犯罪率が高く，治安は決して良くないといった“負”の側面も持っている。麻薬探知犬や建物の警備の様子などの説明も加え，偏った情報にならないよう，私なりに体感した現在のフィリピンを伝えようと心掛けた。生徒にとって，目にする写真や動画の全てが新鮮であったようで，熱心に見入っていたのが印象的であった。フィリピンの生活に欠かせない jeepney（ジープ

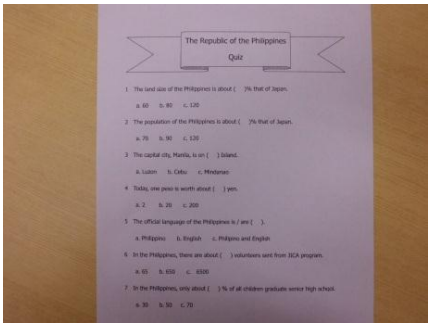
ニー）と tricycle（トライシクル）の説明用に買った模型のオモチャ（【資料６】）にも生徒は興味を示し，授業後に生徒は群がっていた。



【資料１】



【資料２】



【資料３】

【資料４】

【資料５】

【資料６】

４時限「フィリピンで働く日本人」

４ 時限目は研修で訪れた様々な視察先を説明しながら，そこで暮らすフィリピンの人々と，彼らを支援する日本人の生き方に焦点を当てた。①「ユニカセ」の中村八千代さん，②「ソルト・パヤタス」の小川恵美子さん，③「サンタ・バーバラ国立総合高校」の小松隊員，④「イロイロ特別支援学校」の林隊員，⑤「イロイロ障がい者協会」の曽根隊員，⑥「ミヤガオ国立高校」の渡邉隊員，⑦「LOOB」の小林幸恵さん，⑧「アクション」・「エコミスモ」の横田宗さん，⑨イロイロ川洪水防御案件の中村さんを紹介し，特に①，②，⑦，⑧は，その生き方について生徒とじっくり話し合った。

① 「ユニカセ」の中村八千代さん（【資料７】）

レストラン「ユニカセ」を経営される中村さんの生き方で印象に残っている

ことは，お金を持ち逃げされたり，仕事に来なくなったりと，子ども達に何度も裏切られながらも，目の前にいる子ども達を見捨てることなく支援を続けてきたということだ。その強い信念と温かい心が生徒に伝えられたらという気持ちで授業に臨んだ。レストランには『困難を克服し，人生の意味を受け入れることで，危険な状態にいる子ども達の数を減らしていくことを，私たちは目標としています』という“Vision”（【資料８】）と，『危険な状態にいる子ども達にチャンスを与え，安定した収入を確保させるために，栄養な食事を提供し，健康的なライフスタイルを促進します』という“Mission”が掲げられていた。また，調理場には『Basic Rules for Business（仕事をする上での基本的な決まり）』が掲げられ，『モノを盗まない』，『嘘をつかない』，『プライベートと仕事を区別する』，『経費を抑え，利益を上げる』といった，彼らがそれまでの暮らしの中で身に着けることができなかった，仕事をする（＝生きていく）上での必要な 35 にも及ぶルールを常日頃から説いているということであった。真正面から子ども達にぶつかっていく中村さんを，子ども達は母親のような存在であると言っていたことを，生徒に伝えた。

① 「ソルト・パヤタス」の小川恵美子さん

生徒は，実際のゴミ山や家の写真（【資料９】）を，神妙な顔つきで見ていた。ゴミ山の崩落事故の悲惨さや，パヤタスで暮らす家族の平均収入がフィリピン全体のそれより低いことを伝え，生徒はフィリピンという国の中の格差を感じられたようであった。小川さんの支援で特徴的だったのは，支援している母親達はいずれは自立していかなければならないという信念を持ち，運営を完全に引き継ごうとしており，そこが他の NGO と考え方が違う点であった。それは JICA のボランティア派遣と通じるところがあると感じた。ボランティアや支援には様々な仕方や考え方があることを生徒に伝え，ボランティアの様々な側面についてグループで考えさせた。その後，「ソルト・パヤタス」が行っている支援である scholarship（奨学金），library（図書館運営），tutorial（勉強），life skills（生き方），そして母親の自立を促す Likha（アトリエ・リカ）（【資料 10】）について説明し，リカで作られた刺繍付きタオルを紹介した。

⑦「LOOB」の小林幸恵さん

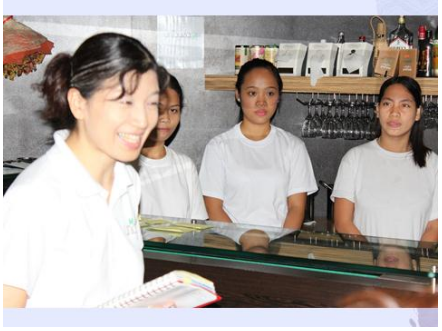
３時限目のフィリピンクイズ（【資料３】）の復習として，フィリピン人の高校の卒業率 50%を再度生徒に認識させた。視察で訪問したマンダリアオ小学校と分校（【資料 11】）との施設環境の違いに生徒は驚いていた。（授業を終えて，沼地にある建物（マンダリアオ小学校分校）が何であるかをフォトランゲージで生徒に考えさせる時間があればと感じた。）LOOB の UCLA センターで child minding（学童保育）で子ども達と交流（【資料 12】）した後に，子ども達が帰る家がゴミ山周辺の劣悪な環境であるという事実を思い出し，なんともやるせなかったという思いを生徒達に伝えた。

⑧「アクション」・「エコミスモ」の横田宗さん（【資料 13】）

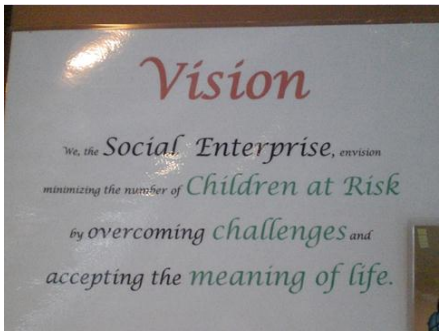
横田さんは私と同世代であったため，私は本研修において，その行動力と生き方に大変感銘した。高校生の時にピナトゥボ火山の噴火で被災した孤児院の存在を知り，単身，フィリピンに渡り，それ以降，フィリピンでの様々な支援に従事する横田さんの生き方を説明した。NPO 法人「アクション」の活動，そして貧困層女性の支援事業で商品を作っている「エコミスモ」について説明し，「エコミスモ」商品（【資料 14】）を紹介した。「エコミスモ」商品には，日本でも高値で売れるような質にこだわった横田さんの販売戦略が存分にいかされていた。

最後に，日本テレビ「24 時間テレビ（2012 年 8 月）」で放送されたフィリピンの特集（【資料 15】）を見せた。この取材は，私たちが帰国後すぐに撮影されたものであり，①の「ユニカセ」の中村さんと，②の「ソルト・パヤタス」の小川さんの活動とフィリピンの貧困問題についてうまくまとめられていた。鹿児島県ではテレビで放送されなかったため，生徒はあらためて本時の授業内容に対する理解を深めることができたようだ。

授業終了時には，「LOOB」のストラップと財布，「エコミスモ」のストラップを希望者にじゃんけんをさせ，プレゼントした。勝者は大変喜んでいた。ほんのささやかなプレゼントであるが，ここから国際支援やボランティアへの理解が広がれば良いと思った。（【資料 16】）



【資料７】



【資料８】

【資料９】

【資料 10】

【資料 11】

【資料 12】

【資料 13】

【資料 14】

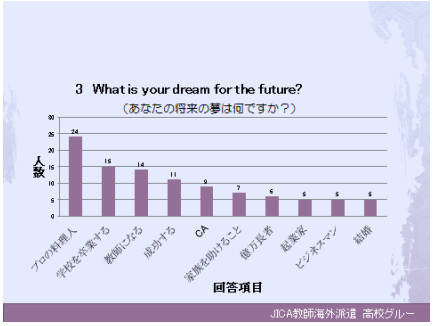
【資料 15】

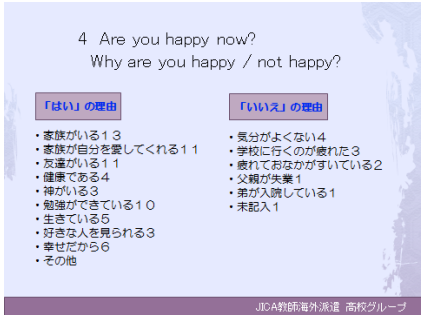
【資料 16】

５時限「フィリピンの高校生」

本時では，フィリピン研修前に本授業実施クラスでとったアンケート結果と，研修でフィリピンの同世代の高校生にとったアンケート結果を見比べることで，生徒に自分たちの考え方や生き方を見つめなおす機会とした。質問ごとに，まずはフィリピンの高校生のアンケート結果を示し，次に生徒自身のアンケート結果がどのようなものか当てさせ，その結果を比較させた。

以下はアンケートの一部とその結果の比較である。





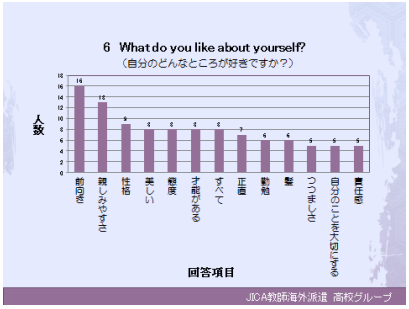
３　あなたの夢は？

（フィリピン）具体的な職業名が上位にきた。

（日本）なし，が最も多い回答であった。

４　あなたは幸せですか？

フィリピンも日本の高校生も幸せだと回答している生徒が多い。



５　尊敬している人は？

（フィリピン）先生，家族，親など。

（日本）いない，が最も多い回答であった。

６　自分のどこが好き？

（フィリピン）具体的な性格，容姿を回答。

（日本）３分の１以上が「嫌い」と回答。

以上の結果から，以下のようなことが分かった。

・貧しい暮らし中でもフィリピンの高校生は幸せと答えており，自分のことが好きである。

・フィリピンの高校生の方が，人生の目標や尊敬する人など具体的な将来の展望を持っている。
　ただし，このアンケートは学校に通えているフィリピンの高校生に聞いたものであり，これが全ての高校生の考え方を表しているものでは決してない。しかし，同時期に，日本とフィリピンの同世代の高校生からとったアンケート結果として，今の日本の高校生がフィリピンの高校生に比べて欠けているものをよく表していると生徒達も感じたようだ。

≪以下は，全授業を終えての生徒の感想の一部である。≫
・（フィリピンでの暮らしは）同じ世界とは思えなかった。悲しくなった。
・学校に行きたくても行けない，自分達にとっては日常的なことができないということは本当に辛いだろうし，生きるのも大変なのに頑張っている人がいることを知り，すごいと思った。
・先生が言われたように，フィリピンの子ども達は笑顔であふれていた。
・お金があることは幸せだと思うけど，それでも幸せを感じていない日本人も多いし，逆に，貧しくても頑張っている人がフィリピンには多いと感じた。
・フィリピンで活躍している日本人がいることを知り，嬉しかった。自分も何かできることを探してみたい。

☆成果と課題☆

　研修から帰国後すぐに授業を実施できなかったが，生徒は根気強く，楽しみに待っていてくれた。最初に授業を実施したクラスでは時間配分がうまくいかなかったが，徐々に改善していくことができた。今回の授業は，私がフィリピンで体験した研修内容をもとに授業を構成したものであるので，どうしても主観が入ってしまうことは仕方がないが，なるべく内容が偏らないよう，また，事実を正しく伝えることを心掛けた。その授業の流れの中で，生徒の反応や意見を確認しながら，私自身の考えも伝えるようにした。一つの結論を求める授業はしなかったが，生徒一人一人が自分の生き方について考える機会が与えられたのではないかと思う。反省点としては，時間的な制約と，生徒に伝えたいことが多すぎるということから，フォトランゲージなどのグループ活動の時間を十分確保できなかったことと，生徒の意見を共有する時間が十分持てなかったことだ。今後，新しい学年で，何をどう伝えるか十分検討していきたい。
　最後に，今回の授業を実践するにあたり，フィリピンでの研修はもちろん，事前・事後研修でも様々なアイデアを頂いたこと，そして素晴らしい仲間や人々に出会えたことに，改めて感謝の気持ちを表したい。
　JICA 九州をはじめ，関係各位の皆様，本当にありがとうございました。

☆参考資料・教材など☆

フィリピンで撮影した写真，購入したお土産，アンケート，ワークシート，「世界がもし 100 人の村だったら（2005 年 / 2007 年フジテレビ）」，「２４時間

テレビ（2012 年日本テレビ）」,

せかいのともだち

氏 名　ＫＵＢＯ　ＮＡＴＳＵＫＩ
曾於市立末吉小学校（鹿児島県）
担当教科：教科全般

●実践教科：学級裁量の時間
(道徳・学活)
●時 間 数：３時間
●対象学年：１年生　（２７名）

☆カリキュラム☆

実践の目的

○　世界に目を向け，自分たちの知っている「社会」「文化」「思想」とは違う文化社会があることを知る。
○　外国の文化や習慣，言葉を知ることで，外国へ親しみを持つ。
○　周りの人に感謝をし，今を大切に生きる気持ちを高める。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【１時限】 テーマ：フィリピンをさがそう。 ねらい： ①　日本とフィリピンを世界地図で探し，国を知る。 ②　子どもたちに豊かに想像させ，親しみを持たせる。	(1) 大きな世界地図の中から，日本とフィリピンを探し，気づいたことを発表。 (2) フィリピンに住む人を想像して書く。 人(髪の色，肌，目，鼻，耳)，食べ物	世界地図 ワークシート (世界白地図)
【２時限】 テーマ：フィリピンの子どもたち ねらい： ①　フィリピンが身近な国として親しみを持たせる。 ②　学校の様子を知り，自分の生活を比べることができる。 ③　今の生活に感謝をし，今を大切に生きる気持ちを育てる。	(1) 普段食べているバナナを配って，原産国を調べさせ，身近なものと感じさせる。 (2) フィリピンの人，食べ物，遊び，町並みの写真を見ながら，共通点と相違点を見つける。 (3) グループごとに，学校の様子が分かる写真を見て，フォトランゲージを行う。	バナナ 写真 ワークシート
【３時限】 テーマ：カメルーンをさがそう。 ねらい： ①　日本とカメルーンを世界地図で探し，国を知る。 ②　学校の様子を知り，自分の生活を比べることができる。	(1) 大きな世界地図の中から，日本とフィリピンを探し，気づいたことを発表。 (2) 掲示板の写真を見て，共通点と相違点を見つける。 (3) 学校で楽しいことを，カメルーンの友達に紹介するために絵を書いて交流をする。	

☆授業の詳細☆

【授業実践①】

１　テーマ：フィリピンをさがそう。

２　ねらい：日本とフィリピンを世界地図で探し，国を知る。
　　子どもたちに豊かに想像させ，親しみを持たせる。

３　用意した資料等

・世界地図

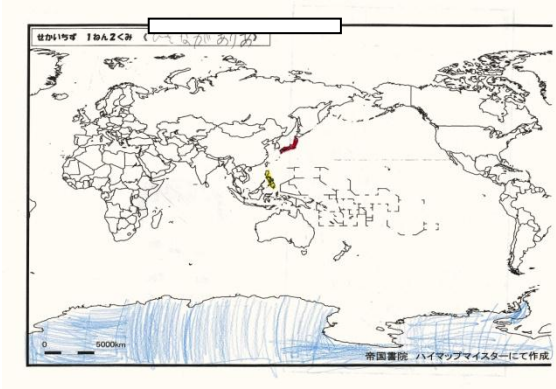
・ワークシート①－１，①－２

４　展開

	学習活動	子どもの反応	使用教材
導入	１　世界地図を見ながら，日本の位置，形を確認した。 ２　ワークシートに色を塗った。	・　日本の形を知っている子もいた。 ・　おもしろい形，小さいと言っていた。	壁掛け拡大世界地図 ワークシート①－１
展開	３　世界地図を見ながら，日本の位置，形を確認した。 ４　ワークシートに色を塗った。 ５　２つの国を見て，気づいたことを書いた。 ６　フィリピンに住む人の顔を想像して書いた。	・知らない子が，ほとんどで世界地図を一生懸命見て探していた。 ・小さい，言っていた。 ・　日本の下にある，つぶつぶ(島)がいっぱいある，小さいくて塗りにくいと，それぞれ感じたことを書いていた。 ・　髪や肌の色，食べ物など子どもたちは想像を広げながら，楽しんで書いていた。	ワークシート①-１ ワークシート１-②
まとめ	７　フィリピンについて知りたいことを書いた。	・子どもたちの興味，関心を高めるポイントを探るために設定した。学校の様子や遊びなどに関心があるが多かった。	ワークシート①－２

【ワークシート】

①　－１　　①－２



※子どもが記入済みのワークシートです。

【授業実践②】

１テーマ：フィリピンの子どもたち

２ねらい：フィリピンが身近な国として親しみを持たせる。

学校の様子を知り，自分の生活を比べることができる。

今の生活に感謝をし，今を大切に生きる気持ちを育てる。

３　用意した資料等

- バナナ(１人一本)
- 撮ってきた写真

４　展開

	学習活動	子どもの反応	使用教材
導入	１　バナナを見て，どこの国のものか調べた。	・　すごく関心が高まり，グループで一生懸命原産国を調べた。フィリピンという表記を見つけて喜んでいた。	バナナ

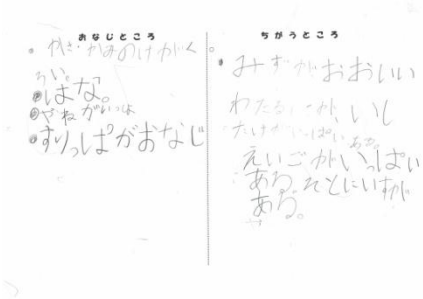
展開	２　写真を見て，日本と共通点と相違点を探した。 ３　フィリピンの学校の写真を見て，自分たちの学校生活と共通点や相違点をグループで探した。(フォトランゲージ)	・　自由発言で，たくさんの気付きがあった。 ・　同じ子ども，学校ということで目が輝き，楽しみながら取り組んでいた。	写真２０枚
まとめ	４　グループごとに写真を見て，分かったことを発表した。 ５　学校に行けない子どもが、フィリピンにいたことを話した。	・　一年生なりに，たくさんの気付きがあった。ほかのグループの写真もじっくり見たいという声も多かった。 ・　学校に行けないという事に驚いていた。	フォトランゲージシート

【資料】

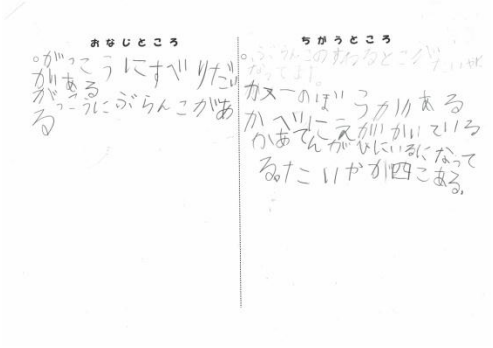
子どもたちと一緒に同じ所や違うところを探した写真。

【フォトランゲージで使用した写真と子どもたちの書いたワークシート】

（1） 学校



（2） ゆうぐ



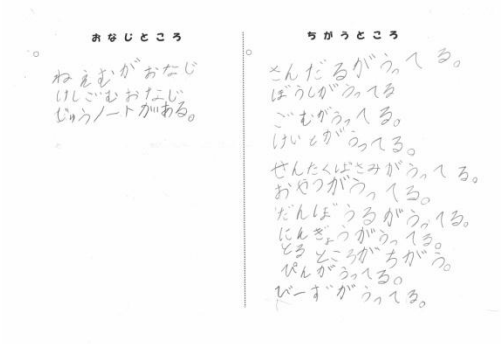
おなじところ

がっこうにすべりだいがある
がっこうにぶらんこがある

ちがうところ

カメーのぼうがある
かべにえがかいている
かあてんがひにいるになってる。たこいがが四こある。

（3）　こうばいぶ



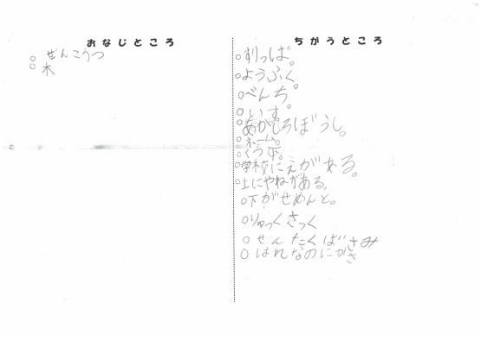
おなじところ

ねえむがおなじ
けしごむおなじ
じゅうノートがある。

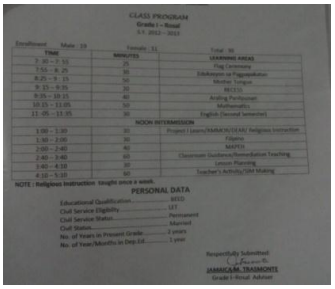
ちがうところ

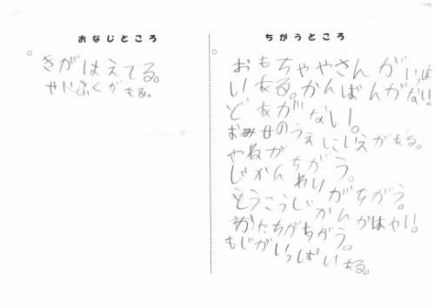
さんだるがうってる。
ぼうしがうってる
ごむがうってる。
けいとがうってる。
せんたくばさみがうってる。
おやつがうってる。
だんぼうるがうってる。
にんぎょうがうってる。
とろところかちがう。
ぴんがうってる。
びーずがうってる。

（4）　たいいく

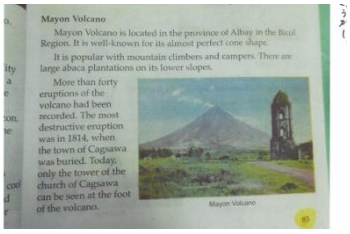


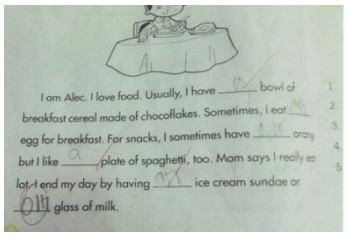
（5） 学校前，一年生の時間割

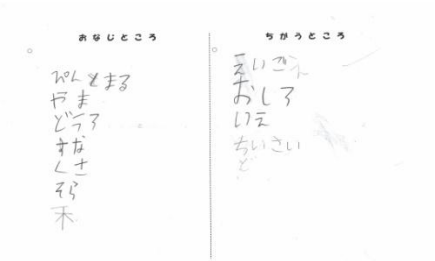




(6)教科書，ノート







☆成果と課題☆

【授業実践①】

成果

・　自分の知っている国の名前の場所を探すなど，世界に目が向けられるようになった。
・　異文化に対する垣根が小さい中で，自由な発想でフィリピンを想像することができた。
課題
・　日本とフィリピンの国土比較をする際に，気づいたことを書かせたが，２つを比べることができない児童が多かった。見るポイントを絞って書かせるべきであった。
感想
　フィリピンを題材にした授業をするにあたり，一年生の子どもたちに何を，どのように伝えられるかを悩んでいた。一年生だからこそ，異文化に対する垣根が小さく，吸収する物は大きいと思ったので，ありのままの，フィリピンのすがたを良い面を中心に伝えていくことにした。
　まずは，世界に目を向けさせたいという思いで実践した授業である。ＴＶや本などで，外国には親しみがある子が多かったが，世界地図を見たことはほとんどがはじめてであった。成果としてあげたように，日本のおもしろい形やフィリピンの島々の多さに気付き，ほかにも知っている国を探しては喜んでいたので興味，関心を高めることはできた。
【授業実践②】
成果
・　身近な食品(バナナ)が，フィリピンと子どもたちの実生活との結びつきを強め，興味，関心が高まった。
・　自由な発想，気付きが認められるため，子どもたちがのびのびと学習に参加できた。
・　私自身も授業展開も今回の実践を通して考えることができ，とても良かった。
課題
・　フォトランゲージに時間がかかった。
・　かわいそうという感想をもった子が数名いた。そのイメージではなく，子どもたちが自分の生活を考え，頑張る気持ちを高めさせたかったが，そこまで伝えきれなかった。
・　この学習で高まった関心を，普段の生活に生かすことが求められる。そのために，私自身がアンテナを高くはって，日本と外国とのつながりを見つけ，伝えていくことが求められる。
感想
　フィリピンはバナナが有名なんだよ！と話をしていたため，知っている子もいたが，実物をいたとき，フィリピンという表記を見つけたときの輝いた顔は生き生きしていた。普段食べている食べ物であったため，フィリピンがより身近な国として感じられた瞬間だった。

ここでフィリピンへの興味が高まり，私が撮ってきた写真を見せると，はじめて見る光景に様々な反応が見られた。ここで２０枚の写真を使って，日本との共通点，相違点を一緒に探した。次の活動のフォトランゲージで，自分たちで取り組めるように，つぶやきを拾って認めていき，比べ方を確認した。特に共通点で驚いていたのは，ポケモンのメンコ，白ご飯を食べているという点であった。

フォトランゲージでは机間巡視をしながら行ったが，学校という子どもたちに親しみのあるテーマなので比較が上手にできていた。私が意図しなかった点にも気づいているグループもあって，感心することも多かった。子どもたちにとっては，購買部にお菓子があることがうらやましかったようである。

最後のまとめとして，私が見てきた学校に行けず，働いている子どもたちの話をした。とても衝撃的だったようで，印象強く残ったようであった。夢に向かってチャレンジしたくてもできない子も世界にはいるが，日本は全員が教育を受けることができ、夢にチャレンジする場がある。だから今、夢を持って学習を頑張ろうということを伝えたくて，話の最初で働く子どもたちの写真とともに話をした。しかし、私の伝え方が十分ではなかったと悔しい思いをした。それでも、海外に対して興味が高まり，ニュースで聞いた外国の出来事や食べ物に表記されている国のことを話す子どもの姿が見るようになったのは，この実践があったからであると思う。

また，この授業は本県で行われている，地域が育む「かごしま」の教育県民週間の一環で行う「心の教育の日」という授業参観で，国際理解教育を人権教育と位置づけて行った。保護者の感想として，今の当たり前の生活に感謝をしたいという言葉もあり，私自身が感じてきたことを伝え、よかったと思った。また大きくなったときに、保護者から子どもたちへ還元する機会があると嬉しい。

【学習を通して】

授業実践③では，現在青年海外協力隊員としてカメルーンに派遣されている小学校教諭と一緒に取り組んだ実践である。視野の広がった子どもたちに，もっとつながりを持たせたいと思い絵の交流を行った。カメルーンに自分たちが書いたが届き，嬉しそうに手にしているカメルーンの子どもたちの姿を見て(写真)，すごいと大興奮の子どもたちで，カメルーンからの絵を手にしたときも，とても喜んでいた。

異文化への興味が高く，素直に受け入れることができる今の時期に，この実践ができてよかったと思う。まだまだ伝えたいことはありましたが，一年生なりに考え，発言することができた。高学年の授業実践では，より深く，自分たちにできることや本当に幸せとは…というテーマで実践をしてみたい。この学習を一時的のものではなく継続的に行うことが大切であり，もっと私自身が，勉強をして，学習に取り組んでいきたいと思った。

　最後に，この研修にあたり協力してくださった全ての方に感謝いたします。少しでも多くの子どもたちに，この学びを還元できるよう取り組んでいきたいと思います。ありがとうございました。

☆参考資料・教材など☆

・全部上記に掲載しました。

フィリピンの人々の生活から自分の生活を振り返ろう

宿里　京子（YADORI KYOKO）
指宿市立山川中学校（鹿児島県）
担当教科：英語科

●実践教科：英語，学活
●時 間 数：６時間
●対象学年：１年生，３年生
●対象人数：123 名

☆カリキュラム☆

実践の目的

○　フィリピンの同世代の子どもたちと自分たちの生活や考えを比較することで，自分の日頃の生活を見つめ直すことができる。

○　厳しい環境に負けずに生きるフィリピンの人々と彼らを支える日本人の存在を知り，世界のために行動を起こそうという気持ちをもつことができる。

授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【第１回】 テーマ：【自分の生活を振り返ろう】 ねらい：授業を受ける前の生徒の実態を把握する。	・　欲しいものや大事にしているもの，尊敬している人などについてアンケートを行う。	・アンケート用紙
【第２回】 テーマ：【自分たちとフィリピンの同年代の子どもたちの生活や考えを比較しよう】 ねらい：フィリピンの同年代の子どもたちの生活や考えを知り，自分たちの生活を見つめ直すことができる。	１　フィリピンの街並みや学校の様子を映像で紹介する。 ２　アンケートに答えてくれた子どもたちの学校での様子を紹介する。 ３　フィリピンの子どもたちと自分たちのアンケート結果を比較する。 ４　感想を共有する。	・フィリピンで撮った写真 ・アンケート結果
【第３回】 テーマ：【フィリピンの人々の生活を知ろう】 ねらい：厳しい環境に負けずに生きるフィリピンの人々と彼らを支える日本人の存在を知り，世界のために行動	１　フィリピンで作られた商品を見て，気づいたことを発表する。 ２　フィリピンの現状を知る。（フォトランゲージ） (1)　グループに分かれ，写真を見て気づいたことや疑問に思ったことなどを書き	・　フィリピンで購入した商品 ・　写真(拡大してラミネートしたもの) ・　付箋

を起こそうという気持ちをもつことができる。	込む。 (2)　各グループで出た内容を発表し，共有する。 (3) 各写真についての説明を聞く。 ３　フィリピンの人々を支援する日本人について知る。 ４　国際協力活動を行っている小中高生について知る。 ５　教師の説話を聞く	
【第４回】 テーマ:【JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストに応募しよう】 ねらい:授業を通して考えたことを原稿用紙に書くことで,考えを深めたり自分にできることを考えたりすることができる。	・　授業を受けた感想を原稿用紙１枚以上にまとめる。	・　原稿用紙
【第５回】 テーマ:【残食について考えよう】 ねらい:生徒の書いた作文を校内放送で紹介することによって,食べ物の大切さを実感することができる。	・　世界の食糧事情と日頃の給食の残食について考えた生徒の作文を給食時間に放送する。	・生徒作文
【第６回】租税教育掲示 テーマ:【フィリピンの人々の暮らしと税制について知ろう】 ねらい:フィリピンの街や学校の現状がフィリピンの歴史や税制に関わっていることを知る。	・　フィリピンの街や学校の様子がわかる写真や税制について書かれた資料などを掲示する。	・掲示物

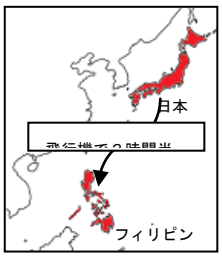
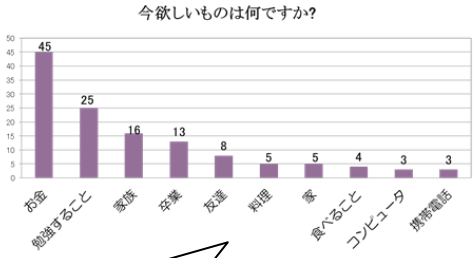
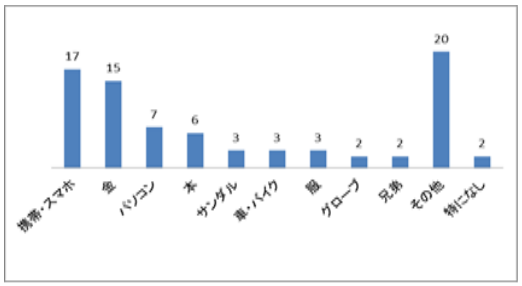
☆授業の詳細☆

●第１回　【自分たちの生活を振り返ろう】

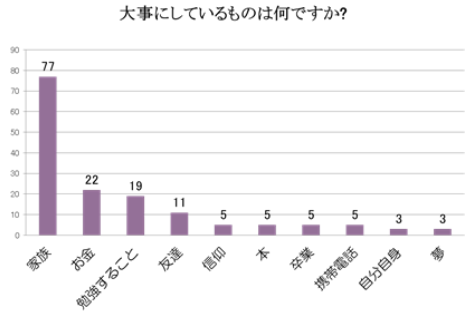
フィリピンの授業を行う前に，生徒の実態を調査するために，アンケートを実施した。内容は，大事にしているものや今欲しいもの，将来の夢などである。

●第２回　【自分たちとフィリピンの同年代の子どもたちの生活や考えを比較しよう】

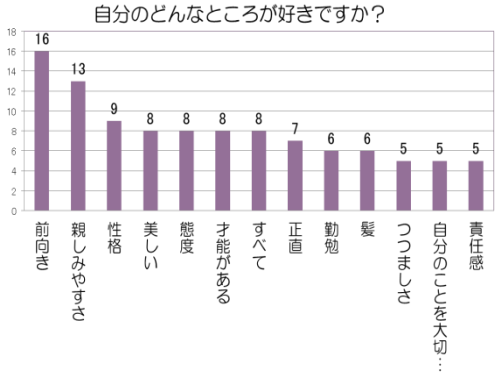
次のような展開で授業を行った。

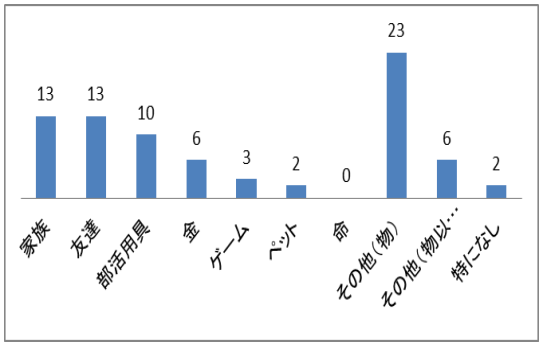
過程	学習活動	教師の働きかけ・生徒の反応など
導入 10分	1　フィリピンの場所や特産物などを確認する。  ↑様々なトロピカルフルーツ 2　フィリピンの街並み，世界遺産，人々の映像を見る。	・　フィリピンで撮った写真を編集し，スライドショーで流しながら説明をする。 スラム街の家　→
展開 30分	3　フィリピンの同年代の子どもたちの生活を知る。 (1) 学校の様子を知る。 ↑トライシケルに乗って通学する。 ↑調理実習の様子 (2) フィリピンの子どもたちの考えを知る。 フィリピンの子どもたち  ・「勉強すること」「卒業」など学業に関すること	・　フィリピンで出会った高校生(日本では中学生の年代)の写真を見せながら，学校の様子を紹介する(時間割や授業内容，通学方法など)。 サンタバーバラ国立高校 生徒数：3000 人 職業訓練学校(調理,服 ↑アンケートに協力してくれた子どもたち。 ・　フィリピンの子どもたちに実施したアンケート結果を提示する。 山川中学校３年生 

← マニ

<table>
<tr>
<td></td>
<td>


・家族を大事にする人が多い。・信仰が入っている。



4　フィリピンと自分たちとの生活や考えを比較した感想をグループで共有する。
5　グループで出た感想を発表する。
</td>
<td>


※フィリピンの人々は「自分が好きなのは当たり前」であると言われ，「自分のどんなところが好きか」という
・　自分たちのアンケート結果と比較させる。
・ グループをまわってアドバイスをする。
</td>
</tr>
<tr>
<td>まとめ
10分</td>
<td>6　教師の説話を聞く。

7　感想を書く。</td>
<td>・ 日本とフィリピンのそれぞれのいいところを確認し，良いところを参考にするように話をする。
・ フィリピンの人々の笑顔の写真を見せる。</td>
</tr>
</table>

＜生徒の感想＞

- フィリピンでは日本より生活が豊かでないのに，今幸せと答えていた人が多くてびっくりした。
- フィリピンの子どもたちはみんな自信を持っていてすごいと思った。見習いたいと思った。
- 日本の学校とは違って，中学校もないし，卒業するにも指定の点数をとらないといけないというのを聞いて，大変だなと思った。
- 私は，洋服を買うためにとか自分のことだけにお金を使いたいと思っていた。だけど，フィリピンの人たちは，お金は欲しいけど私とは違う使い方をするんだろうと思った。

●第３回　【フィリピンの人々の生活を知ろう】

次のような展開で授業を行った。

過程	学習活動	教師の働きかけ・生徒の反応など
導入 (3 分)	1　フィリピンで作られた商品の写真を見て，感想を発表する。 	・　フィリピンで購入した商品を見せる。 ・　感想を聞く。
展開 (27)	2　フィリピンの現状を知る。（フォトランゲージ） (1) グループに分かれ，写真を見て気づいたことや疑問に思ったことなどを書き込む。 (2) 各グループで出た内容を発表し，共有する。	・　商品が作られた地域の写真を提示する。 ・　自由な雰囲気の中で素直に意見が出せるよう配慮する。 A B C D E F G H ・　全員に聞こえるような大きな声で発表させる。

	 山のようなものが見える。 山の頂上にはクレーンのようなものがあ 近くをよく見るとゴミが見える。ゴミの山だろうか。 (3) 各写真についての説明を聞く。 A:首都マニラ郊外にあるゴミ山。ゴミを拾ってその日の食費を稼ぐ人々がいる。 B:ゴミ山の近くで縫製の仕事をする女性たち。ゴミ山で働くより安全で安定した仕事。 C:ゴミ山のすぐ近くの家。幼い子ども５人と高校生の姉，祖母の７人で暮らしている。 D:雨で水に浸かった小学校。少量の雨でも浸水してしまう。 E:ゴミをリサイクルしてバッグを作る女性。安全で安定した仕事。 ３　フィリピンの人々を支援する日本人について知る。 ４　国際協力活動を行っている小中高生について知る。	
ま　と め (10)	５　感想を書く ６　教師の説話を聞く	・ フィリピンで支援を続ける日本人の言葉を紹介する。 「どんなに小さくても自分にできることがあるのなら，行動を起こそう。そうすれば，世界は変わっていく。」

＜授業の様子＞

●第４回　【JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストに応募しよう】

授業後，考えたことや感じたことを作文にまとめさせた。作文にまとめさせたことで授業を振り返り，深く考えることができたようである。生徒の書いた作文を JICA 中学生・高校生エッセイコンテストへ応募した。１年生と３年生で合計９９点の作文を応募し，学校賞をいただいた。

フィリピンの「豊かな心」

指宿市立山川中学校　１年　岩﨑　詩織

わたしは，フィリピンはどういう国なのかあまりよく知りませんでした。今回の授業で，フィリピンには色々大変なこともありますが，物を大切にして決して無駄にせず工夫して使い続けるとてもすばらしい国だと思いました。そして，日本とフィリピンを比べてみると，日本の方が物に囲まれて豊かですが，その分ごみがたくさん捨てられ，まだ使えるものさえも捨てられていると思いました。「もったいない」きっと，フィリピンの人々は誰もがそう思うでしょう。確かにフィリピンは他の国と比べると不便かもしれません。ですが，強くたくましく生きていて，豊かな心を持っているということがわかりました。わたしは，フィリピンの豊かな心を見習い，豊かな生活だけでなく豊かな心を持つ日本にするために，まず自分から物を大切にする習慣をつけたいと思います。

世界に目を向けて

指宿市立山川中学校　３年　紺屋　菜々美

二学期に受けたある授業で，私は大きなゴミの山を見た。それは，先生が研修で行ったフィリピンの写真だった。初めて見たとき，私はゴミだということに気づかなかった。なぜならとても大きな山だったからだ。まさか，この山全部がゴミでできていることはないだろうと思っていた。しかし，先生が写真を拡大してみると，この山は全部ゴミであり，その上に人がいることが分かった。この人たちは，山の上で何をしているのか，疑問を持った。先生が言うには，「このゴミの中から，アルミなどのものを探し出す。それらを売って生活している。」ということだった。信じられなかった。まず，ゴミを放置するということに驚いた。日本では，ゴミは燃えるものは燃やし，リサイクルできるものはリサイクルする。確かに街はきれいになるが，ゴミを燃やすという行為は，環境に良くない。だから，フィリピンではゴミを燃やしてはいけないと法律で定められているそうだ。しかし，ゴミを放置することは衛生的によくないはずだ。ゴミの山のふもとにある町に住んでいる子どもたちは，ゴミ捨て場から発生するダイオキシンなどの有害物質のため，病気になる子どももいる。ゴミを拾い，ゴミ捨て場にある食量をたべないと，生きていけないほど過酷な生活を送っている。私と同じくらい，もしくは私よりも小さな子どもたちがゴミを拾って生活しているなんて，想像もできなかった。

私は，先生に他の写真も見せてもらった。過酷な現状を映している写真もあれば，子どもたちがにっこりと笑顔で笑っている写真もあった。瞳がとても澄んでいて，かわいかった。そんな子どもたちの笑顔を絶やしてはいけない。まず，自分に何ができるか，何をすべきかを，世界に目を向けて考えていきたい。

●第５回　【残食について考えよう】

エッセイコンテストに応募した作文の中に，残食について書かれたものがあった。上記の作文を食育の日の給食時間に，校内放送で紹介した。放送後，「もったいないよ。」と残そうとする生徒に声をかける生徒や一口でも多く食べようとする生徒の姿が見られた。

だれかの笑顔を守りたい

指宿市立山川中学校　３年　前村　有香

私たちは世界の人たちから見ればすごく贅沢に生きていると思われても仕方ありません。一日のご飯に困っている人が世界中にたくさんいるのに平気で好き嫌いや給食を残してしまします。私もその一人です。給食を残したときは，あまり罪悪感はありません。しかし，その裏でご飯やそのご飯を買うお金に困っている人がいることを知りました。

夏休みにフィリピンに研修に行かれた先生が私たちにフィリピンのことを授業してくださいました。私の想像ではあまりいいものではありませんでしたが，たくさんの写真を見せてもらい，立ち並ぶ大きなビルに「すごく都会だ！」と思いました。都会の写真を見ていくうちに「えっ…。」と思うような写真がありました。先ほどの写真とは全く違う都会とは真逆の光景でした。やっと雨風しのげるような家ばかりで一つの部屋に大人数で住んでいるものや，大きな「ゴミの山」で仕事をする人，もっと勉強したくて学校に通う笑顔の子どもたち…。私たちは勉強を出来ればしたくないと思っているのに，あの子たちは勉強したいんだ…と思いました。学校にはちゃんとした机も全員分ありません。私たちには勉強できる環境もあるのに勉強したくないと思う悩みは贅沢なのだと気づきました。一日のご飯に悩む人たちは「ゴミの山」に向かい，売れるゴミを探し一日のご飯代をやっと稼ぐという大変重労働な仕事をしています。なのに，平気で給食を残す自分が今思うとすごくはずかしいです。この体験がなければ私は，恥ずかしさなんか考えていなかったと思います。この体験で私は今の世界の現状と私たちが起こすべき行動を考えました。私が毎日できること，それは給食を残さないこと。そこから色々できることを考えます。一人の小さな力でもきっと困っている人の笑顔を守れるはずだから，私たちは動きます。

●第６回　【フィリピンの人々の暮らしと税制について知ろう】

本校では本年度，租税教育の推進に取り組んでいる。国際理解教育の視点からフィリピンの人々の暮らしと税制についてまとめたものを校内に掲示した。生徒たちは，フィリピンが植民地支配されていたことや貧富の差が激しいこと，富裕層が優遇されている税制などについて興味を持ったようであった。

◦学校内に掲示した資料「フィリピンの人々の暮らしと税」

☆成果と課題☆

＜成果＞

生徒たちは，他国の生活や同年代の子どもたちの様子を知ることに興味津々であった。自分たちと違うところに驚いたり，信じられないという反応を示したりした。特にフィリピンの同年代の子どもたちが自分に自信を持っていることや前向きな考えを持っていることには，驚いていた。世界には様々な生活があり，考え方も多様であることを学ぶことができたようである。また，感想の中には「見習いたい。」という言葉も多く，生徒たちは自分の生活を見直すきっかけにもなったようである。

エッセイコンテストへの応募を目標にしたことで，どの生徒も 400 字詰めの作文用紙１枚以上の作文を書くことができた。自分の考えを３枚にわたって書いた生徒もいた。内容も濃く，自分の将来の夢と関連づけて書いたり，世界の現状を自分で調べて書いたりする生徒もいた。授業の中で短い時間で書いた感想よりも内容が深く，自分の考えを深めることができた。

＜課題＞

今回の研究実践では，授業実践とエッセイコンテストへの応募が主な実践であった。考えの変容や意識の変化は見られたが，国際理解教育の最終段階である「行動する」という段階までは持っていくことができなかった。今後は，授業で学んだことを人に伝えたり，世界の国々のためにできることを実践したりするなど「行動する」段階まで実践できるよう，発展させていきたい。そのために，JICA の出前授業を利用するなど，生の声を生徒に届けることが必要であると思った。また，今後は国際理解教育とは何かという研究の部分も深く追及していきた。先行実践を研究したり，国際理解教育の研究論文を読んだりするなど研究を深めていきたい。

☆参考資料・教材など☆

・フィリピンで撮った写真・フィリピンで購入した商品

・「JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 2011 優秀作品集」（独立行政法人国際協力機構 JICA）

＜教師海外研修同行者より＞

　フィリピンでの研修中は、日本では想定することができないような様々なハプニングにも見舞われましたが、参加者
　全員が無事に帰国することができました。
　現地ではフィリピンの”光と影”を見つめ、フィリピンの現状、課題を目の当たりにしました。そこには、厳しい状況の中であっても笑顔を絶やさず、明るく懸命に生きる人々の姿がありました。そして、現地で精一杯活動する日本人の姿がありました。
そういった人々の“生き方”を伝え、「日本のこどもたちに、今の自分たちを見つめ直す機会を作りたい」、といった意見が先生方から聞かれました。

　帰国後、先生方はフィリピンでの研修で感じてきたことを学校教育の中で還元するため、
それぞれが工夫を凝らした授業を実践されてきました。
　実践授業で先生方が蒔いた種がこどもたちの心の中で大きく育っていくこと、また各地域での国際理解教育、開発教育活動の輪がより一層拡がっていくことを祈っております。
　私ども JICA 九州、国際協力推進員も地域の JICA 窓口として先生方の活動をサポートしていきたいと思っております。

　今回の研修実施にあたり事前研修、事後研修にご協力いただきました講師の皆様、また現地にてお世話になりました研修受入れ先団体の皆様、JICA フィリピン事務所スタッフの皆様、有難うございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

JICA デスク福岡　国際協力推進員　古賀知美

フィリピン研修３日目訪問先　NPO 法人ソルト・パヤタスにて